慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地域住民とケアスタッフを緩やかにつなぐ「飾れるツリー」
Sub Title	"Decorable tree" : bringing a subtle connection between local residents and their care staff
Author	荻野, 香凜(Ogino, Karin) 佐藤, 千尋(Satō, Chihiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科
Publication year	2021
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2021年度メディアデザイン学 第903号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00002021-0903

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文 2021年度

地域住民とケアスタッフを緩やかにつなぐ「飾れるツリー」

慶應義塾大学
大学院メディアデザイン研究科

荻野　香凜

本論文は慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科に
修士 (メディアデザイン学) 授与の要件として提出した修士論文である。

荻野　香凜

研究指導コミッティ：

佐藤 千尋 専任講師　(主指導教員)
大川 恵子 教授　(副指導教員)

論文審査委員会：

佐藤 千尋 専任講師　(主査)
大川 恵子 教授　(副査)
岸 博幸 教授　(副査)

修士論文 2021 年度

地域住民とケアスタッフを緩やかにつなぐ「飾れるツリー」

カテゴリ：デザイン

論文要旨

COVID-19 の影響により孤立化の課題がさらに深刻化する今、高齢化が進む首都圏郊外団地周辺の地域コミュニティーでは、地域内での支え合いを必要とする高齢者住民と、地域順応型の医療・福祉ケアを目指すケアスタッフを繋ぐデザインソリューションがより一層求められている。

本研究では、モノを介したコミュニケーションの視点から、地域に合った繋がりをもたらすことを目的に、地域の社会福祉士と共に「飾れるツリー」のデザインを行った。本論文では、様々な表現・共有方法の模索から行った「飾れるツリー」のデザインについて述べ、地域のステークホルダーとの共創を通じて実現した地域住民とケアスタッフの緩やかな繋がりについて述べる。

「飾れるツリー」は地域住民とケアスタッフが自由に飾り付けることができるツリー型オブジェであり、筆者は手芸品を飾れる手芸ツリーと、経験を共有できる短冊ツリーの２種類のデザインを行った。さらに両ツリーは、自由に眺めたり、手にとってみたり、周りの人と雑談することができるなどのあらゆる相互性を持つ。

本研究では地域住民とケアスタッフへの参与観察や半構造化インタビューなどを繰り返し行い、定性的にコンセプトを検証した。その結果、「飾れるツリー」を中心として「作る」「書く」「飾る」「話す」「貰う」「観る」という多様なコミュニケーションから地域コミュニティーを緩やかに繋ぐことができたと評価した。そしてその繋がりは地域住民の新たな生活の楽しみや喜びへ貢献し、ケアスタッフに対しては個別ケアを行うための住民理解を支援する可能性に貢献した。

キーワード：

デコレーション, コミュニケーション, 繋がり, 手工芸, 物質性, サービス交換

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科

荻野　香凜

Abstract of Master's Thesis of Academic Year 2021

"Decorable Tree": Bringing a Subtle Connection between Local Residents and Their Care Staff

Category: Design

Summary

At a time when the elderly's isolation is accelerating due to COVID-19, there is a greater need for design solutions that can connect elderly residents living in suburban areas and the local care staff who aim to provide locally adapted care. In this research, the author designed the "Decorable tree" from the perspective of communication through objects, aiming to bring connections suitable for the local community. This paper explores various methods of communication and describes the subtle connections delivered through the "Decorable tree", which is co-created with various stakeholders in the local area.

The "Decorable tree" is a tree-shaped object that can be freely decorated by local elderly residents and local care staff. There are two types of trees: the handicraft tree, where people can display their creations and receive decorations, and the Tanzaku tree, where people can share their experiences according to a theme. These create a variety of communication styles, loosely connecting residents and staff. This subtle connection can be gained both actively or passively, which works as "a ticket to talk or to be silent".

The concept was qualitatively evaluated through repeated participatory observation and semi-structured interviews. As a result, it was evaluated that the "Decorable tree" created a subtle connection in the local community through a variety of communications methods such as "making", "writing", "decorating",

"talking", "receiving" and "observing". Furthermore, this connection contributed to the enjoyment or the pleasure of the residents' daily lives, and provided the care staff with a possibility to have a better understanding of their residents in order to provide individualised care.

Keywords:

decor, communication, connection, crafting, materiality, service exchange

Keio University Graduate School of Media Design

Karin Ogino

目　　次

第 1 章　序論 **1**
1.1. 八千代市米本団地 1
1.1.1　孤立と繋がり 3
1.1.2　モノを介した繋がり 4
1.2. 本研究で提案する「飾れるツリー」について 5
1.3. 研究方法 8
1.4. 本論文の構成 8

第 2 章　関連研究 **9**
2.1. 飾る行為 9
2.1.1　慣習としての「飾る行為」 9
2.1.2　インタラクションデザインとしての「飾る行為」 11
2.1.3　空間を場所に変える「飾る行為」 12
2.2. ものづくりとウェルビーイング 13
2.2.1　余暇活動がもたらすウェルビーイング 13
2.2.2　作る行為がもたらす帰属意識 13
2.3. “A ticket to talk or to be silent” 14
2.3.1　自己開示 14
2.3.2　地域間コミュニケーション 15
2.3.3　相互受動性 15
2.4. 本研究が貢献する領域 16

第 3 章　デザイン **17**
3.1. デザイン手法 17

3.2. コンセプト 18
3.2.1 エコシステム 20
3.3. 事前調査：阿蘇・睦地域包括支援センターへのインタビュー . . . 23
3.4. 事前実験 1：米本団地でのエスノグラフィー調査「みんなで作るクリスマスツリーワークショップ」 24
3.4.1 背景：ワークショップ (以下 WS) 実施の背景 24
3.4.2 米本コミュニティスペース「ほっこり」についての概要 . 24
3.4.3 目的：WS 目的 25
3.4.4 内容：WS 内容 26
3.4.5 結果：WS 結果 27
3.4.6 考察：WS 考察 30
3.5. 事前実験 2：ものを一緒に作って贈り合う行為の調査「ITOMA 内オンラインワークショップから」 32
3.5.1 背景：WS 背景 32
3.5.2 目的：WS 目的 32
3.5.3 内容：WS 内容 32
3.5.4 結果：WS 結果 32
3.5.5 考察：WS 考察 半構造化インタビューから 33
3.6. 事前実験 3：ものづくりではない表現の可能性の調査「米本団地で行った思い出共有ブック」から 34
3.6.1 背景：思い出共有ブック作成背景 34
3.6.2 目的：思い出共有ブック作成目的 34
3.6.3 内容：思い出共有ブック作成 34
3.6.4 結果：思い出共有ブック使用結果 34
3.6.5 考察：思い出共有ブック使用後の考察 36
3.7. 社会福祉士さんへの聞き取り調査 1「思い出共有ブック」から . . 37
3.7.1 背景：社会福祉士さんへの聞き取り調査 1 37
3.7.2 結果：社会福祉士さんへの聞き取り 38
3.7.3 考察：社会福祉士さんへの聞き取り 38

3.8. 設計：ペルソナ設計 39
3.8.1 コミュニケーションレベル：受動性・能動性 39
3.8.2 ペルソナの設計へ 40
3.9. 設計：みんなが参加できる「つながる木」 43
3.9.1 コンセプトスキーム：みんなが参加できる「つながる木」 43
3.9.2 内容 1：短冊スキット 1 43
3.9.3 結果 1：短冊スキット 1 43
3.9.4 考察 1：短冊スキット 1 45
3.9.5 内容 2：短冊スキット 2 46
3.9.6 結果 2 と考察 2：短冊スキット 2 の結果 46
3.10. 価値提案：「みんなで彩る〇〇ツリー」 48
3.10.1 背景と概要:「みんなで彩る〇〇ツリー」 48
3.10.2 内容:「みんなで彩る〇〇ツリー」 48
3.10.3 結果:「みんなで彩る〇〇ツリー」 53
3.11. 価値共創：「よなだんツリー手芸版」誕生 54
3.12. プロダクトデザイン 58

第 4 章 価値検証 60
4.1. 検証方法 60
4.2. 価値検証 1「阿蘇・睦地域包括支援センター」での参与観察 . . . 62
4.2.1 環境設定 62
4.2.2 結果 1：2021 年 9 月 8 日-9 月 24 日 63
4.2.3 結果 2：2021 年 9 月 27 日-9 月 30 日 64
4.2.4 考察 74
4.2.5 価値検証 1 のまとめ 76
4.3. 価値検証 2: フォーカスグループディスカッション 76
4.3.1 環境設定 77
4.3.2 結果 79
4.3.3 考察 85
4.3.4 価値検証 2 のまとめ 86

4.4. 価値検証 3: 10 拠点への実装拡大 87
4.4.1 ケース 1: 阿蘇・睦地域包括支援センター 89
4.4.2 ケース 2: UR 米本団地管理事務所 91
4.4.3 (ケース 3: UR 村上団地管理事務所) 97
4.4.4 ケース 4: 八千代市社会福祉協議会 97
4.4.5 ケース 5: オリーブ薬局 101
4.4.6 ケース 6: 高齢者総合福祉施設 はなみずき 102
4.4.7 ケース 7: 特別養護老人ホーム 美香苑 107
4.4.8 ケース 8: 米本コミュニティスペース ほっこり 107
4.4.9 ケース 9: 睦地区サロン「麦の会」 111
4.4.10 (ケース 10: 米本南自治会) 116
4.4.11 10 拠点の実装を受けての考察 119
4.4.12 価値検証 3 のまとめ 121

第 5 章 結論 122
5.1. 「飾れるツリー」における緩やかな繋がり 122
5.2. 緩やかに繋がった結果 123
5.3. 緩やかな繋がりをもたらす「飾れるツリー」の要素 124
5.3.1 本研究における緩やかな繋がりの限界点 124
5.4. 今後について 125
5.4.1 「飾れるツリー」の新規拠点における発展を促す要素 . . . 125
5.4.2 「飾れるツリー」が適する環境的要素 126

謝辞 128

参考文献 130

付録 135
A. ツリースポット紹介チラシ 135
B. ダイアリー記述 138

図　目　次

1.1　米本団地 2
1.2　「飾れるツリー」のエコシステム 7
1.3　「飾れるツリー」の使用例 7

2.1　ツリーと飾りを手に持つ男女の絵 10
2.2　日本三大　「吊るし雛」 11
2.3　多様な人とモノとの関わり方 : 相互能動性と相互受動性の分析 (筆者再構成) 16

3.1　「飾れるツリー」における様々なコミュニケーション (McCarthy & Wright [1] [2] のフレームワークをもとに作成) 19
3.2　「手芸のツリー」のエコシステム 21
3.3　「飾れるツリー」のエコシステム 22
3.4　曽祖母の作っていたオブジェ(左) デイケアでいただいた折り紙 (右) 24
3.5　持参した作り方シートとサンプル作品 26
3.6　ほっこりを中心とした組織図 27
3.7　可愛い柄に人が集まるシーン 29
3.8　ボランティアメンバー A が私から習ったことを利用者に教えるシーン 29
3.9　作ったものをギフトするシーン 30
3.10　ツリーメイキング参加におけるアクションモデル 31
3.11　ランプ WS インタビュー結果 33
3.12　コサージュWS インタビュー結果 33
3.13　思い出共有ブック中身 1 35
3.14　思い出共有ブック中身 2 35

3.15 思い出ブックを見ながら談笑する様子 37
3.16 現場の人のコミュニケーションレベル 41
3.17 ペルソナ設計 42
3.18 コンセプトスキーム「つながる木」 44
3.19 ツリープロトタイプ 1(木) 45
3.20 ツリープロトタイプ 1(短冊) 46
3.21 短冊スキット 2 47
3.22 ツリーのイメージ図と構成要素 50
3.23 関わりうるアクターと役割 51
3.24 みんなで作るよなだんツリーの楽しみ方 51
3.25 ツリー実寸ペーパープロトタイプ 52
3.26 3D ミニサンプル 52
3.27 社会福祉士さんからメールでいただいた資料 (2021 年 9 月 9 日) . 55
3.28 価値共創：よなだんツリー手芸版誕生 56
3.29 価値共創：手芸ツリー：エコシステム 57
3.30 プロダクトデザイン 59

4.1 拠点とデータ収集期間及び方法の一覧 61
4.2 実験日程とデータ収集方法 63
4.3 実験開始時のツリーの様子 63
4.4 短冊に書き込む友達三人組 65
4.5 杖を持った女性 (左)、相談に来ていた女性 (右) 66
4.6 営業のお兄さん 66
4.7 ツリーをぐるっと回して選ぶ女性 68
4.8 昔作っていた作品について話す女性 68
4.9 ツリーにかけられたニット帽を動かす女性 69
4.10 イチゴ型のたわしを貰って喜ぶ女性 69
4.11 ツリーを触ったり、二個目を貰ったりする友達組 69
4.12 スタッフに勧められたものをもらう女性 70
4.13 スタッフにどうぞと言われて喜ぶ女性 70

4.14 手芸の話をしても、もらうのは遠慮する女性 70
4.15 かっぱを貰って喜ぶ女性 71
4.16 かかっているものを念入りに見る手芸好きの女性 71
4.17 通りすがりに見る人たち 1 71
4.18 通りすがりに見る人たち 2 72
4.19 職員さんが飾り付けをする様子 73
4.20 二個目の木を持ってくる職員さん 73
4.21 職員さんが飾り付けをする様子 74
4.22 「飾れるツリー」における緩やかな繋がり 77
4.23 地域ケア会議ステークホルダー 78
4.24 ツリーを中心に置いた会議の様子 78
4.25 会議で新たに受けた注文数 80
4.26 ボランティアカードとのコラボ 80
4.27 参加者の様々なインタラクション 1 83
4.28 参加者の様々なインタラクション 2 84
4.29 拠点とデータ収集期間及び方法の一覧 88
4.30 地域包括支援センター 9 月 22 日〜10 月 8 日 92
4.31 地域包括支援センター 10 月 15 日〜11 月 16 日 93
4.32 UR 管理事務所 10 月 8 日〜10 月 22 日 95
4.33 UR 管理事務所 10 月 26 日〜11 月 12 日 96
4.34 八千代市社会福祉協議会の Facebook から 1 99
4.35 八千代市社会福祉協議会の Facebook から 2 100
4.36 オリーブ薬局 すずらん薬局の様子 103
4.37 はなみずき 10 月 18 日〜11 月 22 日 106
4.38 文化祭で展示される様子 108
4.39 米本コミュニティスペースほっこり 10 月 5 日〜10 月 15 日 112
4.40 米本コミュニティスペースほっこり 10 月 22 日〜11 月 12 日 . . . 113
4.41 手芸品収穫の様子 117
4.42 手芸の会の様子 118

5.1 「飾れるツリー」における緩やかな繋がり 122

A.1 ツリースポット紹介チラシ表 136
A.2 ツリースポット紹介チラシ裏 137

B.1 UR 米本団地管理事務所 生活支援アドバイザーさんによる日誌 1 139
B.2 UR 米本団地管理事務所 生活支援アドバイザーさんによる日誌 2 140
B.3 UR 米本団地管理事務所 生活支援アドバイザーさんによる日誌 3 141
B.4 UR 米本団地管理事務所 生活支援アドバイザーさんによる日誌 4 142
B.5 UR 米本団地管理事務所 生活支援アドバイザーさんによる日誌 5 143

第 1 章
序　　論

1.1. 八千代市米本団地

“ 2020 年 9 月 24 日、突然の同行が決まった阿蘇・睦地域包括支援センター訪問。がらんとした東西線で心地よい揺れにうたた寝をしてること 1 時間、千葉県村上駅に到着した。時刻は 9 時 17 分、駅構内は閑散としていた。外に出て周りを見渡してみると、今までで見た中で一番大きいイトーヨーカドーが立ちそびえ、米本団地に向かう道中の車からは、大きなお店がポツン・ポツンと現れては消え、やたらとでかい店の看板がよく目についた。自分にはあまり馴染みのない「郊外」の景色だった。30 分ほど広い道路を走ったあと、米本団地の敷地にクネクネと車を動かしながら入っていき、地域包括支援センターに到着した。中に入っていくと、人のバタバタする動きを感じ、車窓から見た「郊外感」とは対照的な「生活感」を一気に体感した。地域包括支援センターは団地に少し入ったところにあり、奥の部屋に案内されると、包容力のある優しそうなおばさんと、少年っぽい雰囲気を持つお兄さんがいて、まずはお茶でも、とお茶を出していただいた。”

(筆者米本団地初訪問エスノグラフィー記より抜粋 2020.09.24)

私は 2020 年 9 月 24 日に初めて八千代市米本団地に赴き、地域包括支援センターの主任ケアマネージャーと社会福祉士に対して行われたインタビューに同席し、団地に住む高齢者の現状や支援体制、現在の課題や今後期待したいことなどについてお話を伺った。

駅前　バス停

米本団地までの道中

米本団地前の交差点

米本団地

団地内コミュニティースペース前

団地内並木通り

図 1.1　米本団地

八千代市米本団地は1970年に千葉県北西部の八千代市に建設された106棟の大規模団地であり[1]、2021年9月30日現在5218人[2]が住んでいる。そして高齢化率は44.8％[3]と、他の八千代市内よりも高い水準である。地域包括支援センターは、可能な限り住み慣れた地域で自立した生活を続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活の視点から包括的に支援することを目的とした市町村の施設である[4]。阿蘇・睦地域包括支援センターは団地内に所在しており、ケアマネージャー、保健師、看護師、社会福祉士など約8名の医療・健康・福祉の専門家が業務に当たっている。

本研究では、社会福祉士や生活支援アドバイザーなどの高齢者をケアする立場の人、そしてそこで暮らす住人のコミュニティーに対する参与観察を繰り返すことにより、現場の生活文脈やニーズに合った「繋がり」の形を明らかにし、「飾る」という視点から地域を緩やかにつなぐ「飾れるツリー」のデザインを行った。

1.1.1 孤立と繋がり

高齢者のフレイルや認知症の問題やコロナの影響により人々の孤立が拡大している今、高齢化が進む郊外大型団地で地域包括ケアに務める職員の方々は、住人たちが生涯長く健康に生活を送れるように日々様々な施策作りに尽力している。

阿蘇・睦地域包括支援センターで社会福祉士を務めるUさんは、特にコロナ禍によって加速する孤立化を課題と挙げ、解決の糸口としてのコミュニケーションの重要性、そして専門家同士のさらなる地域連携に対する期待を話す。そして健康寿命を目指すために、選択肢を増やすことの重要性を唱える。それは多種多様な

1 【特集】米本団地（千葉県八千代市), https://www.ur-net.go.jp/aboutus/publication/web-urpress63/special2.html (2021年12月7日閲覧)

2 町丁字別・年齢別人口, https://www.city.yachiyo.chiba.jp/content/000138351.xlsx (2021年12月7日閲覧)

3 町丁字別・年齢別人口をもとに筆者が計算, https://www.city.yachiyo.chiba.jp/21004/page000022.html (2021年12月7日閲覧)

4 地域包括ケアシステム,https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kinki/tiikihoukatsu/documents/minipamph.pdf(2021年12月7日閲覧)

人が居住する団地において、より多くの人が自分にあった自己実現の仕方や、人との繋がり方を選べることが、健康寿命に繋がると考えるからである。そのために、これまで阿蘇・睦地域包括支援センターでは週一回のラジオ体操や、ウォーキングスタンプラリー、ボランティアカード、交換日記グループの作成などを実施し、参加したいものを選べるインフォーマルサービスの提供を行っている。

社会福祉士の方は、「高齢者」について、「不安と葛藤の中で生活している」と表現され、不安や悩みをできるだけ汲み取り解決に結びつけるために、相談窓口の敷居を低くすることや、顔を見て話すことの重要性を度々述べられた。同時に、地域に根付く強いコミュニティーについても触れられ、孤立や孤独を防ぐという地域全体の意識の高さが、大きな基盤になっているとも話した。そしてこのコミュニティーを持続的により裾野を広げていくために、他の地域との連携、行政との連携、地域を超えた連携、世代を超えた連携など、さまざまな繋がりによって、互いに刺激を受け、地域全体がもっと活性化して欲しいと語った。

1.1.2 モノを介した繋がり

2020 年 12 月から幾度も通い続けた米本コミュニティースペースほっこり[5]では、様々なワークショップやプローブ作成を行い、その経験から、「飾る」行為は作る人にとっても、観る人にとっても喜びをもたらし、モノを介して繋がりが生まれることを学んだ。

ほっこりは特にシニア女性たちがちょっとしたおしゃべりや、塗り絵をしたり本を読む場所となっている。2021 年 12 月に 4 日間滞在して行った「みんなで作るクリスマスツリー」という簡単な折り紙を使ったワークショップでは、可愛いものに対して吸い込まれるように人が集まる現象を見たり、作ったもの自ら飾ったり、飾られたり、人にあげるなど行為が自然と発生する現象を見た。中には、少し認知が弱まっている人でも、ものづくりが得意な人にアシストされて自ら作ることを続ける姿や、協力して作ったツリーを飾りつけようと自然に手が伸びる姿を見た。また得意な人は、自分が作ったものを飾り、それを見た人が「もらって

5 施設の概要は 3.4.2 及び 4.5.8 で詳しく述べている

いい？」と聞いて、少しためらいを見せるも嬉しい表情を浮かべて作品をあげる姿、作品をもらった人に、「自分の作品ともらった作品を隣同士に並べて玄関に飾りました」という言葉などが聞かれた。このことから、モノが人の繋がりを介すメディアになると考え、以後約一年間にわたり「ものづくりを介した表現」「ものづくりでない表現」「モノと経験の交換」などを中心として繋がりのあり方やメディアの模索を行った。

1.2. 本研究で提案する「飾れるツリー」について

本研究では、首都圏郊外地にて地域高齢者をケアする職員と、ケアを受ける地域高齢者の二者間を中心とした地域コミュニティーに対して、モノを介したコミュニケーションの視点から地域に合った繋がりをもたらすことを目的に、様々なコミュニケーション方法から能動的にも受動的にも地域コミュニティーと関わることができる「飾れるツリー」をデザインした。

自己決定理論では、3 つの基本的心理的欲求である、自律性 (自分の行動が強制されてないと感じること)・関連性 (他者との繋がりを感じる)・有能性 (自分ができると感じる) が満たされると、一人一人に最適なウェルビーイングを得られると述べられている [3] [4]。またウェルビーイング・幸せ・健康における主観的評価の社会背景について調査を行った研究では、家族や近隣、コミュニティーのつながりの強さによって測定されるソーシャル・キャピタルが、身体的及び主観的な幸福の両方を支えていることが示されている。さらに、この結果はソーシャル・キャピタルが、多くの独立したチャネルで多様な形でもたらされていることを明らかにしており、家族、隣人、市民活動 (個人でも集団でも)、信用など全てが独立して個人の幸せや満足度に強く影響していることが述べられている [5]。

そこで本論文では、高齢者をケアする地域職員とケアを受ける地域高齢者を緩やかに繋げるためのコンセプトとして、「A ticket to talk or be silent」としての「飾れるツリー」を提案する。**緩やかな繋がりとは、能動的にも受動的にも人と関わることができる繋がりを示す。**

Sacks(1992) によると、「Ticket to talk」(=会話を行うための「チケット」) と

は、他者との会話を始めるための媒介となるものであり、それは例えば、散歩中の犬や、新聞交換の新聞、庭にある花などのことを指す [6]。この概念に対して、高齢者施設でアートを媒介にしたコミュニケーションを研究した論文では、話すことが義務になることが高齢者にとって負担になる可能性を挙げており、「Ticket to talk」に加えて、関わり合いは持ちながらも受動的でいることができる相互受動性を持った「Ticket to be silent」という概念を紹介している。相互受動性を持つメディアとは、例えば「メモリー」として過去の画像を表示する iPhone やテイストの合う曲をランダムに再生する Spotify などが当てはまる。我々はこのメディアと関わってはいるが、能動的にアクションを起こしているわけではない。

したがって、本研究における「緩やかにつなぐ“A ticket to talk or to be silent”」とは、「能動的にも受動的にも人と関わることができる繋がり」を示す。

「飾れるツリー」のエコシステム (図 1.2) には、大きく 3 種類のアクター[6]が存在する。1. 能動的に人と関わるケアスタッフのアクター 2. 能動的に人と関わる住民アクター 3. 受動的に人と関わる住民アクターである。

また「飾れるツリー」における自己決定理論は以下のように説明することができる。

- 「自律性」: 誰にも強制されることなく「観る」「話す」「貰う」「飾る」「作る」を自由に選ぶことができる
- 「関係性」: モノを介することで「作る」「飾る」「見る・貰う」などの行為から「能動的にも受動的にも」人と関係することができる
- 「有能性」:「飾る行為」は、周りにいるあらゆる人を創造的活動に招待し、人々は創造的活動に参与している感覚を得ることができる

また、このようなエコシステムを可能にするメディアとして「飾れるツリー」(図 1.3) には、外面的な側面としての「飾ると華やかになる」というメタファーと、内面的な側面として「育てる」というメタファーを持つ。

6　アクト (行動) する者 [7]

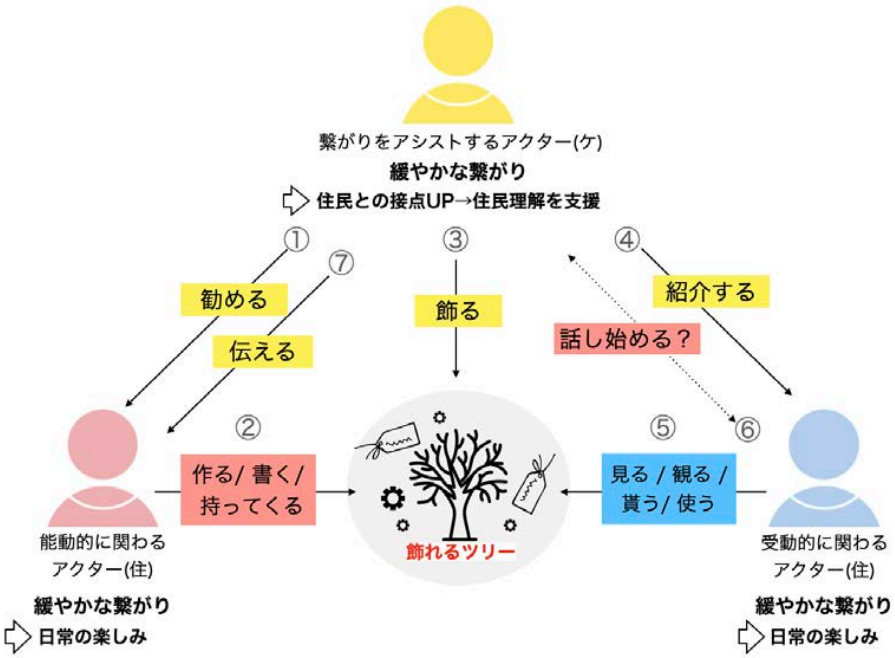


図 1.2　「飾れるツリー」のエコシステム

阿蘇・睦地域包括支援センター　　総合福祉施設 はなみずき　　八千代市社会福祉協議会

図 1.3　「飾れるツリー」の使用例

1.3. 研究方法

本研究は、阿蘇・睦地域包括支援センターの社会福祉士さんが生活支援コーディネーターを務める生活支援体制整備事業の一環として発展し、米本団地を取り巻く様々なステークホルダーとも共創して行った。事業についての詳しい説明は、4.4.1 で述べている。本論文では、様々な表現・共有方法の模索から「飾れるツリー」のデザインを行い、阿蘇・睦地域包括支援センターをはじめとして 10 拠点までに広がった実証実験から、コンセプトの検証を行った。Lucsh と Vargo(2014) は、価値は受益者によって独自にかつ現象学的に判断され、受益者の持つ文脈によって変化すると述べている [7]。そのため、本論文では参与観察や半構造化インタビューなどを繰り返し行うことで、現象学的にコンセプトを検証した。デザインから検証まで一貫して使用している参与観察は、その場での観察や録画を通して、人々の行動や発言を体系的に詳細に観察し記録する観察方法である [8]。

1.4. 本論文の構成

本論文は以下のように 5 つの章から構成されている。

- 第 1 章　序章として研究対象の地域と対象者について、研究の起点となった経験、デザインコンセプトと検証の概要について述べている。
- 第 2 章　関連研究として 3 つの関連研究を紹介している。(1) 飾る行為　(2) ものづくりとウェルビーイング (3) A ticket to talk or to be silent
- 第 3 章　デザインとして、コンセプト、3 つの事前実験、社会福祉士さんへのヒアリング、ペルソナ設計、「飾れるツリー」の設計、価値提案、価値共創、プロダクトデザインについて述べている。
- 第 4 章　評価として評価内容と評価方法、3 つの価値検証の結果、10 拠点の実装を受けての考察について述べている。
- 第 5 章　結論として、本研究の結果、リミテーションと今後について述べている。

第 2 章
関 連 研 究

2.1. 飾る行為

2.1.1 慣習としての「飾る行為」

飾る＝クリスマスツリーと思い浮かべる人も多いだろう。本研究もクリスマスツリーをきっかけとして始まっている。なぜ人々はツリーを飾ってきたのか。
クリスマスツリーの起源は、西暦紀元前の異教徒の文化にあり、異教徒にとって常緑木は生命の再生を意味していた。その後木は神や聖霊を祭るものとして、歴史を通して多くの宗教的な祝事に活用されてきた。バイキングは常緑を冬を耐えるためのシンボルと考えており、古代イギリス、フランス、アイルランドのドルイド人たちは、収穫を祝ってオークの木に果物やろうそくを飾って神を祭った。ローマ人は農神祭にて小さな飾りとなるアクセサリーとろうそくで木を飾り、この農神祭が 12 月 25 日のクリスマスに発展している。その後ベルーメンのギルドやベーゼルの仕立て屋が神の誕生を祝って農作物でツリーを飾ったなどの説もあり、ツリーを用いて神を祀る行為は、16 世紀にはクリスマスマーケットへと発展していった。クリスマスマーケットでは、パン屋が、客がお土産に持って帰れるように、型抜きしたジンジャーブレッドやワックスで作った装飾品を木に飾り、客はそれらを持って帰ったあと自宅の木に飾ってクリスマスを祝った [9](図 2.1)。飾る文化は、キリスト教の文化だけに見られることではない。日本では、「日本三大吊るし飾り」(「雛のつるし飾り」) として、山形県酒田の「傘福」、静岡県稲

(Georg von Rosen, Public domain, via Wikimedia Commons「The Christmas Fair」(2021 年 11 月 7 日) より引用

図 2.1 ツリーと飾りを手に持つ男女の絵

取の「雛のつるし飾り」、福岡県柳川の「さげもん」が知られている[1] [10](図 2.2) 「春夏秋冬」と季節が移り変わる日本の特性から、日本人は季節ごとの変化を表現の題材として「つるし飾り」を創っていた。その文化は、お供えを飾る、季節の花を飾る、厄払いの品を飾るなど、季節の行事として現在も続いている [11]。飾る行為の背景は西洋のものと類似しており、季節の節目に神への願いを託したり、自然へ感謝を示す表現方法でもあった。これらの四季を飾る行為は、奈良時代に「節分供」が中国から渡来したことを起源として発展していったとされる。江戸時代での国民の祭月は「五節供」とされており (図)、七夕も現在も行われる「飾る行為」として現在にいたるまで長い歴史を持つことが分かる。雛飾りにおいては、平安時代に雛遊び、そして室町時代に雛人形を作る文化が確立していき、江戸時代以降発展した雛祭りの文化は、近所同士で作ったり贈りあったりと、近隣コミュニティーも関わるものとしても形成されていった [10]。

1 季節・歳時記, https://www.yukoyuko.net/yukotabi/archive/v00022 (2021 年 12 月 7 日閲覧)

(日本三大　「吊るし雛」
http://senbonzakura.skr.jp/12tabi/100Japan/01tsurashibina/index.html（2021 年 11 月 4 日）
より引用

図 2.2 日本三大　「吊るし雛」

2.1.2 インタラクションデザインとしての「飾る行為」

このように 1000 年を越す歴史を持つ「飾る」行為であるが、これまでデザインや HCI の領域において、そのインタラクションに注目した研究はあまり多くはない。しかしながら、ここ数年、Nabil らを中心としてインテリアにおけるインタラクションの研究が徐々に増加し始めている。Nabil らは、2018 年にインテリア装飾とインタラクションデザインの融合を意味する「デコラクション」という概念を紹介している。これは同著者が 2017 年に提示したインテリアにおけるアクション「Interioraction」を元に発展したもので [12]、カーテン・ランプシェード などインタラクティブでありながらも美的であるもののことを指す [13]。Jung らは、“サーフェス”について、単に物の機能の上に備わっているものではなく、インタラクションデザインにおいて、様々な意味や経験を生み出す中核的存在となりうることを示している。そして形や素材、デザイン要素に遊び心を持つことや、そのようなメタファーから作り上げるプロセスは、従来のユーザー中心設計を補完する要素があると主張している [14]。

2.1.3 空間を場所に変える「飾る行為」

Bedford ら (2017) は、我々は家具や持ち物に装飾的なパターンを施すことを通じて、自分の個性や好みを表現した環境に自分を取り込もうとしていると述べている [15]。Harrison と Dourish(1993) は、このように自らに合った空間を意識的に作る行為のことを「場づくり」と呼んでいる。また Hollis(2014) は、室内装飾は人生を形作り、自己の背景となるものだと述べており、室内装飾とアイデンティティー形成の関係性を明らかにしている。さらに、難民キャンプで室内装飾を行った研究では、室内装飾によって公共空間における「場づくり」が行われたことが紹介されている [16]。Nabil ら (2018) は、難民が公共の場や私的な「空間」を飾ることによって、「空間」を自分たちのホームとしての「場所」に変化させ、飾ることと「場づくり」の概念が結びつき、さらにアイデンティティー形成の背景となっていることを述べている。また、難民にとっての室内装飾は、1) 人々の自由なカスタマイズをもたらす効果　2) キャンプからの逃避の効果 3) 喪失を埋める効果 4) 尊厳と誇りを保つ効果、が見られることが示されており、芸術品や装飾品を作る行為が、難民が厳しい生活環境の中で生きていくために重要な要素であることが明らかになっている [16]。このような背景から、同著者は 2021 年に、インタラクティブな装飾品は、そのアフォーダンスをインタラクションの手段として利用できると主張している。そしてインタラクティブな室内装飾をデザインすることは、社会的関与、つながり、一体感をサポートする研究を行う上で一つの非常に有効な選択肢になると述べている [13]。

したがって本研究では、首都圏郊外団地に住む高齢者の身体的・精神的ウェルビーイングを高めるために、これまで古今東西で慣習として行われてきた「飾る行為」を用いて、より多くの高齢者の社会参加を促している。またデザインを行うにあたり、形や素材が持つ遊び心が高齢者にもたらす効果についても丁寧に見ていくことで、ニーズの調査では見えない価値についての検討を行う。そして、Nabil(2021) が、インタラクティブな室内装飾が、社会的関与、繋がり、一体感をサポートできる可能性を示唆していることから、本研究では、首都圏郊外団地に住む高齢者と高齢者をケアする立場の人に対して、「飾る行為」を用いて繋がりをもたらすことを試みる。

2.2. ものづくりとウェルビーイング

2.2.1 余暇活動がもたらすウェルビーイング

WHO によると健康とは「病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが 満たされた状態にあること」[2]とある。また、自己決定理論では、3 つの基本的心理的欲求である、自律性 (自分の行動が強制されてないと感じること)・関連性 (他者との繋がりを感じる)・有能性 (自分ができると感じる) が満たされると、一人一人に最適なウェルビーイングを得られると述べられている [1] [2]。社会的活動や余暇活動とウェルビーイングに焦点を当てた論文の調査によると、社会的活動や余暇活動の参加率が高い高齢者の多くはポジティブなウェルビーイングを報告しており、このようなインフォーマルな社会活動は高齢者のウェルビーイングに影響を与えるという証拠が多く見られている [17]。また、高齢者における余暇活動は、社会的な関係構築を媒介することが示されており、良い社会関係を持っているかどうかの認識は、余暇活動の関与の大きさと関連しているとされる [18]。余暇活動の中でも、特に Treadaway らは、創造的で遊び心のある体験はウェルビーイングを高めると述べており、楽しんだり、気を散らしたり、慰めたり、喜びをもたらすなど感情をポジティブに動かす体験を促すデザインの必要性を訴える [19]。

2.2.2 作る行為がもたらす帰属意識

Cutler(2009) はあらゆる創造的な活動がもたらす喜びに加え、特に編み物や裁縫、描画などの古くから続く表現活動は、充足感、学習、社会的な繋がり、コミュニケーションや自尊心を育む機会を提供すると述べている [20]。Hall(2013) は学習障害というマイノリティーにある人々において、創造的芸術活動はグループへの愛着や承認への欲求、憧れの経験が “Sense of belonging” として反映することから、創造的芸術活動と “Sense of belonging” の関係性を示している。Hall(2013)

2 世界保健機関憲章前文 (日本 WHO 協会仮訳), `https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/` (2021 年 12 月 7 日閲覧)

が行った二つの芸術団体における事例研究から、創造的芸術活動を行うことは、身体化された感情的な表現や帰属の機会を提供することだけでなく、作品を社会に贈ることで社会への認知や繋がりを生じさせる可能性があることや、創造的芸術活動が制作される親密な空間が、帰属感覚の生成のための拠点となることが示されている [21]。　さらに、アートスペースでの他者との接触は、恵まれないコミュニティの社会的・文化的資本を強化することができると主張している。また、Maidmen(2011) はオーストラリアビクトリア州にあるインフォーマルなクラフティンググループでのインタビュー調査を行った際に、インフォーマルなクラフティンググループは持続的なコミュニティーへの参加、社会的資本の生成、生涯学習の育成に貢献するという証拠を得た。インタビューに協力した人からは、最初は一匹狼であった人も同じ趣味を持つことにより孤独感が減少したという回答や、夫が亡くなったことの喪失感を埋める役割として、このグループへの参加は不可欠であったという回答があった [22]。

2.3. “A ticket to talk or to be silent”

2.3.1 自己開示

初対面の関係性において、自己開示のやり取りが好感度、親近感、類似性の認識、相互作用の楽しさに繋がるという結果が報告されており、人が知り合いになっていくプロセスにおいて、自己開示のやりとりは好感度などのポジティブな結果の可能性を高めると示されている [23]。このようにコミュニケーションを活発化させることは、高齢者をケアする立場の人にとって、より効率的・効果的なケアを届けることを支援し、特に認知症を持つ高齢者のメンタルウェルビーイングを高める効果を持つ [1]。高齢者の増加は、周りの家族や介護者、社会・医療健康システム全体にも影響を及ぼすため、自治体と医療サービス、その他パートナーの包括的なネットワーク構築が必要とされる [19]。

2.3.2 地域間コミュニケーション

しかし現在、共有する場所が限られる中で、近隣の出会いや相互認識が得られない街が益々増えている。そのような中、近隣の人の活動を可視化するデジタルツールを用いて社会性をサポートする実験が行われた。その結果、人々は住む街と人々に対して情熱を示したが、基本的な情報であっても公開された後のことを懸念し、間接的なアプローチを取ることを好むことが分かった [24]。Goffman(1959) によると、我々は見ず知らずの人の前で恥ずかしい思いをしないように、積極的な行動を取ることを躊躇する傾向にある [25]。また Harvey Sacks(1992) は「ticket to talk」という概念を紹介している [6]。これは，犬を散歩させるときの犬，花を育てるときのハイビスカスなどの日常の活動を媒介する「モノ」が、これまで面識のなかった人たちと自然に会話を始めるための「チケット」となり得るという概念である。Svensson ら (2008) はこのようなチケットからもたらされる交流が、非明示的でありながらも社会と交わる機会を生み出すことができる可能性があると示している [26]。

2.3.3 相互受動性

Zizek(1999) は能動的に人と関わる＝「相互能動的」な行為に対して、受動的に人と関わる＝「相互受動的」な行為があると述べている [27]。また McCarthy らは、相互能動性と相互受動性に双方向性と一方方向性の見方を加えた 4 つの象限を持つフレームワークから、異なる好み、優先順位、価値を持つ人の多様な人とモノとの関わり方を説明している (図 2.3)。例えば、双方向性のある相互能動性は、対話する、ネットへの意見投稿、クリスマスクラッカーを鳴らすなどを示す。双方向性のある相互受動性は、人の存在を感じるため SNS を使う、互いに見つめ合うなどを示す。 一方方向性を持つ相互能動性では、エージェントに頼む、機械にやってもらうなどを示す。 一方方向性を持つ相互受動性は、クリスマスコーラスを聴く、ラジオを聴くなどを示す[3] そして McCarthy ら (2018) は、従来の HCI

3 [1] [2] を参照し筆者が再構成

では見逃されていた人々が持つモノに対するレジスタンスやアタッチメントについての検討を行うことで、より包括的なデザインができる可能性を主張している。このような背景から Blythe ら (2010) は、相互受動性の概念を借りて A ticket to talk or to be silent という新たな概念を紹介している [28]。これは高齢者施設において人との会話を続けることが負担になるとのことから、能動的にも受動的にも人と関わることができるデザインの必要性を示したものである。

図 2.3 多様な人とモノとの関わり方 : 相互能動性と相互受動性の分析 (筆者再構成)

2.4. 本研究が貢献する領域

本研究では、Blythe(2010) が紹介する「A ticket to talk or to be silent」の概念と Nabil(2021) が主張する装飾の繋がりへの有用性を用いている。本研究では、この概念を地域高齢者と地域のケアスタッフの関係性に活用し、相互能動性、相互受動性、双方向性、一方方向性を持った関わり方ができるメディアをデザインすることにより、地域コミュニティーを緩やかにつなげることを目指す。そしてコミュニケーションの領域、インタラクションデザインにおける装飾の領域、ウェルビーイングの領域に貢献する。

第 3 章
デ ザ イ ン

本章では、はじめにデザイン手法について紹介した後、「飾れるツリー」のコンセプトを紹介し、前半部分は 3 つの事前実験について述べ、中盤は「飾れるツリー」をデザインするまでの工程について記述する。後半部分は価値提案とステークホルダーとの共創のプロセス、そしてプロダクトデザインについて述べる。

3.1. デザイン手法

本研究では、エスノグラフィー調査において、Beyer と Holtzblatt(2016) による Contexutal Design で提唱されている師匠弟子モデルを使用している [29]。師匠弟子モデルとは、フィールドワークで師匠となる人を見つけ、その人を中心として参与観察を行い、濃い記述[1]を書き、それをもとに時間・人間関係・物理空間・文化・事物の 5 つの視点から分析する方法である [29] [30]。またデザインプロセスは Wendt [31] が提唱するデザイン思考のプロセス受けて新たに奥出が提唱している 4 つのプロセスを用いて行っている：1. 調査 (エンパシー) 2. 分析 (フレーミング) 3. 発想する (アイディエーション) 4. プロトタイプを作りビジネスモデルをつくる (ヴァリデーション) [30]。そして本研究では、このサイクルを繰り返し行い、ステークホルダーへの価値提案と価値共創を経て、最終的なコンセプトの設計を行っている。

1 “Thick Description”, `https://thickdescriptions.org/about/` (2021 年 12 月 12 日閲覧)

3.2. コンセプト

「飾れるツリー」は、団地や養護施設などの様々な人が集まる地域コミュニティーに、飾られたモノや文章による多様なコミュニケーションを生み出す。これは、特に身体活動や社会参加の活動量の低下が心身の健康に大きな影響を与えるシニアの層の人々に対して、自分が住む場所や所属する場所・関わる人との緩やかな繋がりをもたらす。緩やかな繋がりとは、受動的な関わり方を意味する相互受動性の概念を借用し、「能動的にも受動的にも人と関わることができる繋がり」=「A ticket to talk or to be silent」を示している。このような緩やかな繋がりをもたらすことのできる「飾れるツリー」は、高齢者をケアする地域職員に対して、紙面では分からない地域高齢者の人物像を知ることを可能にし、住民一人一人に合ったケアを行うことを支援する。

本研究は、千葉県八千代市米本団地を実験地として、地域に合った繋がりをもたらすことを目的に、阿蘇・睦地域包括支援センターに務める社会福祉士と共創して行ったもので、筆者は「飾れるツリー」として手芸ツリーと短冊ツリーの２種類の実験を行った。手芸ツリーは、クリスマスツリーを飾りつけるように、作ったものを展示できたり、また飾りをもらうことのできるツリーである。短冊ツリーは、短冊や絵馬に一言二言書き記すように、場所や時期などのテーマに合わせて自分の経験を共有することができるツリーである。そして両者において、自由に眺めたり、手にとってみたり、周りの人と話すことができるなどの相互受動性を持つ。そして McCarthy らが示した 4 象限をもとに作成したフレームワーク (図 2.3) から、以下のような様々なコミュニケーション方法を選択することのでき、能動的にも受動的にも繋がることのできる「飾れるツリー」をデザインした (図 3.1)。

これは、ものづくりが好きな人にとっては、作ったものを飾る場所を得たり、貰い手が生まれることへの喜び、そして制作意欲を上げる機会を提供する。また、話すことが好きな人にとっては、その場での人との交流や、モノや文字を通したコミュニケーションを楽しむ機会を提供する。また眺める・観ることは誰もが享受できる楽しみとなる。地域をケアする立場においては、「飾れるツリー」を用いて、地域の高齢者の活発な活動を誘発し、介護予防・認知予防の期待ができる。また、ツリー型のオブジェは、それぞれの事務所に明るさや彩りをもたらし、気軽

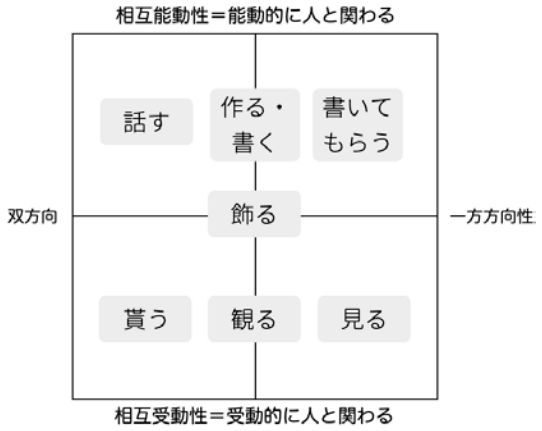


図 3.1 「飾れるツリー」における様々なコミュニケーション (McCarthy & Wright [1] [2] のフレームワークをもとに作成)

に住人が来られる場所にする手助けを行う。そして、モノや文章による地域住民とのコミュニケーションは、さらなる地域ニーズの発見や予防医療のための地域住民の理解を支援をする。最後に、このように飾られたツリーは場所のシンボルとなり、職員や住人の場所に対する愛着を高める可能性を持つ。また、「飾れるツリー」における自己決定理論は以下のように説明することができる。

- 「自律性」:「A ticket to talk or be silent 」で示す「能動的にも受動的にも人と関わることができる繋がり」は、誰かに強制されることなく、自分で選ぶ自由性を持つことを意味する。
- 「関係性」: 其々のアクターはモノを介することで「作る」「飾る」「見る」「貰う」などの行為から「能動的にも受動的にも」人と関係することができる。
- 「有能性」: 作ることが好きな人は、作品を社会に贈り人との関係性を持つことで、役に立つ感覚を得ることができる。また作れない人でも、作られたものを「飾る」ことは、創造的活動に参与している感覚へと繋がる。

このようなエコシステムを可能にするメディアとして「飾れるツリー」には、外面的な側面としての**「飾ると華やかになる」というメタファー**と、内面的な側面として**「育てる」というメタファー**を持つ。

3.2.1 エコシステム

本項では、「飾れるツリー」のエコシステムについて、阿蘇・睦地域包括支援センター (以下包括) の文脈に落とし込んだ場合における循環について述べる (図 3.2)(図 3.3)。

1. 社会福祉士が物づくりが好きな地域住民に声をかける
2. 物づくりが好きな地域住民は手芸品を作って包括に行き社会福祉士に届ける
3. 社会福祉士が届けられた手芸品をツリーに飾る
4. 包括に訪れた別の地域高齢者が、ツリーを見て、社会福祉士と昔話をしたり、手芸品を貰ったり、職員が作られたものを介して職員同士で話す
5. 社会福祉士は、新たな作り手を見つけることができたり、昔話から地域高齢者の新たな面を知ったりする
6. 前に訪れた地域高齢者や地域職員が自分で作ったものを持ってきたり、家にあったものを持ってきて飾る
7. (包括外のアクターとして、社会福祉協議会などが、材料を寄付で集めて作り手に還元する)

   そして 1 に戻る

このようにして、「飾れるツリー」は飾られたモノや文章による多様なコミュニケーションを生み出し、住民と職員、住民と住民、職員と職員を緩やか繋ぐ。そして地域住民に対しては日常生活の楽しみや喜びに貢献し、ケアスタッフに対しては日常的な楽しみや喜び、そして住民との接点を増やすことや住民の理解を深めることに貢献する。

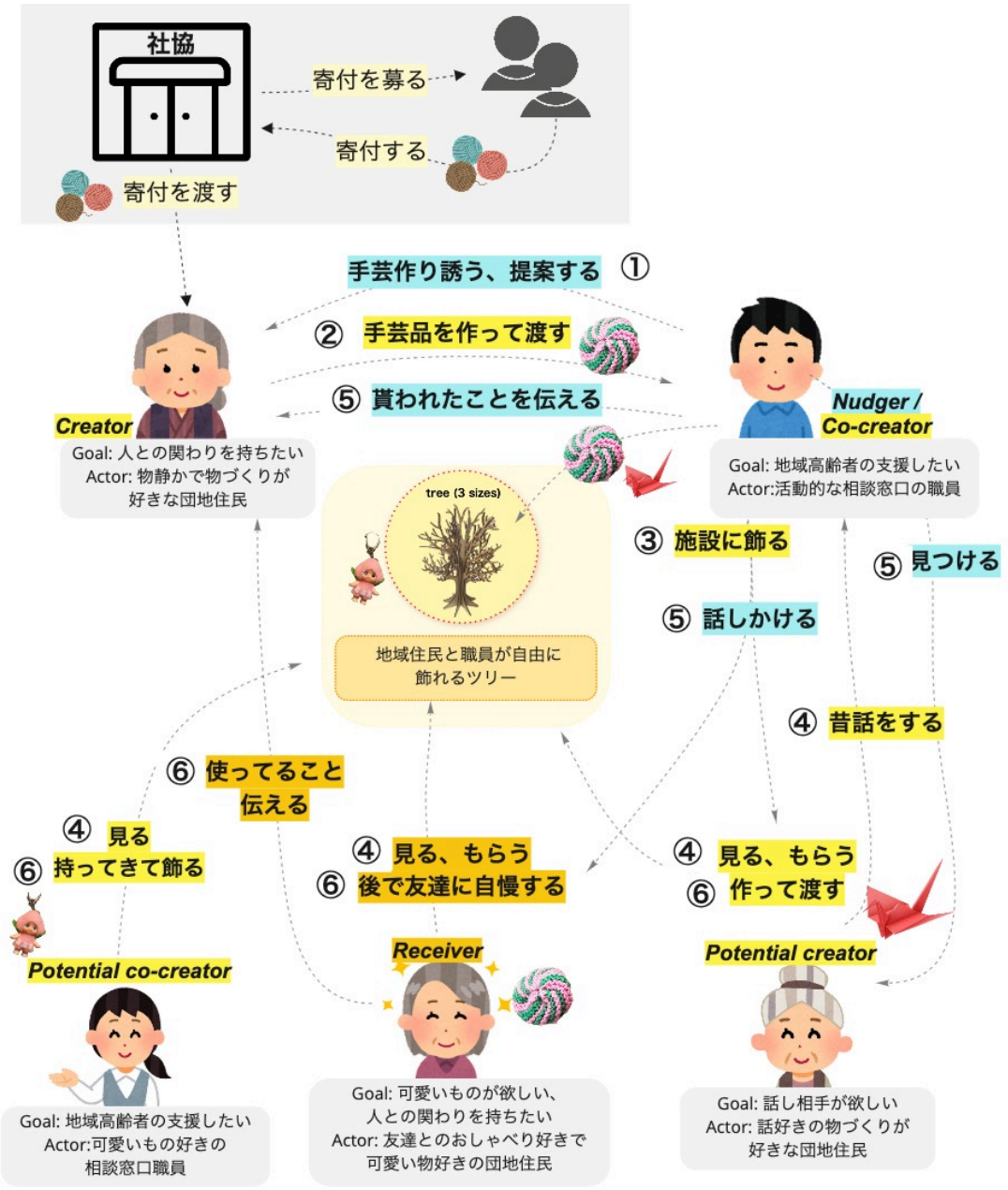


図 3.2 「手芸のツリー」のエコシステム

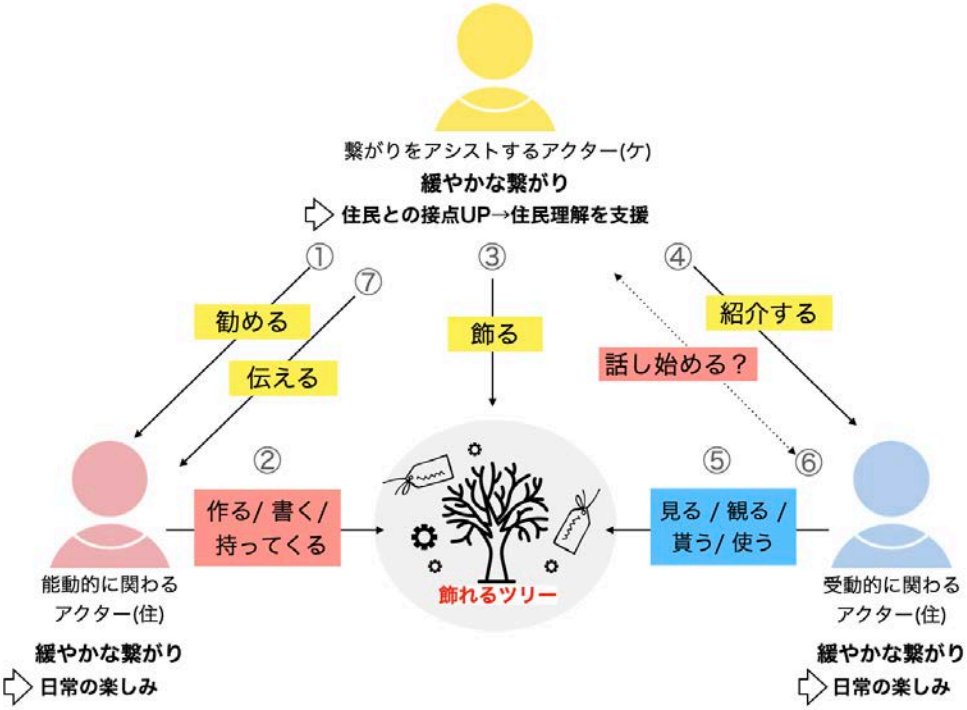


図 3.3 「飾れるツリー」のエコシステム

3.3. 事前調査：阿蘇・睦地域包括支援センターへのインタビュー

私は2020年9月24日に初めて八千代市米本団地に赴き、阿蘇・睦地域包括支援センターの主任ケアマネージャーの方と社会福祉士さんに対して行われたインタビューにて、団地に住む高齢者の現状や支援体制、現在の課題や今後期待したいことなどについてお話を伺った。

インタビューで職員の方々は、特にコロナ禍によって加速する孤立化を課題と挙げ、解決の糸口としてのコミュニケーションの重要性、そして専門家同士のさらなる地域連携に対する期待をお話しされ、地域全体で不安や悩みを抱える高齢者の生活を支援したいという思いを語られた。社会福祉士の方は、「高齢者」について、「不安と葛藤の中で生活している... 今まで出来ていたことが出来なくなることによって、だんだん気持ちが落ちてくると家に閉じこもったり、身よりがいなくて相談先がなくなる人もいる.. そのために身近に相談できる機関として生活を整える支援をしたい」と話された。そして、不安や悩みをできるだけ汲み取り解決に結びつけるために、相談窓口の敷居を低くすることや、顔を見て話すことの重要性を度々述べられた。

このように深刻な課題が日常的に存在する中、同時にお二人は米本団地にすでにある、強い地域コミュニティーについてもお話しされた。団地には八千代市社会福祉協議会の地区単位の地区社協（支会）があり、ここの地区社協を中心として、孤立や孤独を防ぐという地域全体の意識が強く、社会福祉協議会と連携してサロンやイベントなどを運営したり、2020年2月には米本コミュニティスペースほっこりを開設したりしている。この運営は全て地区社協のボランティアが行っており、主任さんは彼らの活動に対して、助け合いの心が根付いており、団地内でここまで活動的に動いている団体はないと話した。そして今後期待したいこととして、八千代市の他の地域との連携、行政との連携、地域を超えた連携、世代を超えた連携など、さまざまな繋がりによって、互いに刺激を受け、地域全体がもっと活性化して欲しいと語った。

私はこのインタビューを受け、「孤立と繋がり」が大きなテーマであると感じた。

3.4. 事前実験1:米本団地でのエスノグラフィー調査「みんなで作るクリスマスツリーワークショップ」

3.4.1 背景：ワークショップ (以下 WS) 実施の背景

2020 年 12 月 21 日から 25 日にかけて、米本コミュニティスペース「ほっこり」にボランティアとして参加することで、実際に団地に住んでいる方々の調査を行った。

今回の訪問に際して小学校低学年時に自分が曽祖母と過ごしていた時間を思い返した。そして彼女が様々なものづくりを行っていたことを思い出した。そのうちの一つが、折り紙手芸と呼ばれるものであった。これは多量の同じピースの折り紙を組み合わせて立体を作るものである。また、教職履修の一環として大学時代に 5 日間デイケアセンターに訪れた時に、最終日に利用者の方からいただいた、爪楊枝が入った折り紙の作品のことについても思い出した (図 3.4)。そして、「孤立と繋がり」というテーマに対して、ものづくりがどう貢献できるかについて関心を持った。

図 3.4 曽祖母の作っていたオブジェ(左) デイケアでいただいた折り紙 (右)

3.4.2 米本コミュニティスペース「ほっこり」についての概要

「ほっこり」は 2020 年 2 月に開室されたばかりの、米本団地内に設立されたコミュニティセンターである。開室以降、団地住人の集いの場として利用されている。運営は、全てボランティアスタッフによって行われ、シフト制でスタッフが

常時最低 2 名在室している。開室時間は月・火・木・金で (水曜日はこどもの日として利用される)、午前は 10 時から 12 時、午後は 12 時半から 14 時まで開室している。ボランティアスタッフは全て女性で、「ほっこり」利用者も女性が多い。男性は数名来るものの滞在時間は短く、長く滞在する人はほとんど女性である。そこでは、塗り絵を毎日行いに来る 3,4 人の女性グループや時々談笑に来る人、時期によってはボランティアスタッフが季節の飾り付けを行い、それを利用者も手伝い楽しむ、などの活動が行われている。「ほっこり」は部屋全体が作ったものを飾るギャラリーのようになっており、これらは運営ボランティアの人がパーツを作って、利用者がそれらを組み合わせて作ったものや、塗り絵に来ている人の作品、こどもの日で子供達が作ったもの、他の地区からいただいた作品などが展示されている。

3.4.3 目的：WS 目的

今回のワークショップは、以下の 2 点をエスノグラフィー調査した。

1. 団地のコンテクストを理解すること (「ほっこり」ではどのような人がボランティアとして活動しており、どのような人がどのように「ほっこり」を利用しているのか)

2. ものづくりを共同で行うことによって生まれるコミュニティーにはどのような要素があるのかを知ること

コミュニティーの要素を調査するために、Macmillan と Chavis が提唱するセンス・オブ・コミュニティーを参照した。センス・オブ・コミュニティーとは、Macmillan and Chavis (1986) により以下のように定義づけられている。

1. メンバーには帰属する場所がある

2. メンバー一人一人の存在がグループにとって重要であると感じる

3. メンバーが一緒に取り組むことでメンバー同士のニーズを満たすことができると信じている

3.4.4 内容：WS 内容

みんなで組み立てるクリスマスツリー

ワークショップコンテンツとして、折り紙手芸の手法を用いて簡易化したクリスマスツリーを設計し、ステップごとに記した作り方シートを作成した。また完成品が分かるようにサンプルの作品と、制作に必要な事前にカットした折り紙を持参した。(折り紙の 2/3 サイズ)　(図 3.5)

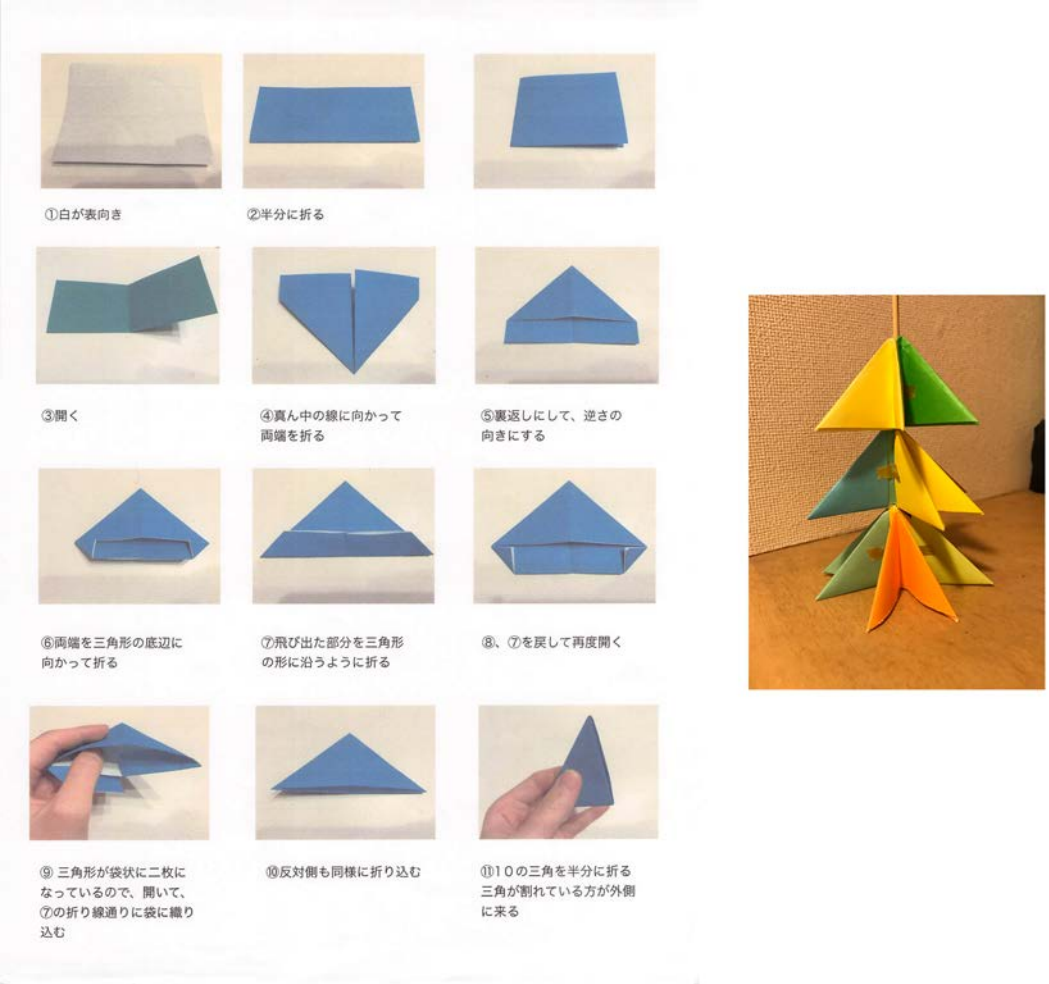


図 3.5　持参した作り方シートとサンプル作品

ツリーのしおり

上記のツリーの難易度が高いと分かったことから、さらにどうしたら簡単に綺麗なものを作れるかを考え、様々な柄の紙から好きなものを選らんでツリーの形のしおりを作ることを提案した。

3.4.5 結果：WS 結果

【1. に対する結果】

「ほっこり」を取り巻くステークホルダーや、すでに行われている取り組みなどを図に表している。ほっこりは、八千代市社会福祉協議会の「地域力強化推進事業」の一環として 2020 年 2 月に設立された団地内にある施設であり、八千代市社会福祉協議会の米本支会団地班（民生委員含む）がボランティアで運営している。また、定期的に食品会社の管理栄養士さんが団地住民の栄養管理相談を行っていたり、NPO と協同して有料ボランティアが行われていたりと、様々なステークホルダーとの繋がりの強さが伺える (図 3.6)。

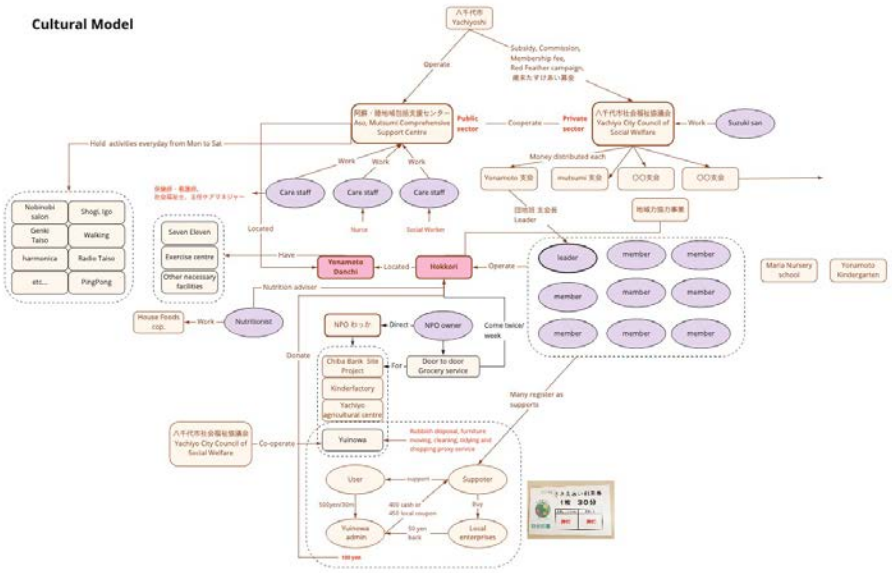


図 3.6 ほっこりを中心とした組織図

【2. に対する結果】

二つのワークショップから観察されたことを、モノを媒介することによる「個人」への影響と「コミュニティー」への影響に分けて記述する。

「みんなで作るクリスマスツリー WS」による「個人への影響」:

- 自分が作ったものを自ら飾ることが自然に起こる　(自分が作ったとことを認めてもらうことが、嬉しさに繋がる)
- 普段は近くにこない人でも可愛いものがあると寄ってくる (かわいいものをもらうことが、楽しさや喜びに繋がっている)

「みんなで作るクリスマスツリー WS」による「コミュニティーへの影響」:

- 誰かが、誰かが作ったものを飾るという行為も自然と起きる
- 最初にやり方を教えてくれる人がいれば、その人がいなくても、それを習った人が新たに来た人に教える仕組みができる (図 3.8)
- ものづくりが得意な人が得意ではないけど可愛いものが好きな人に自分の作品をあげる (図 3.9)

図 3.7 では、可愛い柄に人が集まってきているシーンを示している。

図 3.8 では、私から教える人がコミュニティーメンバーへと伝わり、ものづくりコミュニティーができたシーンを示している。図 3.9 は、ボランティアメンバー A が利用者 B に自分が作ったものをあげ、利用者がその写真を撮って、後に自分が作ったものともらったものを隣り合わせで玄関に飾ったというシーンを示している。

図 3.7　可愛い柄に人が集まるシーン

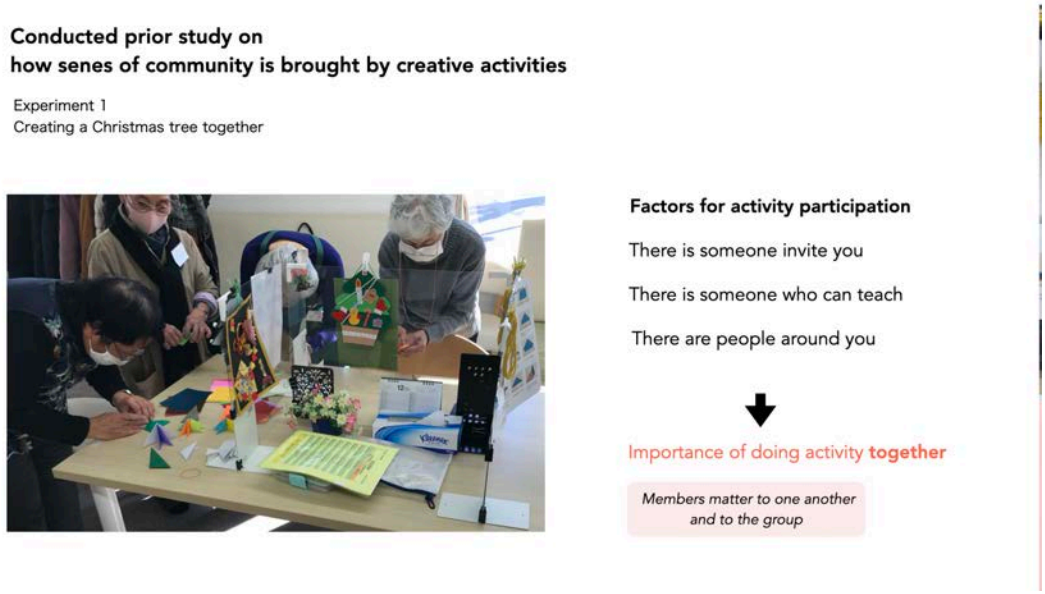


図 3.8　ボランティアメンバー A が私から習ったことを利用者に教えるシーン

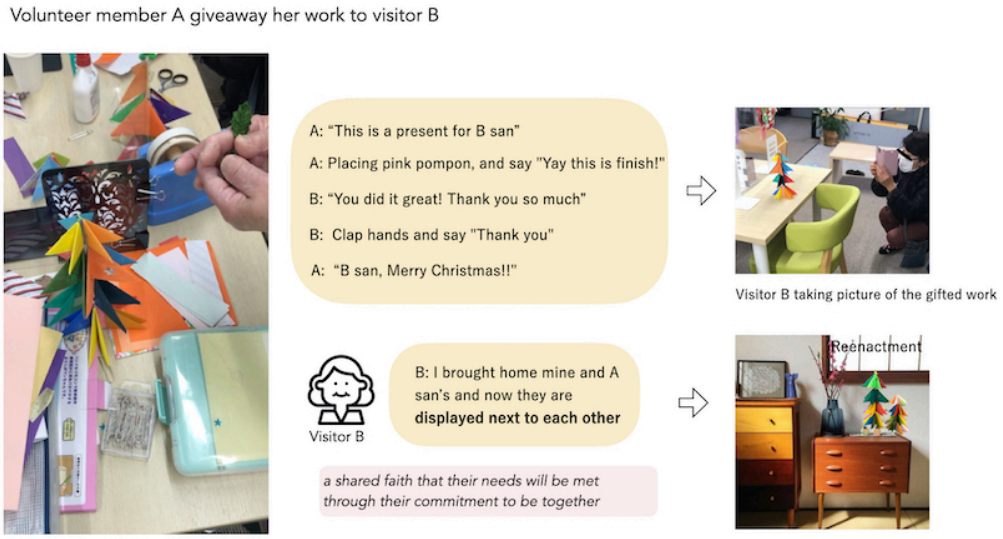


図 3.9 作ったものをギフトするシーン

3.4.6 考察：WS 考察

3.4.3 で述べたセンス・オブ・コミュニティーの定義を「みんなで作るクリスマスツリー」のコンテキストに適応させると、以下の要素がものづくりを共同で行うことによって生まれるコミュニティーに必要な要件であることが考察された。

1. 経験を共有できる物理的な場があるということ
2. ものづくりへ誘ってくれる人や教えてくれる人、引き止めてくれる人などがいること
3. 「可愛い」を軸として、できることをできる人が行い、作ることができる人は作り、細かいことはできないが手伝える人は手伝い、不器用だけど可愛いものが好きな人は応援したり、作品をもらったりすることで、あらゆる人があらゆる形で参加できること

またこれらを持続的にさせるアクションモデルとして、以下のサイクルが考えられると考察された (図 3.10)。そしてこれらの人のアクションを誘発する上で「かわいい」という概念の重要性が浮かび上がってきた。

以上のことから、「可愛い素材」「一緒に作ること」「贈る」という要素が、ものづくりがもたらすセンス・オブ・コミュニティーに重要なのではないかという仮説を持った。

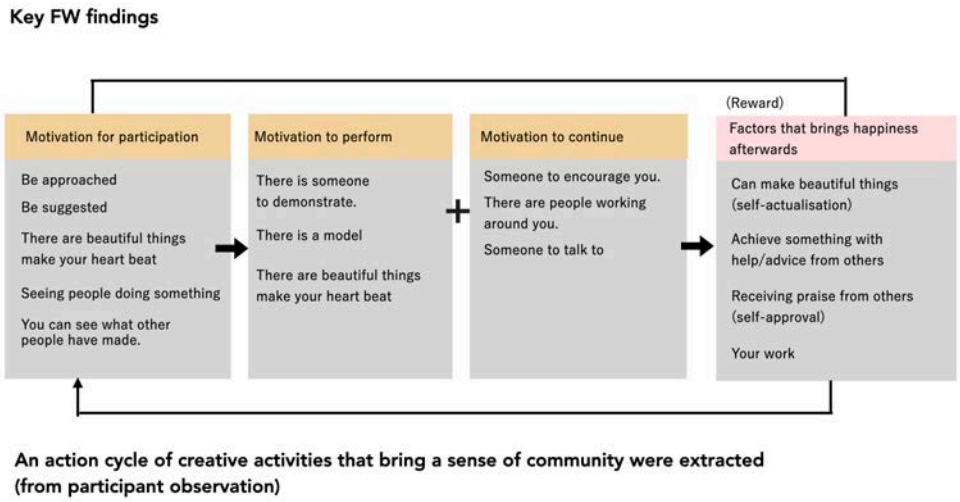


図 3.10　ツリーメイキング参加におけるアクションモデル

3.5. 事前実験 2：ものを一緒に作って贈り合う行為の調査「ITOMA 内オンラインワークショップから」

3.5.1 背景：WS 背景

米本の調査にて、二人で作ったクリスマスツリーを玄関に飾ったという Y さんのお話から、作るものとして、日常に共存できるものの重要性を感じた。また、クリスマスツリーのようにワンシーズンのものではなく、永続的に使うことができるランプや身に付けることのできるものを作った場合の価値を調査するために、ランプのデコレーション及びコサージュ作りをコンテンツとして実験を行った。

3.5.2 目的：WS 目的

- 日常的なものを一緒に作って互いに贈り合う行為が、繋がりにどう貢献するのか

3.5.3 内容：WS 内容

WS を二回開催し、1 回目はコラージュで装飾するランプとメッセージカードを作り贈り合う WS を開催し、2 回目はコラージュで装飾するコサージュとメッセージカードを贈り合う WS を開催した。

3.5.4 結果：WS 結果

二回連続で行った間柄には、会話の緊張感が減る、プロジェクト活動が行いやすくなるなどの変化が見られた。また二回ともどの参加者からも、一緒に協力して作っている時、困難を共有している時に繋がりを感じるとの回答があった。参加者 A からは、繋がりを感じる意味では共に作る時間が大切だが、そのあとにメモリーとしてタンジブルなものが残ることに価値があり、またものがアクセサリーだと実際に使えるから嬉しいとの回答があった。これについては参加者 D も同様

の回答をした。また参加者 A は、贈られたものを大切にしたいのは、それが綺麗だからだけでなく、贈り物だからであると回答した。また参加者 B からは、贈る贈られるというのが唯一のコミュニケーションだから、そのやりとりを楽しみ始めているとの回答が 2 回目にあった。また同参加者からは、感謝を伝えられるプラットフォームが欲しいとの回答があった。参加者 C からは、自分が作ったものを手放したくない思いや、もらっても嬉しくないものをもらう可能性があるのではないかという回答をもらった。

3.5.5 考察：WS 考察　半構造化インタビューから

綺麗なものを日常に置いたり、身に付けられること、またそれが誰かからの贈り物であることの価値はあるのではないかと考察された。しかし、綺麗なものお互いが必ずもらえる仕組みを確立することは難しく、これを全員がやるという仕組みには自由性がかけると考察された。また、その贈り合いは、ものづくりが得意な人に限られるため、広がりの可能性にも欠けると考察された。

繋がりを感じたシーン		会話をしている時	ものをあげる時	ものをもらった時
	参加者A	同じ困難を持っていると分かった時	自分が相手のことを思ってプレゼントを包む時	作品を通してその人を感じた時
	参加者B	同じ行動をとったり、同じように感じていたことが分かった時		
	参加者C	一つのものを協力して作っている時		個人的なメッセージをもらったとき
リミテーション	・参加できる人が可愛いものづくりが好きな人に限ること			
	・せっかく作ったものを手放したくない思い			
	・気に入らないものをもらっても嬉しくない			
before & after の変化	・作った人にお礼がしたい			
欲しいもの	・作品が一同に介する機会や展示空間			
	・感謝の思いを伝えられる掲示板			

図 3.11　ランプ WS インタビュー結果

繋がりを感じたシーン		会話をしている時	ものをあげる時	ものをもらった時
	参加者A	他愛のない雑談をしている時	ものをあげる時	ものをもらった時
	参加者B	同じ困難を持っていると分かった時、他愛のない雑談をしている時	相手にメッセージを書いている時	ものをもらった時
	参加者D	一つのものを協力して作っている時、同じ困難を持っていると分かった時		メッセージをもらった時、ギフトをもらった時
リミテーション	・作ることと話すことは同時にできない			
	・贈る相手が誰だか分からないとメッセージを書きにくい			
before & after の変化	プロジェクト内のコミュニケーションが楽になった			
続ける動機	・誰かに作ったものをあげること			
	・綺麗なものを綺麗なものが好きな人同士で交換し会えること			

図 3.12　コサージュWS インタビュー結果

3.6. 事前実験 3：ものづくりではない表現の可能性の調査「米本団地で行った思い出共有ブック」から

3.6.1 背景：思い出共有ブック作成背景

3.5 で行った全員がものづくりを行い全員が贈り合うというスタイルは、参加できる人、したい人がが限定されてしまう恐れがあった。そのため、誰もが楽しくコミュニティー活動に自主的に参加できる方法の模索を行った。

3.6.2 目的：思い出共有ブック作成目的

小さい頃の思い出ならば、誰もが共有することができ、またそこからコミュニティー内で新たな共通点を見つけ、センス･オブ･コミュニティーを高めることができるのではないかと考え、参加のハードルを低くすることを目的に実験を行った。

3.6.3 内容：思い出共有ブック作成

なるべく多くの人がすぐに答えられるような、また共感を呼べるような質問を考えた。米本コミュニティスペース内で実施した。2021 年 6 月 22 日に用意した思い出共有ノートについて、ボランティアメンバーに共有し、24 日にもう一度団地を訪れ、さらに 7 月 5 日にも訪れてどのように使用されたのかを調査した。最後に 7 月 9 日に包括に勤める社会福祉士さんと使い方についての相談を行った。

3.6.4 結果：思い出共有ブック使用結果

計 9 名の方の回答をもらった。

二度目の訪問：6 月 24 日にボランティアメンバーのリーダーから、「すごく良いと思う」と評価をいただき、その理由として、以下の回答があった。

「これ昨日 N さんが書き終わって持ってきたんだけど、これ読んだだけで結構感動したのよ。それで思ったんだけど、こういうのを自分でも持っておきたいと

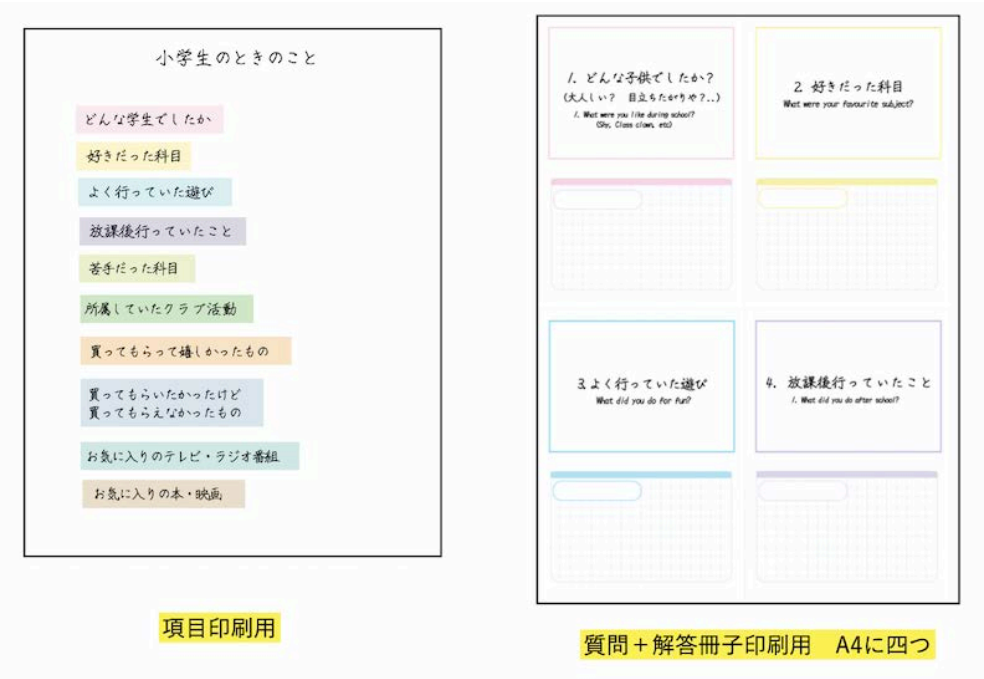


図 3.13 思い出共有ブック中身 1

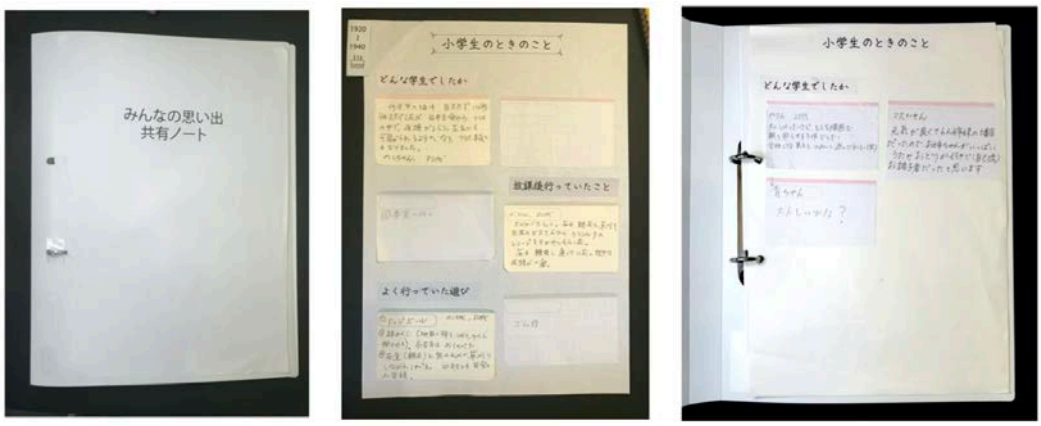


図 3.14 思い出共有ブック中身 2

思うし、家族とかもこういうこと以外と知らないから、家族とかにもこれを配ったら良いと思う。これを見て、自分の親のこういうことって知らないなって思った。みんなのをファイリングできたらいい。こういのがあればその人のことを知りやすい」

一方で、ボランティアリーダーHさんをいつもサポートしているYさんは、「書くのが好きな人はいいけど...」「インタビュー私たちがやるのは...」と口を濁す場面があったり、訪問者のYさんも、誘われた時のことを思い出して、「ああこの前これ見ただけで出来ないと思ったの」などと言う場面があった　(YさんはHさんと話す中で最終的には書いていただいた)。

しかしながら、このように書くことには躊躇する場面が見られたものの、テーマについての話をふると、「色々思い出してきたわ」「そんな話、何十年ぶりだね、白黒テレビなんかね」と楽しく他の利用者と話が盛り上げる様子なども見られた。

私が二度目に訪問した際、リーダーのHさんは、ウォーキングスタンプをもらいに来た訪問者に対して、思い出共有ノートを紹介をしていた。その際にXさんは、各項目が多いことや、名前を書く欄があること、いつまでにやらなければいけないことなどについて、めんどくさいというような口調でコメントしていた。一方で、この二人が入り口で話していると、他の人も寄ってきて会話に参加する現象が見られた。特にここでは、昔聞いていたラジオや有名だった映画についての話題に花が咲いていた。

3.6.5 考察：思い出共有ブック使用後の考察

思い出というトピック自体は、昔苦労したことを同世代の人と振り返り共感しあったり、昔楽しかったことを振り返って笑うなど、他の利用者さんとの会話のきっかけになったり、話を盛り上げたりする効果があることが分かった。また、書くという表現方法は、ペラペラと話す方じゃないような人の意外な一面、新たな一面がわかることが観察され、それが共有されることによって、繋がりが深まる可能性が考察された。しかし、このような人がいる一方で、多くの場合、『書く』ということがめんどくさい、また手が悪くて書けないことが多く、何故わざわざ

図 3.15　思い出ブックを見ながら談笑する様子

書かなければいけないのか、『なんのためにやっているか分からない』ということが、参加のモチベーションを下げることも考察された。

3.7. 社会福祉士さんへの聞き取り調査 1「思い出共有ブック」から

3.7.1 背景：社会福祉士さんへの聞き取り調査 1

ボランティアリーダーの H さんが、静かな訪問者 N さんの意外な一面や新たな一面を知り感動したと言っていたことから、これはシニアをケアする立場の人にとって役に立つ可能性があるのではないかと感じた。そのため、社会福祉士さんのもとに向かい、思い出共有ノートの報告とこれからの発展について相談させていただいた。

3.7.2 結果：社会福祉士さんへの聞き取り

社会福祉士さんは、ある人の回答を見て「この人野球やっていたのか〜」と呟いたり、口数の少ない N さんの丁寧に書かれた思い出を見て、N さんも交換ノートグループ入ればいいのに〜」などと呟き、利用者のこれまでは知らなかった側面を見つけている様子だった。そしてこのように支援する人の情報を知ることは、支援者としてはとても重要だと語った。普段の仕事でも「お困りごとありませんか？」と聞くのではなく、どんな生活をしているか、どこに暮らしていたかなど本人のことについて聞くことを大切にしていると話した。また、そういった情報をまとめることも普段から行っており、ケアプランというものに利用者の基本情報を書いているのだという。そして、このような聞き取りを行うことは、利用者さんとの信頼を築くためにとても大切なことだと話した。そのため、思い出ブックから利用者さんのことを知ることはプラスであると話した一方で、すでに似たようなことを交換日記[2]で行っていたため、米本コミュニティスペースほっこりに来ている人の内で一つのサークル活動としての活用の可能性を示唆した。そこで、社会福祉士さんは、保管していた資料から「できたツリー」の写真を私に見せ、米本コミュニティスペースほっこりの文脈であれば、モザイクアートのようにみんなで楽しくやれるのがいいのではないかと提案した。また、2021 年 7 月の時点で導入したばかりだったボランティアカード (通称「ボラポカード」) を広くこれから利用してもらうきっかけとして、思い出共有してくれた人にポイントをつけるという仕組みを作ったらいいのではないかと提案した。加えて、地域包括支援センターが企画していた「取説」にも使えるのではないかと提案すると、応用がきくということでもあるから、ターゲットと目的を明確にすることを勧められた。

3.7.3 考察：社会福祉士さんへの聞き取り

思い出共有ブックの実験での良かった点としては、普段は口数の少ない人の新たな一面がみられたことだったが、この方も含め、特に他 8 名の方においては、

2　慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科のサービスデザインプロジェクト C で発表された提案をきっかけにスタートした取り組み

「大学生の調査のため」にやっていただいたという側面が大きく、持続的なものとして発展する要素があまりなかった。そこで社会福祉士さんの「できたツリー」やモザイクアートという提案や「みんなで楽しくやれたらいいよね」という視点によって、今回作ったプローブに欠けていた「楽しめる」という側面が浮き彫りになった。そして、調査の一番最初に行ったクリスマスツリー WS のしおりを制作した際に、多くの人が自然と集まってきたことが思い出され、ものづくりを実際に行わなくても、木に飾る行為は多くの人が出来上がりに貢献でき、その喜びや観る喜びを感じることができると考えた。

3.8. 設計：ペルソナ設計

3.8.1 コミュニケーションレベル：受動性・能動性

サービスに対するターゲティングを行うために、コミュニティセンター内外の人々の調査から、シニアの方達の社会参加やコミュニケーションの取り方に対して、受動性と能動性の幅を観察することができた。中には、精神的に気力が落ちていて、自由に外に出て人と関りたくない人も観察され、彼らはそもそも人と関わることを求めていないことが分かった。したがって今回の研究では、この層は対象外として考えている。その次の層の人が、「積極的にコミュニケーションをとることはしないが、コミュニティに参加して人々とコミュニケーションをとりたいと思っている人」である。次の層は比較的に能動性が見られた人々で「人と話すことが好きで、それなりにコミュニティー活動に参加する人」である。そして最後に最も能動的な層として、「話すことが好きで、ボランティアの中核メンバーを務めたり、色々な活動に積極的に参加する人」をあげている。今回デザインを行うにあたり、上から二番目に位置する「積極的にコミュニケーションをとることはしないが、コミュニティに参加して人々とコミュニケーションをとりたいと思っている人」に焦点を当てたいと考えた。これは、コミュニケーションを取りたいが、話しかけることを苦手としていたり、積極的なアプローチを好まないことから、緊急事態宣言や体調の不調などの少しのきっかけで引きこもりになりがち

になってしまったり、そのようなことがなくても、何かきっかけがあればさらなる社会参加につながる可能性を持っている層であると考えたからである (図 3.16)。

3.8.2 ペルソナの設計へ

コミュニケーションレベルの調査からのターゲティング、そしてシニアをケアする立場にある現場の人々の整理を行い、ペルソナの設計を行った。シニアをケアする立場にある地域包括支援センターの社会福祉士と、シニアの集いの場となっているコミュニティセンターのリーダー、そしてそれらの利用者である、社交的でおしゃべりなシニアの方と、口数は少ないが、ものづくりが好きで、思い出共有ブックや折り紙などに最も丁寧に取り組んでいたシニアである。その方々をモデルにペルソナを設計した (図 3.17)。

図 3.16　現場の人のコミュニケーションレベル

地域を支援する側の
ターゲットペルソナ

地域の生活支援
コーディネーター (職員)

Goal: 介護状態や認知症になっても誰もが安心して生活ができる地域づくりをしたい
高齢者の社会参加 認知症・介護予防
一人ひとりに合わせたオーダーメイドの介護予防をしたい

支援を受ける側(地域高齢者)の
ターゲットペルソナ

お友達とおしゃべりを楽しむ
可愛いもの好きの女性 (住民)

Goal: 一緒にいれる人が欲しい、人と繋がっていたい
誰かが隣に座ってくれると嬉しい、話す人がいると嬉しい
負担にならない程度で、老化防止をしたい
ルーティーンを持ちたい

Mental model:
友達が話しているのを見ると、隣に座る
ほっこりでは必ず塗り絵をする
何色で塗ったら良いか分からないと聞く
顔見知りがいるのを見ると(or 1人でいる人を見ると)声をかける、肩をたたく、挨拶する

人と繋がっていたい物静かで
ものづくりが好きな女性(住民)

Goal:　**場所や人との繋がりをもっていたい**
ものづくりに関わっていたい

Mental Model
何か新しいものを見たり、聞いたりすると、注目し、見にいく
会話している人を見ると、何を話しているのか気になり注目する
ほっこりでは塗り絵をする
新しいものづくりや物書きを提案されると、引き受け、それらを丁寧に行う
他の人の思い出が書かれた思い出ブックを丁寧に見る

図 3.17　ペルソナ設計

3.9. 設計：みんなが参加できる「つながる木」

3.9.1 コンセプトスキーム：みんなが参加できる「つながる木」

これまでの経験から、「みんなが楽しめるデザイン」「様々な形のコミュニケーション」「遊び心」に焦点を当て設計を行った。そしてそれを広める活動をしてくれる最も能動的に行動する人、きっかけがあれば能動的に行動する人、能動的には行動しないが注目をする人などのペルソナに分けてスキームを作成した (図 3.18)。

3.9.2 内容 1：短冊スキット 1

このスキームをもとに 2021 年 8 月 28 日に学校内でスキットを実施した。準備物は以下の通りである (図 3.19, 3.20)。内容については、思い出共有ブックで行ったように、小さいころの思い出などに特定すると、同じ人の複数回の参加が難しくなると考え、Twitter のアナログバージョンをイメージして制作した。そして短冊には「今日のつぶやき」と明記し、ポジティブな行動の促進を考え、「今日の目標」という 2 種類を用意した。また、記入しない人でもリアクションを残せるように、スタンプやシールの用意をした。

- 60cm × 69cm の木
- 「今日のつぶやき」「今日の目標」の 2 種類の短冊
- ワンポイントスタンプ　× 約 20 個
- 顔文字シール

3.9.3 結果 1：短冊スキット 1

スキットを実施した結果、「今日のつぶやき」という文言は抽象的で書きづらいという意見が多く上がり、また同様のことが「今日の目標」にも言えるということが分かった。そして、「人前で書けることがない」という意見や、「ポジティブ

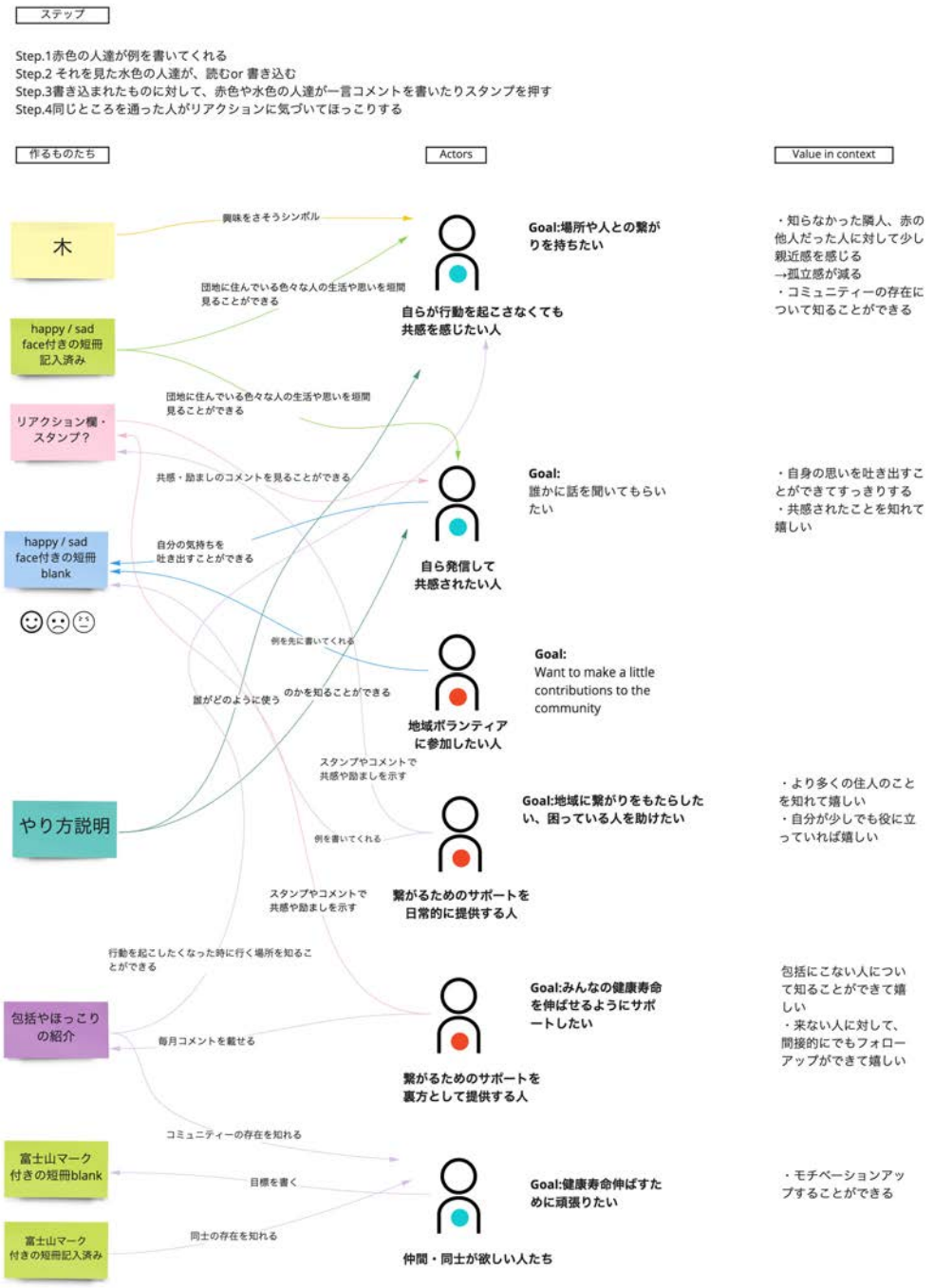


図 3.18　コンセプトスキーム「つながる木」

なことばかりが書いてあったから、ネガティブなことを書くのは気が引けた」という意見もあった。そして、「feel free to join」の文字が小さく参加して良いのか迷ったという意見もあった。短冊に対するコメント欄については、裏面に設けたことから、コメント欄に気がつかないという指摘を受けた。一方で、顔文字シールを設けたことは、共有した側に好評となり、また共有したいことについては、「何か新しい体験があれば共有したい」という声があった。名前の明記については、「ニックネームか書かなくても良い仕組みがいい」という意見があった。

3.9.4 考察 1：短冊スキット 1

思い出共有ブックで、小さい頃の遊びや当時流行った映画の話題で話が盛り上がったことから、日常の話題を共有することで共感を呼べるのではないかという仮説を持って臨んだ。しかし、人目があるところで書けることは、他愛のない一般的なことしか書けないという結果がわかり、深い共感につながる経験は与えることができないことがわかった。しかし、同時に、深い共感を得られることが目的ではないということを認識し、特別な何かではなく、人々の日常を垣間見ることができることによって、コミュニティー内にゆるやかな繋がりをもたらすことに焦点を当てることとした。

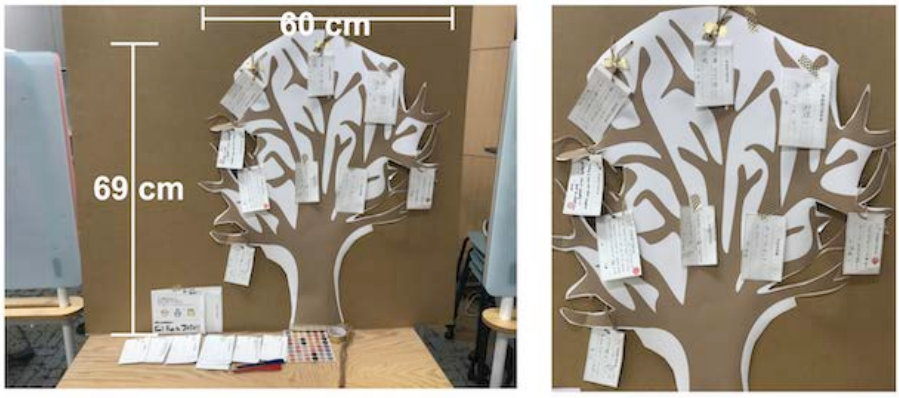


図 3.19 ツリープロトタイプ 1(木)

図 3.20　ツリープロトタイプ 1(短冊)

3.9.5　内容 2：短冊スキット 2

短冊スキット 1 の結果から、さらにアイディエーションを重ねた。そして、「今日のつぶやき」「今日の目標」などの抽象的な質問が答えづらいという結果が出たことから、もっと具体的で誰もが答えやすいであろう、Want ベースの質問に変えて再度実験を行った。質問は、「秋のテーマ」と「最近の OO シリーズ」のに種類を用意し、その中でも具体的な質問を各テーマ 5 つずつ用意した。今回のスキットは、共有したいトピックを探る目的で実施したため、実際に木に書いてもらうことはせず、20 代 2 人、30 代 1 人、50 代 1 人のプロジェクトメンバー内で実施した。

3.9.6　結果 2 と考察 2：短冊スキット 2 の結果

質問項目には、紅葉が綺麗な場所や秋に食べたいもの、ハロウィンなどの季節の話題、そして日常のテレビの話題や、少し抽象的に最近嬉しかったことなども質問に加えたのだが、食べたいものに関する回答が一番多かった。その次に多かったのは、行きたいところなど、やはり want ベースのものの回答率が高いことがわかった。スキット 1 で見られた書くことが難しかったという意見はなく、比較的スムーズに共有が行われた。そして、この短冊での共有は、思い出共有ブックと同様、シニアの方のニーズを汲み取る一つの手段になり得るのではないかと考えた。

図 3.21　短冊スキット 2

3.10. 価値提案 :「みんなで彩る〇〇ツリー」

3.10.1 背景と概要:「みんなで彩る〇〇ツリー」

これまでの事前実験やスキットから、より多くの人の自己実現のきっかけや、孤立を感じている人に対して、ささやかな繋がり得られるきっかけをもたらすことを目的として、2021 年 9 月 8 日に社会福祉士さんに対してデザインコンセプトの共有をさせていただいた。表題は「季節にまつわることや、日常のちょっとしたことを共有し、みんなで米本を彩ることのできる”〇〇な木”」と題した。木の名前については、使ってもらう人に決めてもらうのが良いと思い空白にした。コンセプトの概要は、「七夕や絵馬のように、一言二言の小噺を書いたり、クリスマスツリーのようにみんなで飾り付けをすることを通して、小さな自己実現や、団地住民が簡単に自分のことを共有できる経験をサポートし、隣人同士の間に小さな共感やささやかな繋がりをもたらすことを目指す」とした。提案時に持参したのは、コンセプトを記した企画書、短冊のサンプル、ツリー実寸ペーパープロトタイプ (図 3.25)、レーザーカッターで切った 3D のミニサンプル (図 3.26) である。

3.10.2 内容:「みんなで彩る〇〇ツリー」

「みんなで彩る〇〇ツリー」の構成要素としては、「木」と「短冊」と「短冊テーマ」がある (図 3.22)。短冊は折り紙で切り抜いた四季の葉っぱで作ったものと、柄物の折り紙を長方形に切ったものと二つを用意した。またテーマに関しては、短冊スキット 2 で行ったものをそのまま利用し、回答のイメージがつきやすいように、スキット 2 で回答してもらったものも短冊に書いて持参した。コンセプトとしては、四季に合わせてテーマを変えた短冊を使って、利用者と職員、利用者同士のコミュニケーションを活性化すること、また四季の葉っぱで木を彩って楽しむということを提示した。関わりうるアクターとしては、ペルソナ設計で抽出したキーアクターをもとに、「活発でおしゃべりが好きな人」「飾るのが好きな人」という比較的能動的に活動するアクターと、「普段はあまり外と関わらない (けれど人とのコミュニケーションは取りたいと思っている)」という能動性が少し

低いアクター、そしてシニアの方をアシストする立場にあるアクターの 4 つをあげた (図 3.23)。そして、使い方を図解した用紙には、「眺めて楽しむ」「書いて楽しむ」「飾って楽しむ」ことができるツリーであることを示し、色々な回答を眺めたり、四季で変化するツリーを眺める楽しさ、そしてテーマに沿って短冊に書いて飾る楽しさ、そして四季の葉っぱや持参した飾りなどで飾る楽しさ、について明記した (図 3.24)。そして、3D になった時にどのように感じられるかのイメージを伝えるために、実寸大のペーパープロトタイプ (図 3.25) と、etsy で購入した小さい木のデザインを MDF にレーザーカッターで切り出したサンプル品 (図 3.26)[3] を持参し、それらを見せながらコンセプトについて社会福祉士さんと議論を交わした。

3 The tree decoration on the wall, made by Alex. P, `https://etsy.me/3qNZGs9` (2021 年 9 月 4 日購入)

図 3.22　ツリーのイメージ図と構成要素

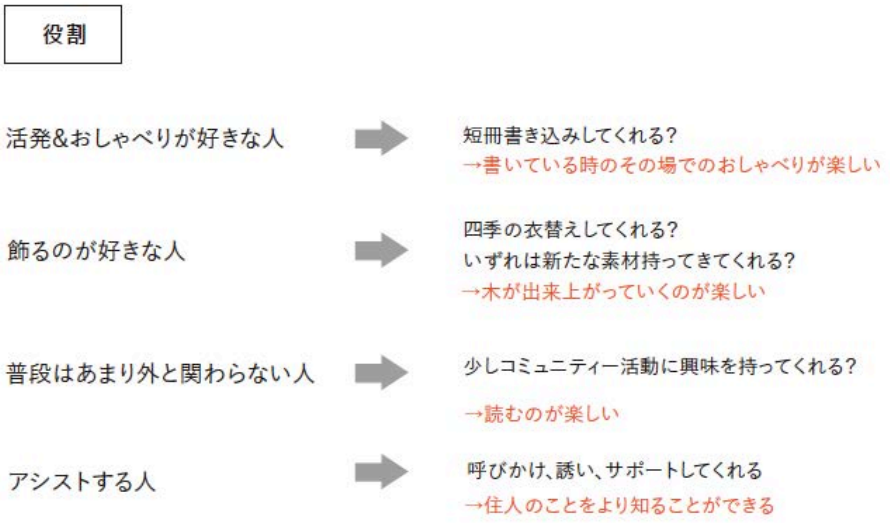


図 3.23　関わりうるアクターと役割

図 3.24　みんなで作るよなだんツリーの楽しみ方

図 3.25　ツリー実寸ペーパープロトタイプ

図 3.26　3D ミニサンプル

3.10.3 結果:「みんなで彩る〇〇ツリー」

当日のお話から

コンセプトの提案を行うと、面白い提案だと反応した一方で、イベント的な使い方でなく持続的に使うものであれば、目的とターゲットをもっと絞る必要があると話した。イベント的なやり方であれば、デイケアサービスなどで行っても楽しいし、地域包括支援センター (以下包括) でテーマごとにやっても楽しいだろうと話した。サンプルで持参したミニサイズの木をお見せすると、自身のお家にも欲しいと話すなど、とても好印象であった。また、私が持参した企画書の「みんなで彩る」という言葉に反応し、「彩るというのをキーワードにして、なんか元気になりそうだね」という言葉もいただいた。徐々に話を進めていくと、色々なやり方が考えられ、一箇所だけでなく色々な箇所に展示して、最終的に組み合わせたり、米本コミュニティスペースほっこりに置いて、ボランティアカードと絡めて利用するなども考えられると共有された。包括としてのメリットとしては、「この人がこういうこと考えているだな、こういうことがやりたいんだなって言うのは、ニーズキャッチとしてもすぐわかるから、逆にありなのかもしれない」というお言葉もいただいた。そして、包括で現在行っている、ラジオ体操や交換ノートの取り組みの他の一つの新たな選択肢として発展できればいいと話した。テーマについての議論をしているところで、介護予防と認知予防にも繋がるのでは？というお話になり、「テーマに対して考える・書くは認知予防として、外に出てここでやるというのは介護予防に繋がる」「こういう積み重ねが生活意欲を上げる、活動的になって元気になろう!だから」とお話しされ、シニアの人の活動を活性化し元気になる一つのきっかけとしての可能性を示していただいた。そして結論として、「やってみないとわからない」ということで、私はイメージとして持参しただけのつもりだったミニサンプルだったが、もったいないからこれはここで使ってみようということで、プレでミニサイズの木を玄関前に置いて試してみることとした。やってみるテーマとしては、場所柄健康に関するものも含めて欲しいと言われ、食べたいものと健康に関するテーマで試してみることとなった。そして最後に玄関に置いた木を見て「木があるだけで違うね、これがあると、僕も写真取っちゃお」と言って写真を撮る様子や、それを見ていた別のスタッフの方が「そ

こにビーズとか付けたい」という言葉をかける様子が見られた。

翌日のメールから

翌日、地域包括支援センターが行っている「第2層生活支援協議体」という個別ケアのプロジェクトとツリーを掛け合わせる提案をいただいた。そして、「よなだんツリーの楽しみ方」の資料を手芸版で再構築できないかということで、「観て楽しむ」「書いて楽しむ」「飾って楽しむ」を手芸に当てはめて作ってみて欲しいという依頼があった。10月5日開催の個別ケアプロジェクト対象者は、手芸が好きなおばあちゃんで、その方のケアの一貫としてのツリーの利用を考えての提案であった。彼女は、私がペルソナ設計でモデルとしていた「コミュニティースペースに通う物静かな地域住民」であった。この会議は、彼女はものづくりが好きで、これまでコミュニティースペースに手作りのたわしを寄付していたのだが、コロナをきっかけにそれができなくなってしまったことから、認知度や介護度の悪化を防ぐためにも、活躍の場を増やしたい、という背景のもと始まったものだった。その上で、社会福祉士さんのツリー活用のイメージとしては、「作って楽しむ」「作品を置ける場所にいくのが楽しくなる」「飾って楽しむ」の三軸として、社会参加・介護予防・認知症予防に役立てるとのことだった。流れとして、おばあちゃんが物を作り、それを置きにいき、地域の方がそれを見たり、地域の手芸好きな人が一緒に作ったり、手芸品をもらう人がいるというストーリーがあると嬉しいという依頼を受けた。併せて、昨日8日に置いたミニツリーにアクセサリーのようにたわしを飾ってみたところ、ツリーの効果で、すでにたわし3つの貰い手が見つかったとのご連絡を受けた。また、UR事務所の生活支援アドバイザーの方からは、米本団地内での寄席のイベントに木を展示しても良いかという連絡、そしてUR事務所にも一つ木が欲しいとの連絡を受けた。

3.11. 価値共創：「よなだんツリー手芸版」誕生

手芸版のツリーの楽しみ方を作って欲しいという依頼から、ストーリーボードを制作した(図3.28)。

図 3.27　社会福祉士さんからメールでいただいた資料 (2021 年 9 月 9 日)

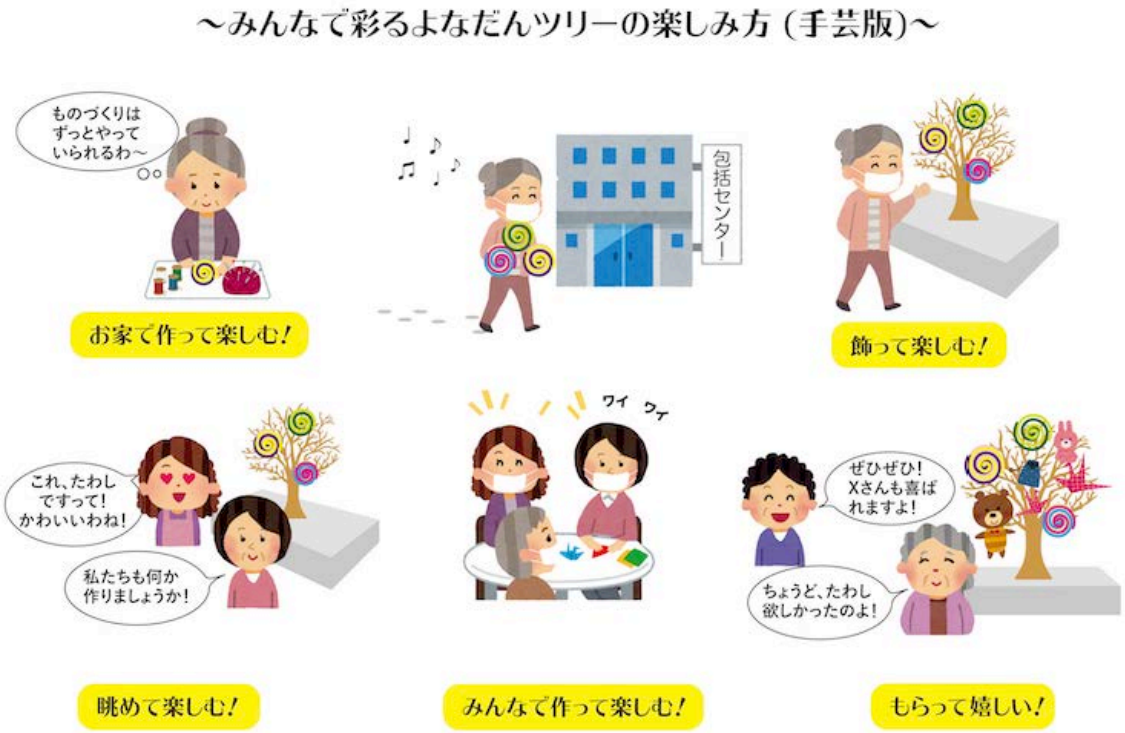


図 3.28　価値共創：よなだんツリー手芸版誕生

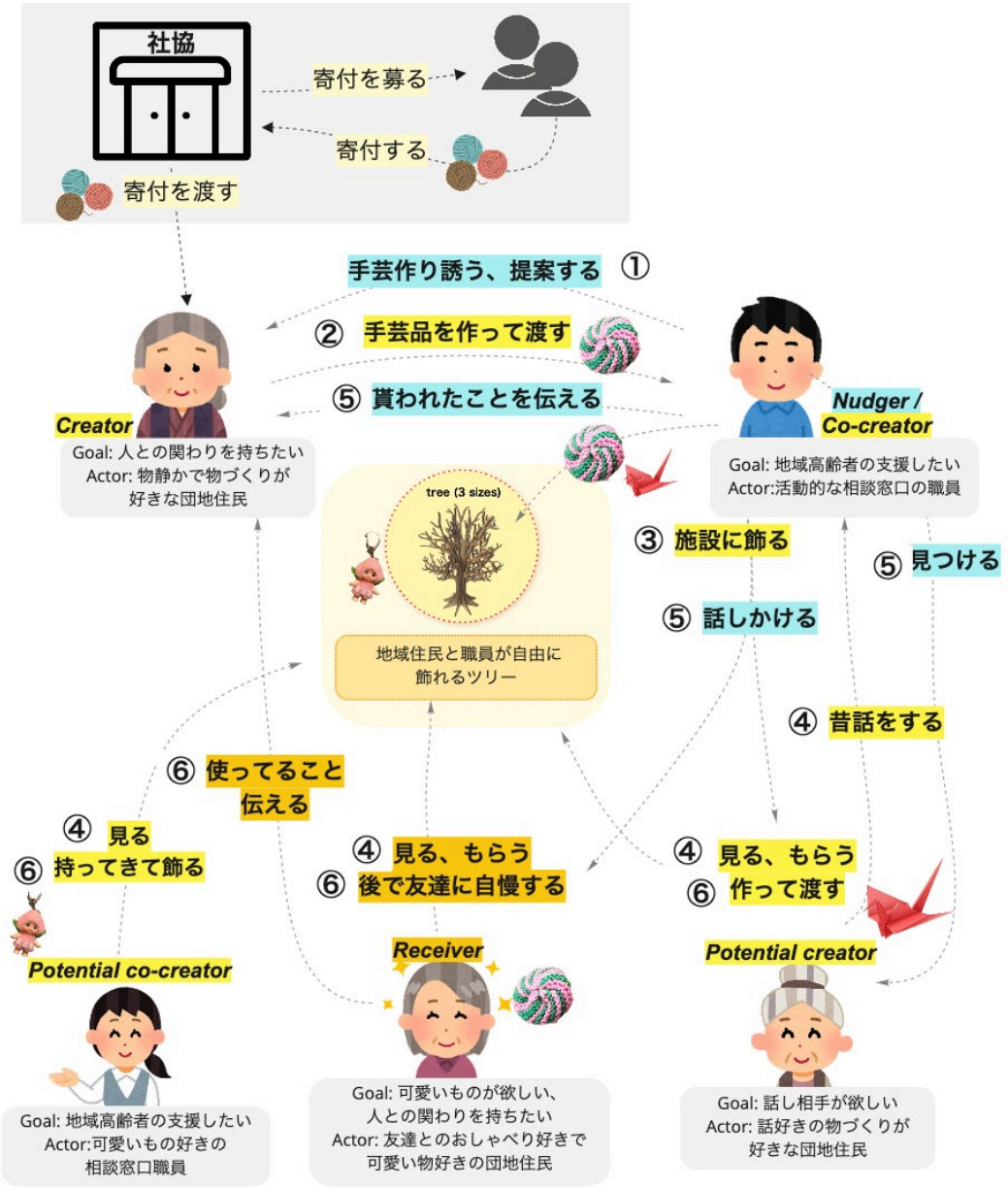


図 3.29　価値共創：手芸ツリー：エコシステム

3.12. プロダクトデザイン

「飾れるツリー」はレーザーカッターで木の形に切り抜いた４つの板を組み合わせて作られている。また、ハンドメイドサイトで多く見られる２枚の組み合わせではなく、4 枚使うことで飾る場所 (枝) を増やし、本デザインの核となる「飾る」行為の誘発・促進を試みている。また同様の目的のために「木を完成させない」ことに留意してデザインを行った。制作に入る前にサンプルとして購入したツリーのデザインにおいても、「華美なものでなく質素で綺麗なもの」を基準に選び、「飾ること」によって自らの手で木を華やかにしたくなることを狙いデザインした。

「飾れるツリー」の大きさは３種類あり、利用者はそれぞれの場所のコンテキストにあったサイズを選ぶことができる。大きいものは、多くの人が飾りをたくさん飾れるツリーとなり、コミュニティスペースや養護施設など多くの人の交流がある場所で使われる。中くらいのサイズは、たくさんの人が飾ることは難しくても、地域包括支援センターや UR 事務所、社会福祉協議会などの事務所を彩る役割を担い、訪問者と職員の ticket to talk の存在として機能する。小さいサイズも同様に場所を飾るオブジェとしての機能を持つ。加えて、このツリーには、参加者が自由に使えるテーマボードや、七夕を彷彿とさせる柄の綺麗な折り紙で作った短冊をサンプルとして掲示しており、これも ticket to talk を補完させる機能を持つ。

このツリーの最大の機能は、木を「デザインをしすぎない」ことによる余白のデザインである。これにより、利用者は場所にあった利用をそれぞれが考え出し、利用者による多様なカスタマイズを可能にする。

図 3.30　プロダクトデザイン

第 4 章
価 値 検 証

価値検証 1 では八千代市阿蘇・睦地域包括支援センターにて「飾れるツリー」が緩やかな繋がりを生むことが出来たのかについて述べる。価値検証 2 では価値検証 1 での価値が他の八千代市内の地域ケアを行うステークホルダーにも受け入れられたかについて述べる。価値検証 3 では他の価値提案の可能性について述べる。

4.1. 検証方法

検証は、地域包括支援センターで行った実装実験、地域活動に関わるステークホルダーとのフォーカスグループディスカッション、そして実際に 10 拠点に広がった結果から総合的に行う。それぞれの拠点、期間、データ収集方法については図 4.1 に記載してある。データ収集期間については、ツリーを譲渡した日から、データ収集終了日と設定した 12 月 2 日までの期間となっている。データ収集の方法に関しては、全ての施設において写真記録を取っている。その中で、定期的な訪問が可能な施設や、参与観察が可能だった施設については、それらも加えたデータとなっている。アンケート調査とインタビュー調査については、地域住民のケアを業務としている職員に対して行っているが、参与観察が出来なかったケース 5 については、アンケート及びインタビューも実施した。また、ケース 9 とケース 10 については、木の譲渡から日数が経っていないことから、本論文において詳しい結果については割愛する。本評価で用いている参与観察法は、その場での観察や録画を通して、人々の行動や発言を体系的に詳細に観察し記録する観察方法である。社会学者の Goffman は、対象とする人々の社会的世界を知るためには参与観察が最適であると述べており、人々が日常的に行う、ちらっと見たり、身振り

	施設・団体名	データ収集期間	データ収集方法
地域住人の生活を支援する立場の施設			
ケース1	阿蘇・睦地域包括支援センター	9月8日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録 ・アンケート調査 ・インタビュー調査
ケース2	UR米本団地管理事務所	10月5日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録
(ケース3)	UR村上団地管理事務所	11月26日ー12月2日	・写真記録
ケース4	八千代市社会福祉協議会	10月18日ー12月2日	・写真記録 ・アンケート調査
ケース5	オリーブ薬局	10月26日ー12月2日	・写真記録 ・アンケート調査 ・インタビュー調査
ケース6	高齢者総合福祉施設 はなみずき	10月18日ー12月2日	・写真記録 ・アンケート調査 ・インタビュー調査
ケース7	特別養護老人ホーム 美香苑	9月27日ー12月2日	・写真記録
地域住人の集いの場			
ケース8	米本コミュニティースペース ほっこり	10月5日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録
ケース9	睦地区サロン 麦の会	10月19日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録
(ケース10)	米本団地南自治会	11月8日ー12月2日	・写真記録

図 4.1 拠点とデータ収集期間及び方法の一覧

を見せたり、立場を決めたり、発言したりするなどの人々の「ささいな行為」や動作は、社会の編成と関連する研究の貴重な素材であると主張している。そして、そのような「ささいな行為」をつぶさに系統的に考察する参与観察は、相互行為研究や心理療法への応用にも発展すると示している [8] [32] [33]。ダイアリー記録においては、Alaszewski によるダイアリー法を参照して制作しているが、実験先のコンテクストに合わせて変更している [34]。アンケート及びインタビューについては、Adams らによる半構造化インタビューを採用している [35]。

4.2. 価値検証 1「阿蘇・睦地域包括支援センター」での参与観察

本節では、10 拠点への拡大を可能にした、阿蘇・睦地域包括支援センターで行った価値検証実験について、参与観察法で得た結果をもとに記述する。

4.2.1 環境設定

2021 年 9 月 8 日の社会福祉士さんとの会議を経て、短冊版と手芸版のツリー二つ (図 4.3) を阿蘇・睦地域包括支援センター内に設置し観察を行った。9 月 8 日から 9 月 22 日まで手芸版を置かせてもらい、22 日から短冊版のツリーも置かせてもらった。また 9 月 27 日から 30 日まで筆者が施設に赴き、両者のツリーに地域包括支援センターの利用者がどのようにツリーと関わるか、ツリーを介して利用者と職員とがコミュニケーションを交わす様子を観察した。短冊のツリーについては、テーマとして、社会福祉士さんから依頼された健康に関するものとして「健康の秘訣」とこちらからの提案の「秋に食べたいもの・行きたいところ」の 3 種類を用意して、七夕の短冊を彷彿とさせるツリーとした。

地域包括支援センターは、介護・医療といった個々のサービスだけでなく、地域ぐるみで高齢者を総合的・包括的に支えていく役割を担う[1]場所である。訪問者

1　地域包括支援センターとは, https://www.bikou.net/ths/ths.html (2021 年 11 月 20 日閲覧)

は団地内に住んでいる人で、この時期は緊急事態宣言下あったこともあり、1 日に訪問する住人は 10 人程度であると聞いていた。内訳としては、大方がウォーキングスタンプラリー[2]に来る人で、数人相談に来る来訪者や、営業や団地内の職員などが訪れていた。

	期間	対象	データ収集方法
結果1	9月8日ー9月24日	サンプルで持参したツリー (手芸ツリー)	社会福祉士さんからのヒアリング
結果2	9月27日ー9月30日	サンプルで持参したツリー(手芸ツリー)と短冊用に持参したツリー	筆者による参与観察
結果3	10月4日ー10月8日	サンプルで持参したツリー(手芸ツリー)と短冊用に持参したツリー	社会福祉士さん、他職員によるダイアリー記述

図 4.2　実験日程とデータ収集方法

9月9日　　9月22日　　9月24日

図 4.3　実験開始時のツリーの様子

4.2.2　結果 1：2021 年 9 月 8 日-9 月 24 日

本項では、9 月 8 日から 9 月 24 日まで社会福祉士さんに行っていただいたモニタリング結果について、9 月 24 日に行ったインタビューをもとに記述する。ツリーの利用について伺うと、短冊のツリーに関しては、訪問者の方が自主的に書くこ

2　ウォーキングスタンプラリーの拠点場所として利用されている

とはなかったと話された。趣旨を話すと色々と教えてくれるが「めんどくさい」「手が震えて書けない」「恥ずかしい」などの理由で自らの手で書くことはなく、社会福祉士の方が代筆で行っていたと話した。しかし同時に、テーマについてその場で考えること自体が認知予防になると話し、短冊のツリーに関してはそこを狙っていきたいと話した。そして書いてもらえれば尚更良いという考えで進めていきたいと教えてくれた。手芸のツリーについてはとてもうまく行っているとお話し、9 月 8 日から 24 日までに手作りのたわし 8-10 個の貰い手が見つかったと話した。訪問者の方々は「素敵ね」と言って持っていってくれて、作った本人もそれを聞いて喜んでいるという様子を教えていただいた。また、このたわしを作った本人は 9 月 24 日現在入院されており、退院後に免疫力をつけるためにもたわし作りを頑張ってもらい、外に出るきっかけを作る、活動量をあげていく目標に活用したいとお話していただいた。加えて、社会福祉士さんは、福祉用具の事業所の担当者様が長年の八千代市の担当から他地域への異動になった際に、八千代の思い出として手芸品をお渡ししたとお話しし、また新しく担当になった方にも渡して、車に飾ってくれたとお話しされた。そして、ツリーがあったから上手く行ったと何度も言われ、その理由としては、「おしゃれだから」、そして訪問者の方も「これいい、新しいのがある」と言って喜んでいるとお話しされた。そのため、このまま継続してモニタリングを続けていきたいということになった。

4.2.3 結果 2：2021 年 9 月 27 日-9 月 30 日

本項では、9 月 27 日から 9 月 30 日にかけて地域包括支援センターで行った参与観察の結果について記述する。私が観察した範囲内で、9 月 27 日に訪問した人は 10 人で、そのうち社会福祉士さんが交流を促したのが 8 人で、そのうち 7 人がツリーに対して短冊を書いたり、手芸品をもらう姿が観察された。

短冊ツリーについて

社会福祉士さんは、短冊のツリーを訪問者の方に勧める際には「みんなで秋を彩ろうということで... 秋の芸術ということで、みんなでやろうって」と紹介され、

それに促されるように、ウォーキングスタンプラリーに来ていた訪問者は列になって短冊に書き込む様子が観察された。社会福祉士さんが「健康の秘訣、秋に食べたいもの、行きたいところ！」と言うと、一人の訪問者が「カラオケボックス」と笑いながら呟く様子や、他の回答を眺める様子、また、自分の書いた回答が少し恥ずかしいから「下に飾ろう～」と呟きながら飾る様子が見られた。**→仲間とみんなで楽しむ**

社会福祉士さんは、相談に来られていた方に対しても、相談が終わった後に短冊ツリーと手芸ツリーを紹介してくださった。この方は、しばし他の人の回答を眺め、短冊に書き始めた。すると奥から別のスタッフの方もでてきて、社会福祉士さんと一緒にこの方の回答を見られていた。社会福祉士さんは、「葡萄」と書かれた短冊を見て「いいですね～」と呟いたり、行きたい場所に「ヨーロッパ」と書かれたのを見て「どちらに行かれたんですか？」と聞く場面があった。するとこの方は、昔行った国についてのお話をされて、また「ハワイにも行きたい」と答えられるなど、旅行についての話で盛り上がっていた。そしてこの方が帰られた後に、社会福祉士さんが同僚の方にこの方がこういう人だったみたいだと共有する様子が観察された。**→訪問者理解へ**

また営業のお兄さんが来た際にも社会福祉さんはツリーについて紹介してくださり、お二人で温泉の話で盛り上がっている様子が伺えた。しかしながら、短冊ツリーに関しては、プレ同様社会福祉士さんの促しがなければ、自ら書く人はいなく、また他のスタッフさんが促してもやらないなどの側面も同時に観察された。

図 4.4　短冊に書き込む友達三人組

図 4.5　杖を持った女性 (左)、相談に来ていた女性 (右)

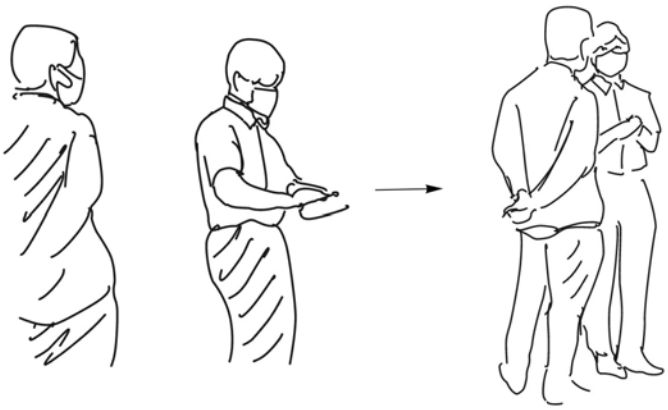


図 4.6　営業のお兄さん

手芸ツリーについて

一方で、手芸のツリーに関しては、プレで見られたように一貫して何かしらの交流が生まれているように見られた。それは、単に目に入って見るというささいなことから、何度も見るが、もらうのは遠慮する姿、また手芸品をもらって喜ぶ姿や、積極的にツリーを動かしたり、自分の昔やっていたことを共有する人まで様々であった。初日においては、杖を持っていた利用者に対して社会福祉士さんが手芸品を勧めると、彼女は「いいんですか？」と喜び、「ありがとうございましたうれしいです〜！ありがとうございます〜」と何度もお礼を言って帰っていく様子が見られた。またウォーキングスタンプに来た一人の女性に対して、社会福祉士さんがスタンプを押すついでに手芸品を勧めると、この女性は「そうなの？、これがいいんじゃな〜い？」と言いながら、ツリーをぐるっと回して手芸品を選んでいた (図 4.7)。そして「私もこんなのが作れたらねー」と呟くと、社会福祉士さんは、「今度またなんかこういうの企画してみますね」とその人に話していた。この女性はまた後日来た時に、チラッと木を見て「ここにあった可愛い鶴なくなっちゃったね」と職員の方に話しかけたり、その奥の棚に並んでいた手工芸品を指差して、自分も昔作っていた話や、手工芸品に使われていた昔のタバコの包装紙を見て、昔のタバコの話を職員さんとする姿が見られた (図 4.8)。そして、その方が帰った後その会話を聞いていた奥にいた別の職員さんがやってきて、昔のタバコの話を同僚とする様子もあった。またスタンプをもらいに毎日くる友達三人組が、ツリーを触ったり、二個目をもらってニコニコする様子があったり、職員さんがスタンプをもらった後も周りを眺めている訪問者さんに対して、「よかったらどうぞ」と言うと、「いいんですか〜、じゃあ」と言いお礼をして帰る様子などもあった。また特に動物のマスコットを介して会話が生まれることが多く、職員さんが手前に三段重ねに飾った亀の三兄弟を愛でる訪問者を多く見た。中には、手芸好きな方で、ツリーを回して念入りに見る姿もあり、自分が作ったことのないものを見ると、どうやって作るのかが気になり、作れないものを持って帰る様子も何度か見られた。一方で、手芸ツリーに関しても、職員さんが紹介しないと交流が生まれないことが多かったが、ウォーキングスタンプ場所の近くにおいてあったこともあり、誰もが一度は見る様子が観察された。中でも 9 月 28 日に相談に来ら

れた女性は、職員の人が来る少しの待ち時間の間ツリーを三度見している様子が見られた。

図 4.7　ツリーをぐるっと回して選ぶ女性

図 4.8　昔作っていた作品について話す女性

職員さんのツリーへの関わりについて

・魔法の木

手芸ツリーに関して、訪問者が手芸品を貰っていくと、社会福祉士さんをはじめとして他のスタッフの方も新たなものを補充したり、かけ方を変えて見栄えを確認する様子が見られた。そして社会福祉士さんが手芸ツリーのことを「魔法の木みたいだね」と表現したり、補充したりすることについて「やっていて楽しい」と表現した。同様に、職員 A さんからは「宝の木みたい」と言う言葉が聞かれた

図 4.9　ツリーにかけられたニット帽を動かす女性

図 4.10　イチゴ型のたわしを貰って喜ぶ女性

図 4.11　ツリーを触ったり、二個目を貰ったりする友達組

図 4.12　スタッフに勧められたものをもらう女性

図 4.13　スタッフにどうぞと言われて喜ぶ女性

図 4.14　手芸の話をしても、もらうのは遠慮する女性

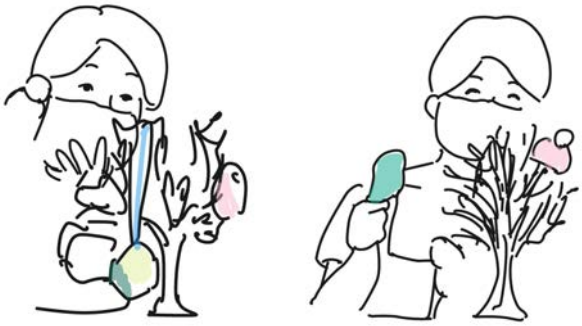


図 4.15　かっぱを貰って喜ぶ女性

図 4.16　かかっているものを念入りに見る手芸好きの女性

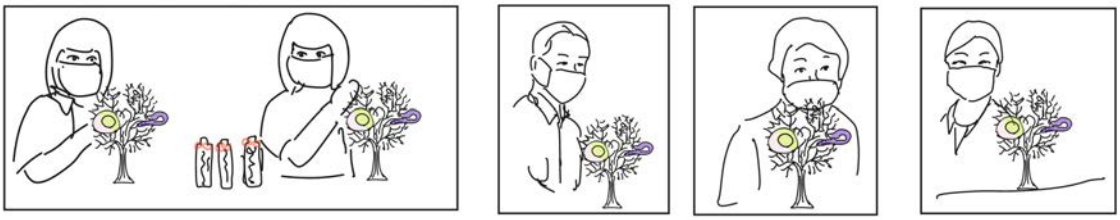


図 4.17　通りすがりに見る人たち 1

図 4.18　通りすがりに見る人たち 2

り、職員 B さんからは「なんかこの木で雰囲気よくなったね～」そして職員 C さんからは「木の特設コーナーを作ったら！」という言葉も聞かれた。

・飾り付けの誘発

9 月 29 日には、職員 A さんがこれまでストックしていた手芸品をツリーの周りに並べ始め、それを見た他の職員さんたちも飾り付けに参加しはじめた。そして社会福祉士さんが、置いていたミニツリーがいっぱいになっているのを見て、他の拠点用に保管してあったツリーを持ってきて隣に並べる場面があった。また職員 A さんは「こういうの集まると可愛いんだよね」と言って亀の親子をツリーの前に並べる姿があったり、「動物がいるとね、顔をこっちに向けるといいじゃない」と話す場面があった。

・ツリーを介したコミュニケーション

そこで飾り付けをどうするか話したり、「うち何屋さん？販売屋さん？」と笑いながら話す様子が伺えたり、小物入れに「楽しいもの入れてあげたら？四葉のクローバーのしおりとか?お菓子とか入っていると、それでも楽しくなるよね」などと会話をしながら飾り付けが行われていた。また、前にぶら下げた唐辛子が人気ですぐにもらわれた話や、初対面の人同士が手芸のたわしについて玄関前でずっと話していた話など、訪問者さんについても話題に上がった。

・擬人化する表現

また「カブはお尻が隠れちゃうとちょっとね」とか、木にニット帽をかぶせて「木があったかくなった」と表現したり、ツリーを見て「働き娘」と表現するなど、ツリーを擬人化して表現する姿が見られ、同様のことは他の職員からも伺えた。

図 4.19　職員さんが飾り付けをする様子

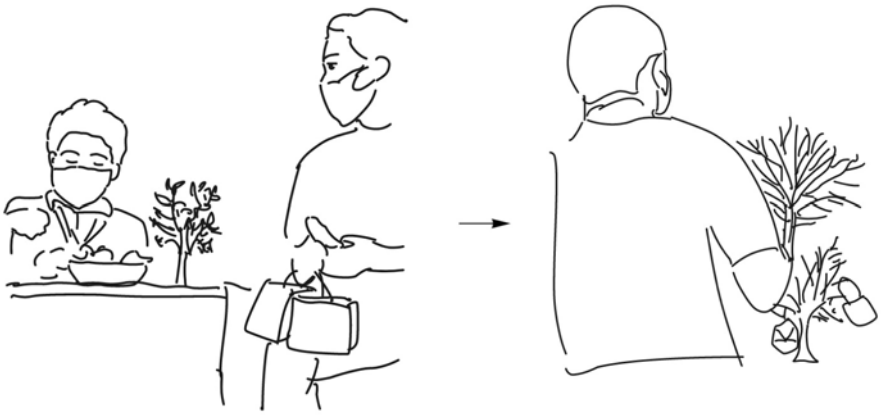


図 4.20　二個目の木を持ってくる職員さん

図 4.21　職員さんが飾り付けをする様子

4.2.4　考察

「飾る」行為が持つ巻き込む力

今回の観察で最も明らかになったことは、飾る行為が持つ創造的活動への包括性である。ものづくりが好きな人だけでなく、このツリーはその周辺にいる人も、飾るという行為を通じて創造的活動に巻き込んでいた。「飾り」というのはいかにも女性的なもので、男性が積極的に関わる様子はあまり想像されない。社会福祉士さんも特に美術や工芸に関心があるわけではないと思うが、どうしたらよく見えるかを考え飾り直したりする様子や、やっていて楽しいという言葉が聞かれた。このことから、ツリーを作った私や束子を作った手芸好きの人たちの創造的な活動に関与していると言えると考察された。これは、社会福祉士さんだけでなく、総じて他のスタッフの人の行動からも分かったことで、少し位置のずれた短冊をヒョイっと戻したりする行為から、職場の「見栄え」をよくしたいという思いが伺えた。同時に「飾る行為」は自分と場所の関係性を深めるだけでなく、地域の人と自分の関係性を深めることにもつながることも分かった。社会福祉士さんは手芸品をあげることについて、「地域の人が作ったものをあげるだけなんだけど.. 欲しい人が持っていってもらえれば、こっちも幸せになるし」とコメントし、

地域の人の活躍をお手伝いできること、そして地域の人の喜ぶことに貢献できることが、飾る行為を媒介して可能になることが考察された。

場所性の一致・不一致

短冊ツリーに関しては、社会福祉士さんからの促しがない限り参加者は見られなかった。プレの期間で社会福祉士さんが言っていたように「めんどくさい」「手が震えて書けない」「恥ずかしい」が参加しない主たる理由だということに同意した。一方で「めんどくさい」に関しては、その背景として地域包括支援センターの「場所性」との不一致が大きく関係していると感じた。4 日間の観察を通して、多くの訪問者はスタンプをもらいに来ている人で、その滞在時間は 30 秒程度だった。加えて、その短い滞在から、そもそも入り口までしか入ってこなかったため、短冊ツリーに目がいっていなかったことも理由の一つだった。このように、「目的がはっきりしていて、さくっと寄る場所」としての認識を持っている人が多い場所において、わざわざ短冊に書くことは「めんどくさい」と捉えられても不思議ではなかった。

情報収集のメディアとして

他方で短冊ツリーを完全否定するわけではなく、価値となり得る要素が見られた場面もあった。それを特に感じたのは、社会福祉士さんが相談に来ていた訪問者の方に相談が終わった後に短冊を勧めた時のことである。訪問者さんは、昔行った国について話したり、これから行ってみたい国について話し始め、それをまた別の職員さんが聞きに来たり、それを聞いた社会福祉士さんが「〇〇さんの行動的な部分ですねー」とコメントしていた。そして彼女が帰ったあとに、同僚の職員さんに、「〇〇さんってここに行ってたんだって」と共有していた様子から、訪問者の方を知る情報収集手段の一つとして活用できる可能性があることも考察された。同様のことは手芸ツリーにおいても言えることが分かった。社会福祉士さんは、ツリーを介した会話の中で、「私もこんなの習ってみたい」と訪問者から声をかけられたことがった。それについて、自分たちも対象者からの声がないと何

もできないため、このような会話を漏らさず聞き取って次につなぎたいと話していた。つまり、誰かの特技を視覚化できるということは、同じようなことが好きな人の新たな発見に繋がると考察された。このことから、思い出共有ブックで考察されたことと同様、地域包括支援センターのように地域住人の暮らしを支援する立場の施設において、対象となる人について知ることができる手段としての利用が考えられた。そして、その上で、見栄えがする存在であったり、手に取ってみたくなったり、回してみたくなる、というアフォーダンスは、その発見をさらに促すことのできる役割を持つと考察された。

4.2.5 価値検証 1 のまとめ

以上の結果から、「飾れるツリー」を介して「話す」「作る・書く」「書いてもらう」「飾る」「貰う」「観る」「見る」という現象が見られ、様々なコミュニケーションが生まれることが確認された。そしてその後の参与観察、ダイアリー記述などから「作る」「話す」「観る」「貰う」「飾る」行為を行った住民・ケアスタッフのアクターは「飾れるツリー」を通して「日常の楽しみや喜びになる」という文脈価値を受け取ったことが分かった。また、ケアスタッフに対しては「住民との接点が増加、住民の理解が深まる」という文脈価値に貢献したことが分かった。一方で、「書く」「見る」行為を行ったアクターが「日常の楽しみや喜びになる」という文脈価値を感じたかについての検証は不十分であったことから評価はできない結果となった。

4.3. 価値検証 2: フォーカスグループディスカッション

前節までの結果を受け、2021 年 10 月 5 日に生活支援体制整備事業の一環として行っている阿蘇睦圏域の第 2 層生活支援協議体にて、地域活動を行う様々な立場の皆様と、どのように地域一体としてのツリーを活用していくかについて議論を行った。

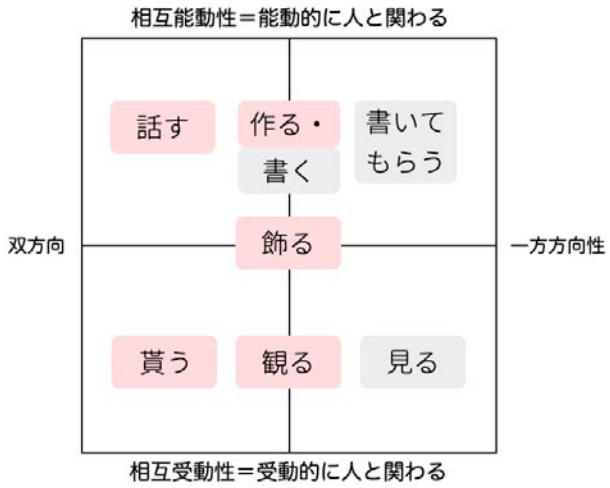


図 4.22　「飾れるツリー」における緩やかな繋がり

4.3.1 環境設定

生活支援体制整備事業とは、高齢者が住み慣れた地域で自分らしく生活をしていくために、生活全般を支援できる地域づくりを目指す市の事業である。この事業にはステップ 1 として課題の把握として行う「個別地域ケア会議」、ステップ 2 として、課題の解決方法について議論するための「第 2 層生活支援協議体」と呼ばれる、地域の様々な事業体や住人を交えた話し合いの場があり、そしてそこでの様々な専門家との共創を経た結果をステップ 3 として市内全域を対象としている「第 1 層生活支援協議体」の場で報告している。八千代市においては、「第 1 層生活支援協議体」は八千代市社会福祉協議会に委託して行っており、これらの協議体には生活支援コーディネーターと呼ばれる職員がいる。第 2 層においては、阿蘇・睦地域包括支援センターの社会福祉士さん U さんが勤めており、第 1 層においては八千代市社会福祉協議会の Y さんが勤めている。今回の「第 2 層生活支援協議体」では、以下の地域に関わるステークホルダーの方々にご参加いただいた。10 月 5 日の個別ケースの対象者は、「コロナで活躍する場所を失った手芸好きのおばあちゃん」であり、この対象者については、3.8 の図 (3.17) であげている「場所や人と繋がりを持っていたい静かな女性」で詳しく説明している。10 月 5 日の会議では、9 月に行った実験結果を地域内の様々なステークホルダーと共有し、

対象ペルソナを中心として、どのように地域一帯としてツリーを介した活躍の場の拡大を行うことができるかについて議論を行った。また、会議にはこれまで制作した 5 つのツリーを持参し、テーブルの中央に並べて議論を行った。

図 4.23　地域ケア会議ステークホルダー

図 4.24　ツリーを中心に置いた会議の様子

4.3.2 結果

ツリーの受け皿と手芸品共有方法

今回の会議を受けて、全てのステークホルダーから活躍の場の受け皿としてツリーを置きたいとの依頼を受けた。対象ペルソナが自身の作品を自分で飾りに行ける場所として、米本団地内にある地域包括支援センター、米本コミュニティスペースほっこり、UR 管理事務所への設置、地域間で手芸品の共有を行って飾る場所として、特別養護老人ホーム、社協、薬局への設置が決まった。また別の作り手の拠点として、地域のサークル「麦の会」と自治会への設置が決まった。地域間の手芸品の共有については、それぞれ各拠点で個別に対応していくこととなった。例えば、地域サークルの方で団地に来られる時に持ってきていただいたり、特別養護老人ホームの方が利用者の送迎を行う時に地域包括支援センターに寄っていただいたり、また薬局では、処方箋を取りに行く時などに持ってきてもらうなど、全体が協力して各拠点のツリーを活用していくこととなった。また、阿蘇・睦地域包括支援センターで実施しているボランティアカードに、作り手の募集もかねて「飾り付けを行ってくれる方」も追加することになった。同時に、本会議では「コロナで活躍する場所を失った手芸好きのおばあちゃん」の活躍の場を拡大することを議題として行われたものだったが、ツリーを各拠点に置くのであれば、各拠点でそれぞれ地域で作ったものも飾ろうという結論になった。

地域連携の可能性

どのようにこのプロジェクトを発展させていくかの議論において、さらなる地域連携が生まれる可能性が示唆された。例えば米本コミュニティスペースほっこりにおいては、展示会を開きたいという希望があり、麦の会の人に来てもらって、教えてもらえる機会があったらいいとお話しされた。そして展示会の際に作れる場所も設けることで、行って見て楽しむだけでなく、自分も何か持ち帰ることができることで、さらに気持ちよく帰ってもらえるのではないかと提案された。同様に、薬剤師の方についても、健康セミナーなどを開催する時に、麦の会を呼んで、薬局のイベントの広報にもなっていただけたら嬉しいとのお話があった。そ

番号	拠点	大	中	小	合計
1	はなみずき	2	2	2	6
2	麦の会	1			1
3	南自治会		1		1
4	社協		1		1
5	オリーブ薬局	1	1	1	3
6	ほっこり	1			1
7	UR管理事務所		1	1	2
合計		5	6	4	15
備考：包括にすでに2つ、美香苑特別養護老人ホームに1つ置いてある					

図 4.25　会議で新たに受けた注文数

図 4.26　ボランティアカードとのコラボ

れに対して、麦の会の方々も「いくらでも教えられるので呼んで下さい」と応えられたり、特別養護老人ホームが文化祭を控えているとお話しになった際にも、麦の会さんは、「ぜひ文化祭に自分たち作ったものをご利用ください」と快く寄付に応える様子が見られた。特別養護老人ホームについては、将来的に、地域の人の作品も飾ることで、施設の利用者や関係者以外の人も気楽に足を運んでくれるようになったら良いと希望を話された。また、UR 都市機構 千葉西住まいセンターウェルフェア課長の方はそれらのやりとりに対し、教える場を設けることは、教える側の生きがいにもなることだと思うとコメントした後、UR でもそのような展示の場として集会所を利用して欲しいとお話しされた。このように、それぞれがさらなる地域連携を望む様子や、その場ですでに人と人との繋がりが生まれ始める様子が伺えた。

検討点

検討が必要な課題として挙がったのは、手芸品を作ってくれる方々に対する謝礼についてである。ほっこりに置かれている作品の中には、大変時間をかけられている物もあるため、それらには値段がつけられ、半分は制作者の材料費に、もう半分は施設に還元されている。対象ペルソナのモデルとなっている方も、ここに作品を置いていた際には 50 円の値段をつけていた。ほっこりのリーダーを務める方は、無料で置いているとすぐになくなってしまうことを挙げられ、今回のツリーに飾る作品についても、物によっては値段をつけたいと申し出た。一方で、UR 管理事務所や社会福祉協議会の方々は、立場上お金を取ることはできないと話された。それを受けて、地域包括支援センターの社会福祉士さんは、お金をとるかどうかについては、個々の場所の判断に任せると話され、それぞれに合ったやり方で進めることを第一にすることを伝えられた。

参加者から見られた様々なインタラクション

今回も 9 月に行った実験と同様に、職員さんと作り手さん、職員さんと職員さんの間で、ツリーや手芸品を通した様々なインタラクションやコミュニケーショ

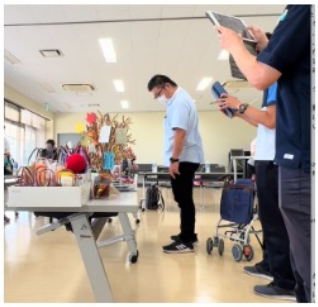
ンを観察することができた。会議が始まる前には、社会福祉士さんが飾りを持った箱を抱えて、早く到着した参加者に対して「みんなで飾りましょ」と言って飾り付けに参加する職員さんの様子や、「飾るのがたりないじゃん、なんかな〜い？」「○○も持ってくればよかったね」と仲間内で話す手作りさんグループの様子などが見られた。9 月に地域包括支援センターで行った際にはあまり積極的な交流が生まれなかった短冊ツリーに関しても、多くの参加者の間で短冊を読んで何かを話す様子や、ＵＲ米本団地管理事務所ＡＤ、社会福祉協議会第１層生活支援コーディネーターの方が興味を示す姿が見られた。そしてお二人からは、ぜひ短冊ツリーをうちに置きたいと言っていただいた。会議が終わった後は、カクテルパーティーのように参加者がツリーのテーブルを囲い、交換会と譲渡会が行われていた。手芸に造詣がない人でも、作品を手にとって触ってみたり、これはどう作ったのかを作り手に聞くという光景が見られ、作り手は自分のものを誰かにあげることや説明することを熱心に行っていた。

職員さんから飾りを手渡され、

飾り付けを始める参加者

見たり話したり写真撮る様子

ツリーを持つ職員さん



一斉に写真を撮る職員さん

短冊を読んで話をする参加者

図 4.27　参加者の様々なインタラクション 1

職員さんが職員さんに手芸を紹介

作り手さんが職員さんと話す

短冊を触る作り手さん

作り方を話し合う女性陣

ツリーを触る職員さん

職員さんが作り手さんにお裾分け

作り手さんが職員さんにお返しのプレゼント

図 4.28　参加者の様々なインタラクション 2

4.3.3 考察

「作り手」でも「貰い手」でもない、仲介者としての「第三者」の存在

今回会議に参加した方を観察して最も興味深かったのは、会話や物の譲渡が「作り手」と「貰い手」の関係性のみに行われていたのではなく、「作り手」から作品をもらった第三者が、「貰い手」対して熱心に作品を渡していたことである。職員 N さんからは、作者から聞いた説明を、新たな貰い手に伝えている様子や、職員 K さんからは、自分が焼いたクッキーを配るように、もらった作品を人にあげている様子が観察された。作り手と作り手、作り手と作ったものを預かった人、作ったものを預かった人同士が譲渡し合う光景は、まるで子供の頃のシール交換に盛り上がる姿を彷彿させた。また、9 月に実験を行った際に社会福祉士さんが言っていた、「欲しい人が本当に持ってってもらえばこっちも幸せになるし」という言葉を思い出す光景であり、この手芸ツリーに関しては、地域の人の役に立ちたい思い、地域との繋がりを大切にしたいという職員さんたちの想いが背景にあることが考察された。そして、今回の参与観察を受けて、誰かが作った綺麗なものを使って自分の場所を飾ったり、譲渡することを通じて告知をしたりする「第三者」のアクターが顕在化した。

場所性の一致・不一致

前章で 9 月の実験では短冊ツリーの自主的な交流は見られなかった。しかし、今回の会議ではその予想を超えた注目を浴びたことがわかり、改めて場所や人により価値が変化することが考察された。会場はまさに手芸を中心としたカクテルパーティーになっていたため、一人一人の会話を聞き取ることは不可能であったが、短冊に書いてある言葉を読み上げる声がちらほらと聞こえたり、短冊を読んでいる姿が頻繁に観察された。UR 米本団地生活支援 AD さんからは、テーマボードも一緒に欲しいと依頼され、社会福祉協議会の職員さんからは、「よな話の木」というネーミングが気に入っている様子が伺え、加えて、作り手のグループである「麦の会」の方々の注目も浴びていたことから、地域包括支援センターでは見られなかった価値が生まれる可能性があることが考察された。

「飾る」行為が生み出す「正統的周辺参加性」

今回の参与観察で見られた光景は、2020 年 12 月に私が米本コミュニティスペースほっこりで行った WS ととても類似した光景だった。そこで、私が持参した綺麗な柄に吸い寄せらるようにして集まってきた訪問者の方々、作り方を私がボランティアメンバーに教え、ボランティアメンバーが教わったことを新たな利用者に教えたりする様子、その中でギフトとして送られる作品。このようにスキルとモノが交換されることで、周りが徐々に巻き込まれていく姿があった。そこで見られた構図は、この会議で見られた手芸品と手芸品の作り方の共有によって周りが巻き込まれていく様子と同様であった。このことから「飾る」行為は「共有する」と同義語に近いことが分かった。自分自身や他者のことを共有することは、容易なことではないが、「飾れるツリー」は自分や他者のことを共有することを自然と促す。そしてその共有は、その場でだけで完結するものではなく、作ったものを使う人が生まれたり、新たなものづくりの方法を習うことができたり、もらわれることで、新たなものづくりを行う活力や喜びを生み出したりと、多方面に多様な繋がりを生みだすことができる。そしてそれぞれが自ら新たに発展しうるという意味において、他者を巻き込むことのできる正統的周辺参加性 [36] のあるメディアであると考察される。

4.3.4 価値検証 2 のまとめ

八千代市阿蘇・睦包括支援センターの生活支援コーディネーターにより、生活支援体制整備事業の一環として進行した。そのため、価値検証 1 での成果をもとに、生活支援コーディネーターにより八千代市内の高齢者ケアに関わる様々なステークホルダーに対して価値提案及び価値共創が行われた。その結果 2021 年 12 月 2 日現在、八千代市内の他 9 拠点にもツリーの設置が決まった。以上のことから、価値検証 1 の結果が八千代市内の他のステークホルダーにも受け入れていただいたことが分かった。(追記：2022 年 1 月現在、「飾れるツリー」は八千代市内全ての地域包括支援センターを含む福祉施設 17 箇所に 25 個のツリーの設置が決まった)

4.4. 価値検証 3: 10 拠点への実装拡大

価値検証 1 と価値検証 2 を受けて、前章のフォーカスグループディスカッションへ参加した拠点を中心として、11 月 30 日現在ツリースポットが 10 拠点まで広がった。この節では、価値検証 1 でも紹介した地域包括支援センターも含め、それぞれの拠点でどのように使用されたのかを、1ヶ月〜3ヶ月の長期期間の視点から述べる。また、それぞれのデータ収集方法については、本章の評価方法に詳しく記述している。10 拠点のケースについては「地域住人の生活の支援を業務とする施設」と「地域住人の集いの場」の二つに分けて記述している。前者として「ケース 1: 阿蘇・睦地域包括支援センター」「ケース 2: UR 米本団地管理事務所」「ケース 3: 八千代市社会福祉協議会」「ケース 4: オリーブ薬局」「ケース 5: 高齢者総合福祉施設 はなみずき」「ケース 6: 特別養護老人ホーム 美香苑」を含んでおり、後者として「ケース 7: 米本コミュニティスペース ほっこり」と「ケース 8: 睦地域サロン『麦の会』」を含んでいる。また前者のケースにおいては、利用者や訪問者と職員に対する効果を測るためにアンケートに回答していただいていた[3]。

3 特別養護老人ホーム 美香苑については、データ収集期間が作品展へのツリー自体の出展だったため割愛している

	施設・団体名	データ収集期間	データ収集方法
地域住人の生活を支援する立場の施設			
ケース1	阿蘇・睦地域包括支援センター	9月8日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録 ・アンケート調査 ・インタビュー調査
ケース2	UR米本団地管理事務所	10月5日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録
(ケース3)	UR村上団地管理事務所	11月26日ー12月2日	・写真記録
ケース4	八千代市社会福祉協議会	10月18日ー12月2日	・写真記録 ・アンケート調査
ケース5	オリーブ薬局	10月26日ー12月2日	・写真記録 ・アンケート調査 ・インタビュー調査
ケース6	高齢者総合福祉施設 はなみずき	10月18日ー12月2日	・写真記録 ・アンケート調査 ・インタビュー調査
ケース7	特別養護老人ホーム 美香苑	9月27日ー12月2日	・写真記録
地域住人の集いの場			
ケース8	米本コミュニティースペース ほっこり	10月5日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録
ケース9	睦地区サロン 麦の会	10月19日ー12月2日	・参与観察 ・定期写真記録
(ケース10)	米本団地南自治会	11月8日ー12月2日	・写真記録

図 4.29 拠点とデータ収集期間及び方法の一覧

4.4.1 ケース 1: 阿蘇・睦地域包括支援センター

阿蘇・睦地域包括支援センターの概要については、4.3.1 で詳しく述べているので、ここでは割愛する。本ケースにおいては、3ヶ月間続けた写真記録、参与観察、社会福祉士さんへの定期的なヒアリング、アンケート、半構造化インタビューから記述する。

A ticket to talk or to be silent としてのツリー

地域包括支援センターにおいては、9 月 8 日にサンプルのツリーを持参した翌日から、社会福祉士さんにより手芸品の飾り付けが行われ、主にウォーキングスタンプに来た訪問者の方達と職員さんの間で、手芸品の譲渡を介した交流や話のきっかけとして活用された。社会福祉士さんが記入したアンケート結果によると、「訪問者さんが飾りを手にとったり、短冊を読む様子が見られたか」また、「ツリーを介した会話が起こったか」という質問に対して、両者ともに「頻繁に起こった」と回答し、訪問者から「私も手芸品を作りたい」という声が聞かれたり、そういった言葉から、「手芸品が得意な人と繋がることができた」と回答した。また、「知らない間に飾りが変化することはあったか」との質問に対し、「見覚えのない人形とかあってびっくりした。けど面白かった。それだけで笑うことができた」と回答し、訪問者さんの能動的な参加だけでなく、それによって職員さんへのポジティブな波及が生まれたことが分かった。加えて、ツリーを置いたことで良かったこととして「この木があればなんでもできる。個々の活躍の場と交流と手芸品を共有することで新しい支え合いや助け合いが肌で感じることができました。」と回答され、支え合いや助け合いの媒介として機能することが考察された。

ターゲットペルソナ「ものづくりが好きな物静かな女性」にとっての活躍の場として

ターゲットペルソナモデルの「ものづくりが好きな物静かな女性」は第 2 層生活支援協議体での対象ペルソナとして取り上げられた方で、この方の活躍の場を増やすことを目的に議論は行われた。実際、緊急事態宣言下で彼女がいつも作品

を置いていた米本コミュニティスペースほっこりが閉鎖されていた中、地域包括支援センターのツリーに社会福祉士さんが手芸のたわしを置いたところ、9 月 8 日から 10 月 5 日までの間で 20 個もたわしが貰われたとの報告を受けた。そしてこの件について、「木がなかったら出来なかった」との言葉を何度も社会福祉さんからいただいた。また地域包括支援センターのセンター長の方は、「言うことも大事だが、それを形にできるもの大切」とお話しされ、今回は社会福祉士さんの「介護予防」という目的をツリーを飾る行為が形にしたと考察された。

また、この方は 9 月の中旬から 10 月の中旬まで体調を崩されて入院をされていた。そのような中、9 月下旬に社会福祉士さんは貰い手がたくさん現れたことを本人に電話で伝えたり、退院後に直接伝えたりされていた。そしてその時のご本人の様子について、「ありがとうって言ってくれた、よかったよかった」とお話しされた。さらに彼女は退院後、若い頃に自分で作っていたタワシの宣伝チラシをこの機にタンスから出して持って来られたという。そしてそれは地域包括支援センター、ほっこり、UR 米本団地管理事務所に設置された。社会福祉士さんからは、普段は歩くことが苦手だったり、一緒に歩く友達がいなかっただが、タワシとチラシを置くことで、地域の方が本人やタワシに興味関心を持ち、今では一人で歩いたりお友達と歩く姿も見られるようになったことが聞かれた (ウォーキングスタンプラリーの再開に繋がった)。また、その方について「うちのセンターに来て暗い顔はなくなったかな、センターにくると結構ニコニコしてくるようになったよ」とのお話も伺った。したがって、ツリーはターゲットペルソナの「ものづくりが好きな物静かな女性」に対して、活躍の場として活用されたことが伺えた。

また第 2 層生活支援協議体にて検討点として上がっていた謝礼について、対象ペルソナのモデルとなった女性に関しては、後述する麦の会のように助成金をもらっているわけではなかったため、材料費の支援として、八千代市社会福祉協議会と協力して毛糸の寄付を募り、材料の提供ができるように支援することとなった。

課題点

今回のプロジェクトで大きな成果の一つとして社会福祉士さんが挙げたことが圏域を超えた連携であった。これまでは圏域ごとにプロジェクトを行っていたが、

今回は「ツリーを飾る」という同じテーマで圏域を超えて地域活動ができたことを大きな成果の一つとして挙げられた。一方で、それはこれからの課題点にもなりうるとお話しし、圏域を超えた場合に、それぞれの圏域をまとめるコーディネーターの存在が必要になることを述べられた。社会福祉士さんは、圏域内においてのコーディネートはできるが、圏域外のコーディネートは業務外のことになってしまうと話された。これから今行っている麦の会が制作した手芸品の共有だけでなく、例えばデイケアセンターで利用者の方々が作ったものを他拠点のツリーに飾ることも行っていく際に、拠点を超えた連携がよりスムーズに行えるようにするために、横の繋がりの連携、みんなが一人のために動けるネットワークの大切さを語った。

4.4.2 ケース 2: UR 米本団地管理事務所

UR 米本団地管理事務所は、団地内にある UR の管理事務所である。UR 都市機構では、地域医療福祉拠点化に取り組んでいる団地に生活支援アドバイザー窓口が配置してあり[4]、米本団地もその一例である。そこで働く生活支援アドバイザーの方は、9 月 8 日に地域包括支援センターに初めてミニツリーを置かせていただいた時から、UR の窓口にも欲しいと言っていただいており、その後もツリーの活用を積極的にしていただいた。本項は参与観察、ダイアリー記述、アンケートから記述する。生活支援アドバイザーの方は、第 2 層生活支援協議体の場で短冊ツリーに対して大変興味を示されており、実際に事務所でも短冊を使って訪問者の方とコミュニケーションを取られていた。最初はテーマに関しては募集中と書かれたポストイットが貼ってあったが、数週間後に来ると、テーマは「私の大好きなもの」と書かれていて、短冊には、旅行に行きたい、温泉に行きたい、などの言葉が書き込まれ、職員と訪問者両者が書いたものだと説明していただいた。

4 生活支援アドバイザー, https://www.ur-net.go.jp/chintai_portal/welfare/torikumi/adviser.html (2021 年 12 月 3 日閲覧)

9月22,24日, 27日

手芸品で飾られたサンプルツリーと、持参した短冊ツリー

9月30日

職員さんによってバージョンアップした手芸ツリー

10月8日

短冊ツリーには変化なし　手芸ツリーは飾りが増える

図 4.30　地域包括支援センター 9 月 22 日〜10 月 8 日

10月15日

様々な施設に手芸品をお裾分けした結果、少なくなる

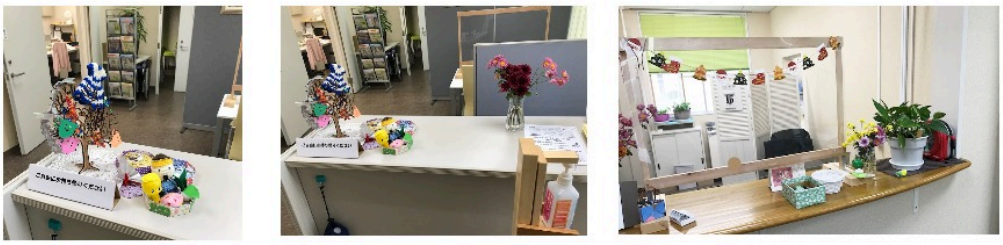
10月22日

知らないうち飾られてたハロウィンの飾り

11月4日

麦の会から新たに収穫した手芸品

11月16日



麦の会からの飾りが増える、花や観葉植物が増える

図 4.31 地域包括支援センター 10 月 15 日〜11 月 16 日

A ticket to talk or be silent としてのツリー

生活支援アドバイザーさんからのアンケート結果によると、「訪問者さんが飾りを手にとったり、短冊を読む様子が見られたか」「ツリーを介した会話が起こったか」という質問に対して、両者ともに「頻繁に起こった」と回答し、訪問者から「可愛い　誰が作ったか　作品 (折紙) の作り方」などのコミュニケーションがあったと回答した。また、そのような会話から、「利用者さんの得意なこと　お好きなこと　普段されてること」を新たに知ることができたと答えた。そして「知らない間に飾りが増えていましたか？」という質問に対しても「はい」と回答し、「ツリーを施設において良かったこと」として、「お客様との話題がぐっと増えた」との回答を得た。生活支援アドバイザーさんがツリーを介して訪問者さんと会話したことの詳しい内容については、本論文のアペンディックスに記載されている。

イベントの PR としてのツリー

UR 米本団地管理事務所の生活支援アドバイザーの方は、UR で行っている団地内の行事 (寄せのイベント) にぜひツリーを展示したいとお話しされたり、UR 管理事務所同士で繋がり合い、村上団地の UR 管理事務所で行われたイベントにツリーを一時的に置くなど、イベントの PR としても使用していた。

課題点

アンケートの際に課題点として挙げられている点はなかった。一方で高齢者総合福祉施設 はなみずきで介護職員を務める方からは、現在は生活支援アドバイザーの A さんがとても好いてくれていて自発的に色々とやっていただけているが、例えば彼女が違う地域に異動した時にツリーはどうなるのだろうか、という指摘をいただいた。そのためにも目的と効果について誰もが分かりやすい形で示す必要性が改めて重要であると考察された。

図 4.32 UR 管理事務所 10 月 8 日〜10 月 22 日

10月26日

短冊に変化なし

包括と同様、知らないうちにハロウィンの飾りが増える

11月4日

短冊に変化なし

飾りが増える

11月12日

短冊に変化なし

先週の飾りがなくなり、新たな飾りが増える

図 4.33 UR 管理事務所 10 月 26 日〜11 月 12 日

4.4.3 (ケース 3: UR 村上団地管理事務所)

UR 村上団地管理事務所は、八千代市村上地区に所在している団地管理事務所である。前節で述べているように本ケースへの発展は、「第 2 層生活支援協議体」にご参加された、米本団地の UR 管理事務所に務める生活支援アドバイザーの方を通じて広がった。もとから当二地域の生活支援アドバイザーの方同士での繋がりがあったこと、そして村上の生活支援アドバイザーの方も折り紙をされることもあり、ツリーの寄贈が決まった。本ケースにおいては、寄贈から日数がたっていないため、経過や結果については割愛するが、前述の米本の UR と同様の使われ方がされるのではないかと期待される。

4.4.4 ケース 4: 八千代市社会福祉協議会

八千代市社会福祉協議会は八千代市大和田に所在している民間の福祉団体である。米本団地からはバスと徒歩合わせて 30 分ほどの距離にある。八千代市社会福祉協議会は、4.1.1 で述べているように、第 2 層生活支援協議体の結果を報告するステップ 3 の役割として生活支援体制整備事業に関わっているステークホルダーである。また当施設はほっこりの設立も行っていたりと、米本団地の地域づくりに深く関わっている。本項は生活支援コーディネーターとその同僚の方に行ったヒアリングとアンケート調査から記述する。

ツリーをお渡ししてから数日後に、第 1 層生活支援コーディネーターさんとお話しすると、「初めは書く方から始めようと思っている」と話し、短冊ツリーに興味を持っている様子が伺えた。その背景としては、八千代市社会福祉協議会はボランティアセンターも併設している施設であるため、テーマがあると、それを見た人が新たにボランティアを始めてくれるなど、新たな繋がりが生まれたらいいという思いであった。ただ、そういった「ねらい」を持ったものはたまに行い、はじめは誰もが書きやすいテーマで行いたいと語った。また木の名前について聞かれ、各々で決めてもらっている旨を話すと、「じゃあボラセンツリーにしようかな」と話した。

A ticket to talk or be silent としてのツリー

アンケート結果によると、日常的な使われ方としては「ツリーは窓口に飾っており、来館された小さなおこさんへ (手芸品) お渡ししています。」との回答だった。また「訪問者さんが飾りを手にとったり、短冊を読む様子が見られたか」という質問に対しては、「時々見られた」との回答があり、利用者との会話が起こったかについては「覚えていない」との回答だった。一方で、「知らない間に飾りが増えていましたか？」という質問に対しては、「はい」と回答し、その内容として「職員が様々な知恵を出し、飾りを変更しています。」と答えた。しかし、このアンケートをいただいたあと、地域サークル「麦の会」の方が手芸品のストックを持ってこられたりと、地域の方との交流の場にもなっている様子だった。

情報収集のメディアとしてのツリー

また社会福祉協議会では、フードファクトリーという食材を困窮者に配るサービスのイベントにツリーを持参し、「食べたいもの」をテーマに短冊ツリーを行いニーズ把握を行っていた。このことから、9 月に地域包括支援センターで見られたニーズ把握と同様に、利用者のことを知る媒介としての利用ができることが示唆された。

課題点

アンケートの際に課題点として挙げられている点はなかった。

窓口に飾られている「ボラセンツリー」

八千代市社会福祉協議会
9 November at 08:37 · Yachiyo, Chiba ·

ふらっとホーム大和田では，月に一度食材配布を行っています。今回は※ボラセンツリー🌲が登場
『好きな食べものはなんですか？』をテーマに参加した皆さんに短冊を書いてもらいました！
次回は１２月４日（土）開催予定です。食材が必要な方は八千代市社協までご連絡ください😊
※ボラセンツリーとは…慶應義塾大学大学院の学生さんと阿蘇睦地域包括支援センター・第二層生活支援コーディネーター及び協議体による人と人とを繋げる取り組みで，学生さんが3Dプリンターでツリー🌲を作成してくれました♬

図 4.34 八千代市社会福祉協議会の Facebook から 1

図 4.35 八千代市社会福祉協議会の Facebook から 2

4.4.5 ケース 5: オリーブ薬局

オリーブ薬局は「健康で明るいくらしのお手伝い」を企業理念に、八千代市内に 5 店舗展開している薬局である[5]。12 月現在は、その中でも米本団地に近いエリアにある「すずらん薬局 (296 号線沿い)」、「すずらん薬局駅前店 (勝田台駅そば)」「オリーブ薬局ゆりのき店 (八千代中央駅)」の三店舗に大サイズ 1 つと中サイズ 2 つのツリーを置いている。データ収集については、アンケート結果とメール、またお伺いした際のインタビューから記述している。

ツリーを譲渡させていただいた 10 月 26 日以降、店舗管理を行う薬剤師さんは、地域住民との繋がりが弱い勝田台駅近くの 2 店舗について、活発な交流が起きなくて苦戦していると私や社会福祉士さんにお話ししていた。薬剤師さんにツリーをお渡しした際は、社会福祉士さんが簡単に使い方などを共有していたが、以前の会議以降装飾例などはお見せしていなかった。そのため 11 月 4 日に包括、米本の UR、ほっこりの装飾例を並べた参考資料と、短冊風の季節の塗り絵をメールで添付させていただいた。その後、11 月 12 日に手元にあった葉っぱの飾りなどを持参し実際に勝田台の二店舗にお伺いした。すると、やはりお渡しした時の状態と変化がなく、発展していない様子が伺われた。一方で、薬剤師を務める A さんからは、「話のネタには全然なってくれているかなって」との言葉をいただいた。その後 11 月 18 日メールではなみずきさんの装飾例のお写真も共有し、11 月 22 日にはアンケートの回答をいただいた。

A ticket to talk or be silent としてのツリー

アンケート結果によると、店内装飾としてツリーを活用されているとの回答で、ツリーに対して会話や触るなどのインタラクションが起きたかという質問に対しては、どちらも「時々見られた」との回答だった。興味深い結果として、「ツリーを施設に置いて良かったこと」という質問に対して、「普段接点がなかなか掴めない方と話ができた」という回答があった。これについて薬剤師の方にお伺いする

5 オリーブ薬局 すずらん薬局 公式ホームページ, https://www.aim-olive.jp (2021 年 12 月 3 日閲覧)

と、「薬局には風邪薬以外に『保健薬』という体調の改善や予防のための薬も販売しており、それをよく購入する方とお話をしたいと思っていたが、中々きっかけがなくてお話しできていなかった」「そういった中でツリーを介して、『かわいいね〜』というとっかかりから、たくさんお話しすることができた」との回答を得られた。そして、その方との会話で「こういうものが作れる人ってすごいね。こういったちょっとしたものでも、つながりができるね」というお話しをされたとも回答された。また、メールで共有した塗り絵に関しても、塗り絵を置いていたことで「塗り絵が欲しい」と言われたともお話しされた。加えて、普段は店内を動き回ってしまう子供が、この前はツリーの前の椅子で静かに座っていたことも共有されたり、飾りを子供が変えていた様子についてもお話しされた。

課題点

このように、管理職も務める薬剤師 A さんはツリーに対して価値を感じていただいている様子だったが、すずらん薬局 (296 号線沿い) 店のに関しては、まだスタッフが理解できていないとのお話もあった。また、すずらん薬局駅前店 (勝田台駅そば) についても、栄養の話題や商品の説明については、スタッフの方が手作りで色々と制作されていた一方でツリーに関してはなかったため、「薬局でなぜツリーを？」という疑問が職員の中であるような気がした。私が共有した包括や UR、ほっこりのツリーの写真はラミネートされて壁に貼られるなどしていたが、薬局において、どのような効果を生むことができるかについて、もっと明確に示せる必要があると考察された。

4.4.6 ケース 6: 高齢者総合福祉施設 はなみずき

高齢者総合福祉施設はなみずきは、特別養護老人ホームをはじめとして、短所入所施設やデイサービスセンター、在宅介護支援センター、介護保険事業所など多様な福祉施設が集合している総合施設である。そのため、今回ツリーの寄贈数も最も多く、6 つのツリーを寄贈させていただいた。11 月 25 日現在では、デイサービスセンター、ケアハウス二カ所、ユニット型特別養護老人ホーム、事務所に一

図 4.36 オリーブ薬局 すずらん薬局の様子

つずつツリーが置いてある。はなみずきさんに対しては、介護職員のお二人にアンケート及び半構造化インタビューに参加していただいた。

A ticket to talk or be silent/ 情報収集のメディアとしてのツリー

アンケート結果では、ツリーに対して会話や触るなどのインタラクションが起きたかという質問に対して、お二人の介護職員からそれぞれ「頻繁に見られた」「時々見られた」という回答を得た。半構造化インタビューにて会話内容についてお伺いすると、まずは見た目から分かる季節のお話、そして大学生が作ってくれたからみんなで飾りましょうとお誘いしているとお話しされた。また、飾りをつけることで利用者さんから「私も編み物が得意だったのよー」と聞くことができたなど、利用者さんの過去の趣味を知ることに繋がると答えられた。そして、利用者の方々については紙面では情報は来るが、細かい生活歴は分からないため、このような会話から利用者についての理解を深めることに繋げているとのお話しもされた。これと同様のことは 9 月の地域包括支援センターでも観察することができたため、改めて「飾る」ことによって視覚化された経験は、同様の趣味や過去を持つ人からのコミュニケーションを引き出すことができるのではないかと考察された。また、半構造化インタビューでは逆に私が最初はどのような形になるのが理想だと考えて提示されたのかとの質問を受けた。それに対し、私は短冊ツリーをメインに最初は考えており、テーマを設けてみんなで共有することを通じて、ささやかな共感からコミュニケーションに繋げることを構想していたことを話した。すると、介護職員の方からは今度そういったものをやってみたいとのお言葉をいただいた。その背景としては、やはり赤の他人同士の利用者の方々は中々知らない人同士が話すことはなく、人間関係を作ることが難しいため、共感を呼ぶことのできるような、会話のきっかけとして、短冊を利用することに対して可能性を感じていただけたようであった。

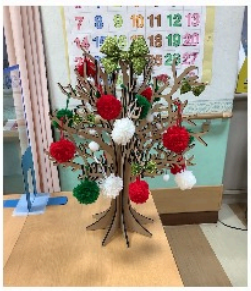
可能性と懸念点

はなみずきさんにおいても、介護職員 A さんから「麦の会の方に来ていただいて、一緒にやってできたら、もっと地域の触れ合いにつながって広がっていくと思う」その上で「このツリーがきっかけでそういう輪が広がっていることは実感できている」と話されるなど、地域コミュニティを超えた繋がりを作りたいと思っていることが伺え、ツリーがその触媒となりえる可能性が示唆された。一方で、もう一人の介護職員さんは、一番懸念していることとして、誰かの「負担」となってしまうことを挙げられた。永続的に続けるためには、誰が作るか、誰が作品を持ってくるのかなど細かい部分の運用面をこれから職員と相談していきたいと話された。また同時に関わっている人は意味を理解して飾ろうと思うが、関わっていない人だと飾る理由が分からないこともあるため、目的についてできるだけ周知していきたいと話された。

場所のシンボルとしてのツリー

一方それに対して、介護職員 A さんはツリーがあることがはなみずきのシンボルになれば、自然と周知はされていくと話し、どのように使っていくかは独自で考えられる気がすると答えられた。そしてこのツリーの存在は、大きさによるインパクトや玄関に置いていて行き帰りに必ず目に入るところにあることもあり、職員や利用者にとって「はなみずきと言えば、このツリーよね」という感覚や「ここに帰ってきました」、「デイサービスに来ました」という感覚になるではないかとお話しされた。今回作った作品においては、試しにやってみた段階であるため、今後振り返りを行い、職員の中でも輪を広げられれば、新たな楽しみ方や使い方なども考えられて面白くなっていくのではないかと話された。そしてツリーがあることで、職員のアイディアなどが自然に吸い上げられたらいいと語った。そのため、運用面は考えなければいけない点はあるものの、ツリーがあることはシンボルとして施設に定着化していき、自然と独自の色が作られてくると思うと話された。そしてそれは「この木をどのように大切に『育てていくか』」を改めて考えたいとお話しされた。

デイサービスセンター(お試し期間)



デイサービスセンター (本作品)

ケアハウスカルミア

ユニット型特別養護老人ホーム2階

ユニット型特別養護老人ホーム3階

ケアハウスりんどう

事務所

(施設介護士さんによる写真提供)

図 4.37 はなみずき 10 月 18 日〜11 月 22 日

4.4.7 ケース 7: 特別養護老人ホーム 美香苑

特別養護老人ホーム 美香苑は阿蘇地域包括支援センター (以下包括) の受託を行っている社会福祉法人 八千代美香会が運営している特別養護老人ホームである。美香苑は包括から車で 5 分程度の距離にある。ここへのツリーの寄贈は、私が 9 月に包括で実験をさせていただいた際に、包括のセンター長の方が美香苑の文化祭に置いてみてたらどうかと提案したことから始まった。センター長が美香苑に電話でツリーのことを伝え、そのまま当日持っていくことになった。

作品としてのツリー

美香苑は、10 ケースの内、唯一インタラクションがほぼ全く起こらなかったケースである。しかし、それは受け入れられなかったのではなく、美香苑で開催していた文化祭への一つの「作品」として出品されたからであった。ここの文化祭は、入居者さんだけでなく、地域住民や、繋がりのある施設の職員さんなどの作品も展示してあり、その一つとして、「ツリーがあったら華やかになる」ということで展示させていただいた。11 月後半になり文化祭が終了した現在では、これからはデイサービスで使用していくとの連絡を受けた。これからケース 5 のはなみずきさんのように活用されるのではないかと期待される。ただ社会福祉士さんは、交流が起きなくてもオブジェとして飾ることもおしゃれなので、それはそれで良いのではないか、ともお話しされていた。(→ 1 月現在、デイサービスの職員と利用者様とその都度飾りつけを楽しまれているとのことを伺った。)

4.4.8 ケース 8: 米本コミュニティスペース ほっこり

米本団地にあるコミュニティスペースほっこりは、八千代市社会福祉協議会の「地域力強化推進事業」の一環として 2020 年 2 月に設立された団地内にある施設である[6]。設立後すぐにコロナにより閉室を余儀なくされるなど、困難も多くあっ

6 地域福祉について知ろう! どんな活動をしているの？ -米本支会 団地班 支会長 拝詞さん インタビュー, https://ironna.org/hito/haishisan-interview/(2021 年 12 月 4 日閲覧)

ツリーの寄贈時の職員さんの様子と、寄贈の記念写真

短冊が一枚書かれている様子 (左)
有志の方々として出展されている様子 (左右)

図 4.38 文化祭で展示される様子

たが、八千代市社会福祉協議会の米本支会団地班の会長で、本施設にてボランティアリーダーとして活躍される H さんは、コロナだから何もしないのではなく、何ができるかを日々考えてやれることをやることを大切にしているとお話しされており、なるべく開室できるようにボランティアメンバーと協力して運営されてきた。そのような中でも緊急事態宣言下での開室は難しく、2021 年は、8 月から 10 月までの 2 カ月間は閉室されていた。しかし、10 月から 12 月現在まではまた開室している。米本コミュニティスペースほっこりでは、ほぼ毎日来ている常連さんが 4 人ほどいて、時々来る住人が数名おり、多い時は 10 人程度の利用者がいる。ほっこりは「地域の人たちが、誰でもいつでも気軽に来られる」というコンセプトの元作られた施設であり、常連さんは塗り絵をやられていたり、趣味の裁縫をやられたり、また男性でもウォーキングの休憩場所として使っている方や、おしゃべりをしに来ている方など、来る人が好きなように使えるスペースである。

フリーマーケットとしてのツリー

ほっこりは、設立からボランティアメンバーにより室内装飾や簡単な作品作りなどが行われており、利用者の作った作品やいらなくなったもの、貰い物を並べておく机が置かれていた。このツリーはそのような文化が一つの媒体として象徴されるような存在として使われていった。木が譲渡された際には、別の地域である睦地区のサロンの方々が作った編み物や、団地住人が作った手芸のたわし、そして 10 月 5 日の会議で書いていただいた短冊などが飾られていた。しかしその後センターではボランティアリーダーの方から、利用者の方々に対して飾りを募集しているとのアナウンスがされると、他のボランティアメンバーや利用者の方々は、自分の家から飾れそうでいらなくなったものを持ってきてツリーにかけたり、ほっこりにくる手芸が得意な方の作品を飾るという習慣が生まれた。因果関係は確かではないが、次第に「いらないからあげるもの」が増えてきて、机をもう一つ増やすまでになった。元から作品やモノを介したコミュニケーションが起きていた施設であったが、それが一つのツリーという媒体を通してより色々な人を巻き込んでいったように考察された。

ターゲットペルソナ「お友達とおしゃべりを楽しむ可愛いもの好きの女性」

ターゲットペルソナのモデルとしていた「お友達とおしゃべりを楽しむ可愛いもの好きの女性」は、ツリーが来てすぐに欲しい手芸品があったようで、手芸品に「予約」をしていたことがわかった。まだ飾りが少なかったため、欲しい人が取ってしまうとなくなってしまうということから、「予約」をしたようである。ツリーを置いた日に、ほっこりにもツリーを置いたことをお話しすると、その方は「何飾るか考えなきゃ」とおっしゃていて、後日ツリーを見ると、その方は予約と同時に自分でもお家から新たな飾りを持ってきて飾ってあった。その方は、地域包括支援センターで 9 月からやっていた時も、手芸品を色々ともらっていたようで、「お友達とお揃いにもらったの」と言い、唐辛子のキーホルダーを見せてくれた。そして、色々飾ってあるから、「全部チェックして見てる」とお話しされた。

ターゲットペルソナ「ものづくりが好きな物静かな女性」

ご本人とお話しさせていただいた際に、たわし作りについて少しはにかみながら、「役に立つんだったら」と一言おっしゃり「いっぺんには作れないけど、たわし作りはぼつぼつやっています」とお話しされた。また、退院後はほっこりにもまた継続的に通われるようになったようで、私が 11 月 1 日に追加した短冊サイズの塗り絵についても、他の方がやっているのにつられてやっていたことが分かった。塗り絵には裏にご本人の名前が書いてあった。

A ticket to talk or be silent としてのツリー

ボランティアリーダーとボランティアメンバーの間では、「輪が広がればいいよね。みんなで作ったりやったりすると、交流が広くなる、(これ) いいなと思ったら、(作った人を) 呼んで、作ったりね、その場があったらいいね、障害者の人だってできるのあるだろうしね、ここにこういうのあるから一緒に飾ろう、とか作ろうとかね」と話すなど、交流の輪の広がりについて話す様子が伺えた。

11 月 16 日は、米本コミュニティスペースほっこりで、交流の輪を広げることを目的とした「ほっこりカフェ」が開店する日だった。その日には別の地域の福

祉職員の方もいらっしゃり、ペルソナのモデルとなった方とその方でお話しをしていた。彼女は、福祉職員の方に、予約した手芸品のことをお話ししたり、クイズを当てた UR でもらった同じ帽子の飾りの話をされた。私が塗り絵の短冊も準備しましたよと伝えると、「塗り絵？これ塗っていいの？」言い、塗り絵の種類を見ながら、「紅葉.. どんぐり、秋ね..」「今度これをやりましょう！一週間に 4 日も通っているから、何枚かは仕上げないと、わはは」と笑いながらお話しされた。福祉職員の方は、かかっている短冊を読みながら、「食べ物がいっぱい下がってますね」「自転車通勤もあって」とつぶやき、「楽しいですね、こういうのみんなでどんどんかけていくと」とお話しされた。

椅子に座っていた男性の方 Y さんも、ツリーに興味が沸いた様子で、筆者が制作したツリーのチラシを見たいと言った。Y さんの元にいくと、ボランティアリーダーの H さんとおしゃべりをしていて「奥さんが七宝焼をやっているんだって！」と教えてもらった。ペルソナのモデルとなった方も会話に参加して「飾るの？」と聞くと Y さんは元気よく「そうそうそう！」と答えられた。リーダーの H さんが、「失敗作とか持ってきてよ！」というと、「じゃあ今度プレゼントしよう！」といい、みんなで「言ってみるもんだね〜」と談笑をした。

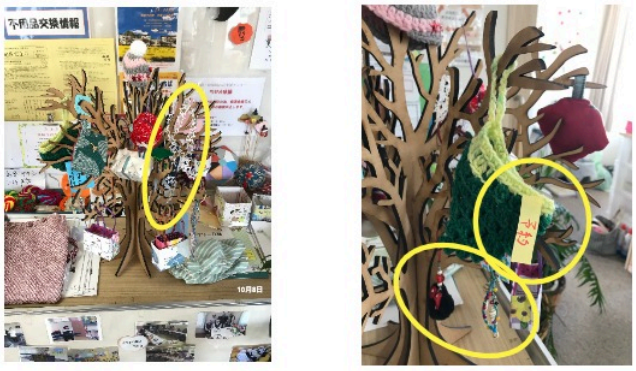
4.4.9 ケース 9: 睦地区サロン「麦の会」

睦地区サロン「麦の会」とは、平成 30 年に健康維持を目的に結成された、睦地区に住む地域住人からなるグループである。ここのサロンにいる方々は親の世代から二世代以上に渡ってこの地区に住んでいる方々が多く、多様なバックグラウンドを持つ人が集まっている米本団地のほっこりとは違い、ここは小さい地元のサークルという感じだ。「麦の会」では、これまでに楽しむことを目標に体操や踊りなどを行なっており、今回コロナが収束していることを受け、コロナ前からやろうと思っていた手芸の会を初めて開催することになった。手芸品などの材料費は市からの補助金で賄っているといい、全て大型の 100 円ショップで揃えていると話していた。

10月5日

会議後ツリーがほっこりに寄贈

10月8日



飾り増える、手芸品への予約者が出る

10月15日

飾りが増える

図 4.39 米本コミュニティスペースほっこり 10 月 5 日〜10 月 15 日

図 4.40 米本コミュニティスペースほっこり 10 月 22 日〜11 月 12 日

披露の場としてのツリー (手芸のなる木)

麦の会には手芸を得意とする「師匠」と呼ばれるメンバーが一人おり、現在はその方の「弟子」の方も他のメンバーに編み方を教え、みんなで週一回手芸に一生懸命取り組んでいる。麦の会はこれまで行っていた盆踊りの披露なども含め、目標に向かってみんなで頑張るという文化が根底にあるように思われ、手芸についても同様に取り組まれているようであると見受けられた。そのような中で、ツリーが快く受け入れられた背景とては、「誰かの役に立てたら嬉しい」という思いと「一緒にやる仲間・習う師匠がいる」ということが根底にあると考察された。そしてツリーはそれを「形にする役割」＝「披露する場」として機能しており、形になったり披露されることが、作る行為を後押ししていると考察された。

その理由としては会話の中で出てきた他者との交流のされ方や、想いなどの言葉が背景にある。例えば、「師匠」の方はもとから季節季節で作ったものを友達に渡していたとお話しされたり、また今回も、在宅の人のためには、小さいものではなくてベッドにつけられるマスコットがいいのではないかと考えて、一針一針時間をかけて手縫いでマスコットを制作されたというお話しをされた。また社会福祉士さんが来ると、メンバー全体が「どうぞ全部持って行って」と言う場面や、「これも持って行ったら」と提案されていた。これらのことから「誰かの役に立てたら嬉しい」ということが、制作の後押しとなっていることが伺われた。また、サロンのリーダーさんは、今回の取り組みの対象ペルソナのモデルになった方について、彼女が作った手芸たわしが多くの人に貰われたことを聞くと、「この方もそういう風に使われたら嬉しいでしょうね？やっぱりそうだよね～。そういうことだよね、結局ね。ただ作って自分たちで持っててもしょうがないから、みなさんに使ってもらって喜ばれるっていうのが一番の目的だね」とお話しされ、ご本人からも同様のことを思っている言葉が聞かれた。

そういった想いを形にする役割としてのツリーの機能が考察されたのは、自分たちのスキルを向上させたいという思いを語られる様子や、お配りしたツリースポット紹介のチラシを見て、自分たちの作品が色々な場所で飾られているのをご覧になられた時の反応などから考察された。また同時に、ツリーについてお話しする中で「すごく気に入った」「やっぱり小さいのより大きいのがいいなって思っ

て」とお話しされたり「それは飾りがいがあって？」と聞くと「そうそうそう」と即答される様子や、「せっかくいただいたこのツリー」「そうよ、飾らないともったいない」という言葉、そして「木があると違いますか？」と聞いた時にも即答で「違います、飾れるから楽しい。飾れるから好き」という言葉、「みんな (今手芸の帽子練習してるから) 作ると、帽子で (ツリーが) 埋まっちゃう」と言われる言葉からも、作ったものを披露する媒体として機能している様子が伺えた。

寂しいから飾る

また「飾らないともったいない」という言葉は同時に「寂しいから飾る」とも表現されており、リーダーの方が八千代市社会福祉協議会に行った際に、「ツリーが寂しそうだった、だから今度行ったらなんか持っていこうと思って」と言われた言葉、そして「せっかく作った木が飾れないんだったら寂しいから」という言葉、そして、社会福祉士さんが飾りを持っていった時に「さっそくまた作らないと、製造しないと！」と言われた言葉から、何もない木が寂しいから、「飾りに行く」また「飾りを作る」ことを後押ししていることが考察された。

活動をさらに後押しする要素

参与観察からは、活動をさらに後押しする要素として「フィードバックをもらえること」と「新しい技術を習えること」が重要であることが考察された。麦の会の皆さんが手芸品を作ってくださっているのは、「やっていて楽しい」ということは前提としてあるものの、前述したように、続けられる要因の一つとして「誰かの役に立てたら嬉しい」という思いが背景にある。そのため、彼らにとって、貰った人が喜ばれているという話を聞くことや姿をみることが、重要であることは明らかであった。その様子は、持参したチラシに作った作品が写っているのを見て喜ばれる姿や、実際に使われている人の話をした際の反応から伺えた。現段階までは、社会福祉士さんが車で 5 分走り、そのような現状を直接伝えている状況であるが、今後は、もらった方で許可を得られる方で写真を撮らせていただき、ボードを作って見せるなど、今後の試行錯誤の余地があると考える。

もう一つ今後の取り組みとして必要だと考えたのは、スキルシェアができる場を地元の小さいコミュニティーを超えて行うことである。「師匠」さんは、特別養護老人ホームの装飾がすごいという話を聞くと「そういう職員の方に習いたい！」「今度行ってみようかな」と話したり、サロンの中でリーダーの方も「師匠」さんについて「新しいアイディアを色々吸収して、新しいものが習いたいんだって、この上を目指したいみたいよ」とお話しされた。実際、「師匠」さんが現在作っているものも、コロナ前に文化センターで体験で習ったものをアレンジして作られているようだった。「新しいスキルを習いたい」ことについては、米本コミュニティスペースほっこりの運営リーダーを務める H さんも言っていたことで、彼女は麦の会さんに新しいスキルを習いたいと話しており、体験型展示会をほっこりで開催したいともお話しされていた。したがって、そのような場の構築が、さらに現在活躍されている方の活動を後押しすると考えられる。

懸念点

懸念点としてあげられるのは、現在行われている麦の会による手芸作りが負担にならないかということである。この点については、特別養護老人ホームはなみずきの介護職の職員さんも懸念を示されていた。現段階では、貰われて嬉しいからまた作ろう！頑張ろう！というモチベーションにポジティブに影響されているが、「間に合わないのよ。いくら作っても、夜しか作れないからさ。残ってるリボンで一生懸命作ってるの」言われるシーンや「あんまりやると腱鞘炎になっちゃうから」と言われる声も実際に聞こえた。したがって、どのように「作り、貰われ」のサイクルを回していくのかについては、慎重に進めないといけないことが考察された。

4.4.10 (ケース 10: 米本南自治会)

米本南自治会とは、米本団地の 1 街区と 2 街区の居住地域に住む住人によって形成されている自治会である。本地域へは、第 2 層生活支援協議体にて米本地区民生委員の方にご参加いただいたご縁で、南自治会にもツリーをご紹介させてい

舞台の真ん中にそびえるツリー

「いいんですかー」
と言って手芸品を貰う
社会福祉士さん

「こういうのも持って行ってあげたら？」
「箱もどうぞ」と麦の会のメンバー

たくさん収穫された手芸品

収穫前

収穫後

図 4.41 手芸品収穫の様子

図 4.42 手芸の会の様子

ただくこととなった。しかし、本ケースにおいては、12 月 2 日現在においてまだ今後の使い方を検討していく段階であるため、本論文では詳しい結果については割愛する。

4.4.11 10 拠点の実装を受けての考察

ツリーの多様な役割

10 拠点の結果を受けて、詳しいデータ収集が行えた 8 拠点[7]において何らかの形で A ticket to talk or to be silent として機能することが考察された。これは、地域住民の生活を支援する立場に対しては、紙面では分からない細かい利用者さんの生活歴などを知るための「情報収集のメディア」として利用者理解を支援をし、制作する側に対しては、作ったものを飾る「お披露目の場」として制作意欲を高める支援をし、シニアが自由に交流する場に対しては「フリーマーケット」として自由なモノの交換を促進する役割としてツリーが活用されたことが分かった。そして、そのような人々のツリーへのインタラクションを通して、無垢だったツリーは次第にその場所の色に染まっていき、場所のシンボルとして、利用者や職員から愛着を持って接されるものとなることが考察された。

なぜツリーなのか

ツリーには外面的な側面としての「飾ると華やかになる」という効果と、内面的な側面として「育てる」というメタファーがある。ツリーをコミュニケーションツールとして活用し、それが多様な場所において受け入れられたのは、ツリーが「場所を華やかにする存在」であったのと同時に「可塑性」や「自由性」が高く、それぞれの場所で「育てていきたい」メディアだったからであると考える。加えて、関わる人の中で場所が華やかになることや、育てていくことが「楽しい」と捉えられたことが自発的な発展性を生んだ最も大きな要因であると考察される。数々の事前実験から考察されたことは、心身の健康のためを考えた活動であって

7 データ収集が不十分なケース 3 とケース 10 については除外している

も、それが楽しくなければ続かないということである。中には「健康のため」と割り切って活動される方もいるが、特に心のウェルビーイングにおいては、「やらなければいけないからやる」では続かない。デイケアセンターで介護職を務める方にツリーの効果について半構造化インタビューを実施した際、「生きていることがつまらない方が多い...(中略).. させられているという印象を持ってやっている方は、長生きされていないという印象がある。自分から率先してやりたいと思って、少しでも自立支援というか生活支援ができたらいい」という言葉があった。この言葉からも、「楽しくできる」ことの重要性が伺える。

また事前実験として行った「思い出共有ブック」も、共通の思い出などでその場が盛り上がったり、盛り上がっているのを見て人がまた集まるなど、ticket to talk の役割として機能していた。また話す内容から、その人がどんな生活をしていたか、どんなことを楽しんでいたかなども知れるツールとして機能することが分かっていた。しかし、「ブック」というメディアは、どこかにしまわれてしまうもので、仮に机においておいたとしても、誰かが切り出さない限り話題になることはなかった。また同じ思い出を何度も同じ人と話すわけではないので、形態とテーマ両者において「限定的」であり、「自発的な発展性」の低いメディアであった。

このようなことから、自分たちが居る場所・働く場所が明るく・華やかであることを嬉しく思う気持ち、そして自分たちや地域の人を巻き込んだ場作りが出来る「正統的周辺参加」を可能にするメディアであるという点において、ツリーは評価を受けたのだと考察される。

課題点

一方で自由性が高いことは難易度の高さも同時に示す。10 拠点へと拡大する中で、地域住民の生活を支援する施設において今後必要であると考察されたことは「ツリーの目的と効果についてのさらなる明示化」、「装飾例や装飾を促す備品の例示または提供」そして「横の繋がりを深められる機会の創出」である。米本団地内においては、地域包括支援センターの社会福祉士さんの動きを筆頭として、米本団地内でツリーを管理していた人、そしてそこに訪れる人々へと、様々なインタラクションが自然発生していった。その理由としては、米本団地にはもとから

活動的に活躍されるアクターが多く存在しているということ、そしてネットワークの基盤ができているということが挙げられる。そのため、あまり介入をしなくとも、メディアを投げると自然に使われるということが観察された。一方で、他拠点にもツリースポットを広げる中で、仮に第 2 層生活支援協議体で説明を受けていても、ただツリーを「どうぞお好きに使ってください」と言ってお渡しするだけでは、上手くいかないことも分かった。したがって、ツリーという媒体が唐突であるがために、ツリーを飾る行為がどのような効果を示すのかを改めて明示化する必要があった。また、アンケートでも実際に「ツリーと一緒に装飾例があったらいい」という意見があったり、装飾例を添付すると店舗にラミネートされてそれが置かれるなど、前例の重要性が伺えた。また今後さらに地域で連携して行っていくためには、横の繋がりを深められる機会を創出することも必要であると伺えた。「集いの場」において今後必要であると考察されたことは、そこに訪れる人々は楽しむことを目的に来ていることから、新たな飾りの作り方が習えるなど、拠点同士、もしくは拠点外も巻き込んで、スキルの共有ができる場が必要であることである。この点に関しては地域住民の生活を支援する施設においても似たことが言え、拠点同士が取り組んでいることを共有する場を設けることで、それぞれが新たなアイディアを他拠点から得ることができ、さらなる地域の連携と発展を生むことができると考察された。

4.4.12 価値検証 3 のまとめ

価値検証 3 については、価値検証 1 と同様「観る→話す」「貰う」「作る」「飾る」行為を行ったアクターについては、想定した文脈価値が受け取られたと評価した。そしてその理由として「空間が華やぐ」「おしゃれなもの」であることが重要な要素となっていると考察された。また、ケアスタッフに対しての「住民との接点が増加、住民の理解が深まる」という文脈価値については、住民理解については可能性に留まるものの、住民との接点の増加には貢献することが分かった。

第 5 章
結　　論

5.1. 「飾れるツリー」における緩やかな繋がり

本研究では、装飾という手段を用いることにより、作ること、書くこと、飾ることに対する能動性を持つ人のさらなる地域コミュニティーへの関わりを促すことができた。そしてその成果により、そこまでの能動性は持たなくても、飾りを飾り付ける人、飾られたモノを見て話す人、飾られたモノをもらう人、熱心に飾られたものを観察する人などの受動に寄った行動をする人々も「飾れるツリー」へ関わる様子が見られた。したがって本研究では、「飾れるツリー」を中心として「話す」「作る」「飾る」「貰う」「観る」という様々なコミュニケーションから地域コミュニティーを緩やかに繋ぐことができたと結論づける。

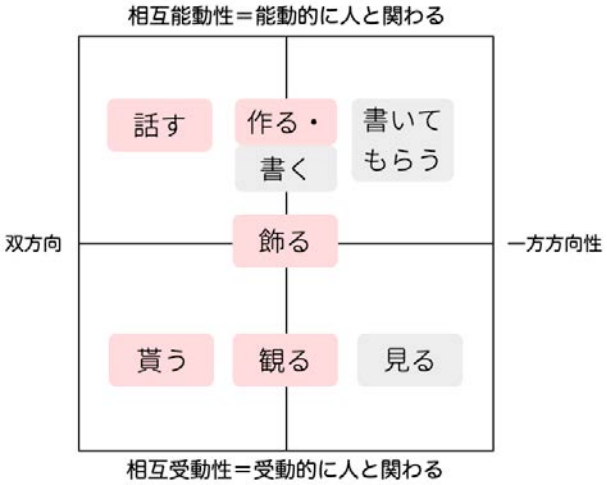


図 5.1 「飾れるツリー」における緩やかな繋がり

5.2. 緩やかに繋がった結果

さらに緩やかに繋がった結果、地域住民とケアスタッフに対して「飾れるツリー」を通じて以下の文脈価値が受け取られたと結論づける。

- 地域住民とケアスタッフ：日常生活に新たな楽しみや喜びを感じることができた
- ケアスタッフ：日常生活に新たな楽しみや喜びを感じることができた、一人一人に合ったケア提供のための住民理解を支援する手段としての可能性を感じることができた

また 10 拠点の実証実験データをまとめると、「飾れるツリー」は文脈によって以下のような活用のされ方があることが分かった。

- **手作りさんの活躍の場として**：コロナ禍において集まることが困難な状況においても、手作りで物づくりを行う人々が作品を披露することができる活躍の場として利用
- **フリーマーケットの場として**：コミュニティーセンターや相談窓口などで、職員や訪問者が誰かが使えるかもしれない不要になったモノを展示するフリーマーケットとして利用
- **ニーズ把握の手段として**：社会福祉士などのケアスタッフがイベントなどで地域のニーズや現状を理解する手段として利用
- **共同制作の作品づくりとして**：養護ホームなど長時間にわたるケアが行われる場で、利用者さんと作品を共同制作し、施設の装飾として利用
- **オブジェとして**：薬局などの訪問者の来訪目的が別にある場所で、訪問者の能動的な関わりは見られなくても、施設を飾るオブジェとして利用

5.3. 緩やかな繋がりをもたらす「飾れるツリー」の要素

このような繋がりを可能にする根源的な要素は、**装飾が持つアフォーダンス**であると考察される。これは、Nabil らが、装飾品のアフォーダンスが社会的関与や繋がりをもたらす手段として非常に有効であると述べていることからも分かる。また本研究ではその理由として**「飾る行為」のハードルの低さ**があると考察した。作ることはできなくても、作られたものを使って飾ることは多くの人ができる行為であると言える。そのようなハードルの低さが、働く空間・訪れる空間が華やかで明るくあって欲しいと願うアクターに対して、能動的に関わるアフォーダンスとして機能したのだと考えられる。

その中で「ツリー」というメディアを利用したこともさらなるアフォーダンスを生んだと考察される。実証実験から、ツリーは**「育てたい」というメタファーを持つこと**が明らかになった。それは「ツリー」という**有機的なシンボルである**という要素と、完成させないことを重要視したプロダクトデザインから生まれた「飾れるツリー」のデザインに**可塑性や自由性を持つこと**であることが考察された。

以上のことをまとめると、緩やかな繋がりをもたらす「飾れるツリー」には以下の要素があると考察される。

- 参加へのハードルが低い装飾を用いているという要素
- 空間を華やかにすることができる装飾を用いているという要素
- 変化と成長を象徴する有機的なシンボルである「ツリー」を用いているという要素
- 可塑性や自由性を持つツリーのデザインを用いている要素

5.3.1 本研究における緩やかな繋がりの限界点

一方で本研究における緩やかな繋がりの限界点としては、「作る」「書く」「飾る」「話す」「貰う」「観る」などの可視化できる行動を全く取らなかった人が地

域コミュニティーに参与することができたのかについての検証が出来ていないため、そのような人が緩やかな繋がりを持つことができたかの言及ができないことである。

特に年配の男性における能動的な参与はほとんど見ることができなかったことから、年配の男性に対してのコミュニケーションチャネルが不十分であった可能性が考えられる。これは、他愛のない会話を楽しむ女性に対して、より目的のある会話を男性が好む傾向にあることが仮説として考えられる。実証実験が始まる前に共同研究先の社会福祉士さんが地域の声を調査したところ、掃除用具を持っていない独居男性がいることが分かり、手作りのたわしがとても役に立つのではないかとの話があった。したがって、本研究では「かわいい」ことが多くの人の能動的な関わりを可能にしたが、男性にとっては実用的な効果に繋がることのできる「ticket to talk」が効果的であるのではないかと考えられる。

5.4. 今後について

5.4.1 「飾れるツリー」の新規拠点における発展を促す要素

本研究は、八千代市米本団地周辺を実験地として行ったため、ツリー活用の一般化については検討は不十分であると言える。一方で 10 拠点において実験をし、様々なコンテキストにおけるツリー活用の分析を行ったことから、成功するために必要な要素の検討は行うことができた。その結果、本研究の成功には「地域ネットワークの基盤」と「それを可能にする活動的な地域の職員と住民」の存在が重要であることが分かった。また、それらの存在があった上で、ツリーの活用をより広めたり、各拠点での発展を促す要素として「ツリーの目的と効果についてのさらなる明示化」、「装飾例や装飾を促す備品の例示または提供」そして「横の繋がりを深められる機会の創出」が必要であることが検討された。

5.4.2 「飾れるツリー」が適する環境的要素

最後に、米本団地とその周辺地域で「飾れるツリー」が成功を収めた環境的な要素を分析することにより、「飾れるツリー」を今後どのような地域で活用できる可能性があるかについて提示する。

環境的要素 1 はエンターテイメントへのアクセスが限定的な環境である。筆者が米本団地に度重なるエスノグラフィー調査を行った結果、米本団地は市街地へのアクセスが悪く、団地外で楽しみを得るために気軽に出かけることが困難であることが分かった。また高齢者という属性から、インターネットを自由に使いこなせる人は多くなく、ロックダウン中の若者のようにチャットや動画で楽しむことも難しい。その結果、団地内の中で限られたエンターテイメントしか楽しむことできない状況が生まれる。「飾れるツリー」は「楽しむこと」に焦点を当てたデザインであり、日常生活にちょっとした楽しみや変化を与える。したがって、このような環境において「飾れるツリー」がより適合するのではないかと考察される。

環境的要素 2 は、プライベートではなくパブリックな環境である。価値検証の結果、地域包括支援センターやコミュニティーセンターにて職員やボランティアメンバーが室内を飾る行為から、「来てもらう人に楽しんでもらいたい」という想いが見られた。また第 2 層生活支援協議体の会議の中では、睦地域サロンのメンバーの人から「家では飾らないんだけどね」という言葉が聞かれ、友達が集うサロンだからこそ飾りたくなるという想いが見受けられた。このような結果からプライベートな空間ではなく不特定多数の人に見てもらえるパブリックな空間であることが、人々の「誰かのために」飾る行為を促進することが伺える。

環境的要素 3 は、その場所に居る人・訪問する人とのコミュニケーションを積極的に取りたいと思う人がいる環境である。「飾れるツリー」は能動的な人がいて成立するものであり、誰かの仕掛けを要する。本研究においてはケアスタッフが地域住民とのコミュニケーションの接点を増やすための手段として、またそこで得た知見をさらなるケアに活かす手段として「飾れるツリー」が活用された。このように、能動的に「誰かのためにコミュニケーションを取りたいと思う人」のオペレーションがあってこそ、様々な人を巻き込んだ装飾による長期的な「飾れるツリー」の実用が可能となる。本研究では未検証であるが、これはケアスタッ

フと地域住民に限ったことではなく「誰かのためにコミュニケーションを取りたいと思う人」がいるパブリックな場所であれば、その手段として「飾れるツリー」を職場、学校、幼稚園など様々な場所で活用することが可能ではないかと考察される。

謝　　辞

本研究は、八千代市阿蘇・睦地域包括支援センターに務める氏家和紀様の多大なるご協力なしには実現し得なかったものであり、感謝してもしきれない想いです。約１年間に渡り、業務に忙しい中時間を割いていただき一緒に考えていただいたこと、共に飾れるツリーを実現していただいたこと、さらには論文の原稿を読んでいただき、ご意見までいただいたこと誠にありがとうございました。施設では深刻な業務も多い中で、私の連日の滞在やご相談がご迷惑になってしまったこともあるかと思います。そのような中で快くご協力いただいたご職員の皆様にも大変感謝申し上げます。誠にありがとうございました。また同じく約１年にわたり、勉強に伺わせていただいた米本コミュニティースペースほっこりの運営リーダーを務める拝詞妙子様、様々なボランティアに大変お忙しい中、毎回快く迎え入れていただいたこと、様々な関係者の方と繋げていただいたこと、研究にご協力いただいたこと、本当にありがとうございました。拝詞様が温かく迎え入れていただいたことで、私もすぐにほっこりに溶け込むことができ、研究の原点となる経験をさせていただきました。また、拝詞様を含めほっこりのボランティアメンバーの八本様、西様、大渕様、後藤様、その他メンバーの方々にも、お忙しい中研究のご協力をいただき、本当にありがとうございました。ここで皆様がボランティアとして働かれる姿をそばで見ることができたこと、一緒に時間を過ごせたことは、研究の枠を超えて、人の温かみを感じることのできた、人生においてとても大切な経験になったと心から思っております。

加えて、今回のツリーの活動にご協力いただいた皆様、特にUR米本団地に務める加瀬様には、業務でお忙しい中日誌を書いてくださったり、訪問時の対応をいただいたりと、ありがとうございました。またお忙しい中インタビューやアンケートにご回答いただいた、総合福祉施設はなみずきの大月様、牛久様、オリー

ブ薬局の小川様、八千代市社会福祉協議会の八巻様、鈴木様、睦地域サロンの「麦の会」の皆様、特別養護老人ホーム美香苑の皆様、誠にありがとうございました。

そして慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科では、ご多忙の中ご指導いただいた同研究科の大川恵子教授に大変感謝しております。全く整理出来ていない中で、方向性の整理を共にしていただけたこと、前向きなアドバイスをいただけたこと、ありがとうございました。また、同研究科博士課程の有馬さんにも多大なる感謝を申し上げます。まさに有馬さんは私のメンターであり、的確なアドバイスをいただけたことで、ここまで進めていくことができました。そして同研究科の「閑」プロジェクトのメンバー全員に感謝申し上げます。特に板垣さんには様々な場面で助けていただきました。In addition, I would also like to say a big thank you to Chinabhorn, Noah, Ono-san and Sayaka-chan for helping out, giving advice and courage to continue my research. Also, I sincerely appreciate Donna for giving me the biggest compliment that I have ever received, it definitely helped me to build confidence in my research. 最後に、入学当初から GID とその後の 2 年間の間、数えきれない時間を割いていただき、心配性で気難しい私を辛抱強く温かくご指導してくださいました「閑」プロジェクトの佐藤千尋専任講師に心から感謝申し上げます。 私にとって KMD で得られた最も大きな価値は、「閑」プロジェクトを自分の「居場所」と感じられたことなのではないかと思っております。

参 考 文 献

[1] John McCarthy and Peter Wright. Putting ‘felt-life ’ at the centre of human–computer interaction (hci). *Cogn. Technol. Work*, Vol. 7, No. 4, p. 262–271, November 2005.

[2] John McCarthy and Peter Wright. The enchantments of technology. In *Funology 2*, pp. 359–373. Springer, 2018.

[3] Richard M Ryan and Edward L Deci. Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American psychologist*, Vol. 55, No. 1, p. 68, 2000.

[4] Heather Patrick, C Raymond Knee, Amy Canevello, and Cynthia Lonsbary. The role of need fulfillment in relationship functioning and well-being: a self-determination theory perspective. *Journal of personality and social psychology*, Vol. 92, No. 3, p. 434, 2007.

[5] John F Helliwell and Robert D Putnam. The social context of well–being. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London. Series B: Biological Sciences*, Vol. 359, No. 1449, pp. 1435–1446, 2004.

[6] Harvey Sacks. Lectures on conversation: Volume i. *Malden, Massachusetts: Blackwell*, 1992.

[7] Robert F Lusch and Stephen L Vargo. *Service-dominant logic: Premises, perspectives, possibilities.* Cambridge University Press, 2014.

[8] Nicholas Mays and Catherine Pope. Qualitative research: observational methods in health care settings. *Bmj*, Vol. 311, No. 6998, pp. 182–184, 1995.

[9] James Hewitt. *The Christmas tree*. Lulu Distribution, 2007.

[10] 三原信子. つるし飾りについての考察: 雛のつるし飾りの復活と今後. 東京家政大学博物館紀要, Vol. 14, pp. 133–149, 2009.

[11] 三原信子. つるし飾りについての考察 : 実践編. 東京家政大学博物館紀要, Vol. 16, pp. 163–184, 2011.

[12] Sara Nabil, David S Kirk, Thomas Plötz, Julie Trueman, David Chatting, Dmitry Dereshev, and Patrick Olivier. Interioractive: Smart materials in the hands of designers and architects for designing interactive interiors. In *Proceedings of the 2017 Conference on Designing Interactive Systems*, pp. 379–390, 2017.

[13] Sara Nabil and David Kirk. Decoraction: a catalogue for interactive home decor of the nearest-future. In *Proceedings of the Fifteenth International Conference on Tangible, Embedded, and Embodied Interaction*, pp. 1–13, 2021.

[14] Heekyoung Jung, Youngsuk L Altieri, and Jeffrey Bardzell. Skin: designing aesthetic interactive surfaces. In *Proceedings of the fourth international conference on Tangible, embedded, and embodied interaction*, pp. 85–92, 2010.

[15] Steve Benford, Boriana Koleva, Anthony Quinn, Emily-Clare Thorn, Kevin Glover, William Preston, Adrian Hazzard, Stefan Rennick-Egglestone, Chris Greenhalgh, and Richard Mortier. Crafting interactive decoration. *ACM Transactions on Computer-Human Interaction (TOCHI)*, Vol. 24, No. 4, pp. 1–39, 2017.

[16] Sara Nabil, Reem Talhouk, Julie Trueman, David S Kirk, Simon Bowen, and Peter Wright. Decorating public and private spaces: Identity and pride in a

refugee camp. In *Extended Abstracts of the 2018 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems*, pp. 1–6, 2018.

[17] Kathryn Betts Adams, Sylvia Leibbrandt, and Heehyul Moon. A critical review of the literature on social and leisure activity and wellbeing in later life. *Ageing & Society*, Vol. 31, No. 4, pp. 683–712, 2011.

[18] Po-Ju Chang, Linda Wray, and Yeqiang Lin. Social relationships, leisure activity, and health in older adults. *Health Psychology*, Vol. 33, No. 6, p. 516, 2014.

[19] Dr Treadaway, Gail Kenning, and Steve Coleman. Designing for positive emotion: ludic artefacts to support wellbeing for people with dementia. *9th International Conference on Design and Emotion 2014: The Colors of Care*, 2014.

[20] David Cutler. *Ageing artfully: Older people and professional participatory arts in the UK*. Baring Foundation, 2009.

[21] Edward Hall. Making and gifting belonging: creative arts and people with learning disabilities. *Environment and Planning a*, Vol. 45, No. 2, pp. 244–262, 2013.

[22] Jane Maidment and Selma Macfarlane. Crafting communities: Promoting inclusion, empowerment, and learning between older women. *Australian Social Work*, Vol. 64, No. 3, pp. 283–298, 2011.

[23] Susan Sprecher, Stanislav Treger, Joshua D Wondra, Nicole Hilaire, and Kevin Wallpe. Taking turns: Reciprocal self-disclosure promotes liking in initial interactions. *Journal of Experimental Social Psychology*, Vol. 49, No. 5, pp. 860–866, 2013.

[24] Ann Light, Kate Howland, Tom Hamilton, and David A Harley. The meaning of place in supporting sociality. In *Proceedings of the 2017 Conference on*

Designing Interactive Systems, pp. 1141–1152, 2017.

[25] Erving Goffman. *The Presentation of Self in Everyday Life.* Anchor Books, 1959.

[26] Marcus Sanchez Svensson and Tomas Sokoler. Ticket-to-talk-television: designing for the circumstantial nature of everyday social interaction. In *Proceedings of the 5th Nordic conference on Human-computer interaction: building bridges*, pp. 334–343, 2008.

[27] Slavoj Zizek. The fantasy in cyberspace. *The Zizek Reader. Eds Wright and Wright*, 1999.

[28] Mark Blythe, Peter Wright, John Bowers, Andy Boucher, Nadine Jarvis, Phil Reynolds, and Bill Gaver. Age and experience: ludic engagement in a residential care setting. In *Proceedings of the 8th ACM Conference on Designing Interactive Systems*, pp. 161–170, 2010.

[29] Hugh Beyer and Karen Holtzblatt. Contextual design: Design for life ed. 2 [e-book], 2016.

[30] 奥出直人. デザイン思考の道具箱. 早川書房, 2013.

[31] Thomas Wendt. *Design for Dasein: understanding the design of experiences.* Thomas Wendt, 2015.

[32] Erving Goffman. Interaction ritual: Essays on face-to-face interaction. 1967.

[33] Erving Goffman. *Asylums: Essays on the social situation of mental patients and other inmates.* AldineTransaction, 1968.

[34] Andy Alaszewski. *Using diaries for social research.* Sage, 2006.

[35] William C Adams. Conducting semi-structured interviews. *Handbook of practical program evaluation*, Vol. 4, pp. 492–505, 2015.

[36] Jean Lave and Etienne Wenger. *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge university press, 1991.

付　　録

A. ツリースポット紹介チラシ

図 A.1 ツリースポット紹介チラシ表

図 A.2 ツリースポット紹介チラシ裏

B. ダイアリー記述

よなだんツリー日誌

よなだんツリーがもたらしうる効果について調査をしたいため、差し支えない範囲で記録を残していただけると幸いです。

よなだんツリーの作品がもらわれた、作品を飾りに来た人がいた、作品を見てこんな話になった、今日は新たな飾り付けをしたなど、日々の生活に何か変化があればご記入いただけると嬉しいです。

個人名は公に使うことはないのですが、リピーターの方、新規の方の区別をつけたいので、名前も残していただけると幸いです(イニシャル・あだ名でも大丈夫です)
また、後日お聞きすることがあるかもしれないので、ご記入者の方のお名前も書いていただけると幸いです。

よろしくお願いいたします。

日付　10 / 5～12

- 10/5 第2層生活支援協議体の会議後、9方 生活支援AD窓口に初めてよなだんツリー中小2本がやってきました!
- 10/7 に手作りの品の飾りつけをしました。ドレス型のアクリルたわしをみて可愛い～と皆さまながめていらっしゃいました。
- 10/8 翌日の米本寄席の準備の為 午後から包括、ほっこり、のよなだんツリーをお貸りして、集会所入設置。
- 10/9 米本寄席のイベント終了後に手作りの展示品を皆さまにみて頂きました。
  よなだんツリー本体を欲しいという方もおいででした。
  (よく出来てるネッ↓)
- 10/11 スタンプラリーで、おいでの方によなだんツリーの短冊のテーマ(募集中でした)を決めて頂きました。
  "大好きなこと"　→ KSJのスタッフや来所のお客様に記入して頂き飾りつけをしました。
- 10/12 スタンプラリーでおいでの方によなだんツリーの短冊を記入して頂き飾りつけをして頂きました。

図 B.1　UR 米本団地管理事務所　生活支援アドバイザーさんによる日誌 1

よなだんツリー日誌

よなだんツリーがもたらしうる効果について調査をしたいため、差し支えない範囲で記録を残していただけると幸いです。

よなだんツリーの作品がもらわれた、作品を飾りに来た人がいた、作品を見てこんな話になった、今日は新たな飾り付けをしたなど、日々の生活に何か変化があればご記入いただけると嬉しいです。

個人名は公に使うことはないのですが、リピーターの方、新規の方の区別をつけたいので、名前も残していただけると幸いです(イニシャル・あだ名でも大丈夫です)
また、後日お聞きすることがあるかもしれないので、ご記入者の方のお名前も書いていただけると幸いです。

よろしくお願いいたします。

日付　10/12～

・よなだんツリーを"かわいいね～"とながめているお客様がいらしたので"お好みの柄のもの等ありましたらお持ち下さい"とお話すると喜んでお持ちになられてました。

・折紙の作品をご覧になって"家でTVをみながら広告を小さく切って折鶴をたくさん折って たまったら捨てている"とお話される お客様がいらしたので 差し支えなければお持ち下さいとお話したら ご持参下さった。
ほっこりへも少しおすそわけしました。

・10/16 村上団地の生活支援ADイベントのお手伝いによなだんツリーをお持参し展示させて頂きました。
村上団地のADさんの手作りの折鶴や連獅子も"良かったらお持ち下さい"とアナウンスをすると皆様喜んでお持ちになられました。よなだんツリーに飾ってあった手作りの作品"ようじ，果物のかざり アクリルたわし等"も喜ばれました。

図 B.2　UR 米本団地管理事務所　生活支援アドバイザーさんによる日誌 2

よなだんツリー日誌

よなだんツリーがもたらしうる効果について調査をしたいため、差し支えない範囲で記録を残していただけると幸いです。

よなだんツリーの作品がもらわれた、作品を飾りに来た人がいた、作品を見てこんな話になった、今日は新たな飾り付けをしたなど、日々の生活に何か変化があればご記入いただけると嬉しいです。

個人名は公に使うことはないのですが、リピーターの方、新規の方の区別をつけたいので、名前も残していただけると幸いです(イニシャル・あだ名でも大丈夫です)
また、後日お聞きすることがあるかもしれないので、ご記入者の方のお名前も書いていただけると幸いです。

よろしくお願いいたします。

日付　10 / 18

。空地の化家さんより手作り品のおすそわけを頂き飾らせて頂きました。

10/28.
。よなだんツリーをみて褒めて下さるお客様へ たわし等よかったらお持ち下さいとおすすめしたら喜んで持ち帰られました。

11/4
。手作りたわしを作って届けて下さるお客様に初めて特典をお渡ししました。

11/9
。空地化家さんと麦の会に手作り作品の作成風景を見学しに行き 毛糸の帽子のキーホルダー作りを少し教えて頂きました。 伺った時には手作り作品でいっぱいだったよなだんツリーですが 全て収穫して帰ってきました(笑)

図 B.3 UR 米本団地管理事務所　生活支援アドバイザーさんによる日誌 3

よなだんツリー日誌

よなだんツリーがもたらしうる効果について調査をしたいため、差し支えない範囲で記録を残していただけると幸いです。

よなだんツリーの作品がもらわれた、作品を飾りに来た人がいた、作品を見てこんな話になった、今日は新たな飾り付けをしたなど、日々の生活に何か変化があればご記入いただけると嬉しいです。

個人名は公に使うことはないのですが、リピーターの方、新規の方の区別をつけたいので、名前も残していただけると幸いです(イニシャル・あだ名でも大丈夫です)
また、後日お聞きすることがあるかもしれないので、ご記入者の方のお名前も書いていただけると幸いです。

よろしくお願いいたします。

日付 11 / 12

。AD窓口に9ヶ月の赤ちゃんを連れた若いお母さんが来所されて、赤ちゃんが大人しくしていたので ネコの人形をさしあげたらお母さんが喜んでくれました。

11/15

。けやきトートでうじぽんが出したクイズの正解がわからず スタンプで来所したお客様にお聞きしたところ、デコちゃんが正解したので よなだんツリーにかかっている新作リイ作品から お好きなものをどうぞとお話して、麦の会さんの毛糸の帽子をさしあげたところ 大変喜ばれました。
はじめは バックにつけてらした所、民生委員の方に 上着にコサージュのようにつけたら？と アドバイスされ 胸元につけて来所されました。 とても お似合いで素敵でした。

11/19

。うじぽんへよなだんツリー お貸しおし（会議のため）
飾りつけが少なくなって戻ってきました（笑）

図 B.4 UR 米本団地管理事務所　生活支援アドバイザーさんによる日誌 4

よなだんツリー日誌

よなだんツリーがもたらしうる効果について調査をしたいため、差し支えない範囲で記録を残していただけると幸いです。

よなだんツリーの作品がもらわれた、作品を飾りに来た人がいた、作品を見てこんな話になった、今日は新たな飾り付けをしたなど、日々の生活に何か変化があればご記入いただけると嬉しいです。

個人名は公に使うことはないのですが、リピーターの方、新規の方の区別をつけたいので、名前も残していただけると幸いです(イニシャル・あだ名でも大丈夫です)
また、後日お聞きすることがあるかもしれないので、ご記入者の方のお名前も書いていただけると幸いです。

よろしくお願いいたします。

日付 11/22

・家にあったキーホルダー等 家にあるものをよなだんツリーに飾りました。

11/25
・空き家より 村上団地 KS丁のAD窓口用のツリーを頂きました。 お届けしたら 大変喜ばれました。

図 B.5 UR 米本団地管理事務所　生活支援アドバイザーさんによる日誌 5